

令和4年度

淑徳大学地域支援ボランティアセンター活動報告書
淑徳大学地域共生センター開設準備における報告書



淑 徳 大 学

巻 頭 言

本センターは、福祉の大学である淑徳大学の歴史とともに、学生・教職員等の地域支援・ボランティア活動の推進を図るため、本学の建学の精神である「利他共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育研究と社会貢献に資することを目的として、東日本大震災を経緯に全学的に設置されたものです。

令和4年度は、本センターがこれまでに行ってきた東日本大震災にかかるパネルシアターキャラバン、スタディツアーの実施による学生と教職員の参加プログラムの実施に加え、令和5年度にむけて、山口学長の方針として本センターを「淑徳大学地域共生センター」として発展改組するべくその設置準備を令和3年度より進め、その準備期間の最終年度でありました。おかげさまで、令和5年度より淑徳大学地域共生センターがスタートする目途がつき、令和3年度後学期より、「淑徳大学地域共生センター」学習プログラムを前倒しで実施するなど展開がはじまっています。

また、令和5年度より「新生淑徳大学」による全学共通科目S-BASICが開始されますが、同時期のスタートでもある「淑徳大学地域共生センター」は、S-BASICに位置づく「地域活動と社会貢献」（令和6年度より開講予定）という全学生への必修科目との関連性に着目し、淑徳大学地域共生センターで用意した地域共生活動に関していつでもどこでも動画で学ぶことのできる4科目（これを「T-BASIC」といいます）との関連づけをし、正課科目とそれ以外の科目・場での学びとを車の両輪の関係として位置づけました。

本学は、新型コロナウイルス感染症、戦争といった不安定で不確実な時代において、そして学内外の地域環境が地域ごとに変容しているなかで、地域と共にある大学として、学生、教職員が、地域社会の実態、共生（ともいき）、利他共生の精神を学び、そして「体験」という地域社会への参加と協働の機会を再度強化することで、福祉の淑徳大学としての存在と価値をさらに創出させようとしています。そうした時期において、本センターが「淑徳大学地域共生センター」として発展改組し、全学的に展開されるセンターが千葉・東京・埼玉の各キャンパス拠点に位置付けられ、地域社会との交流の拠点が図られたと本学の歴史に刻まれたならセンター長としてこの上ない幸いです。

さて、本書は、令和4年度の本センターの活動を中心とした報告書です。全学的な取り組み、活動内容をご理解いただくとともに、プログラムに参加した学生の成長を読み取っていただければ幸いです。本学の存在のなかに、本センターの取り組みが溶け込み、教職員や学生における利他共生の考え方と行動が日常化し、淑徳大学のふくし文化がはぐくまれ、確実に地域社会に根付いていくことを願い、最後に関係の皆様にお礼を申しあげ、巻頭言とさせていただきます。

淑徳大学地域支援ボランティアセンター長 山下 興一郎

目 次

巻頭言

1. センター活動	1
第11回 パネルシアターキャラバン	3
災害時のシミュレーションと防災意識を高める	45
2022年度 スタディツアー	57
認知症サポーター養成講座	89
2. 各キャンパスにおける活動内容	93
千葉キャンパス	95
千葉第二キャンパス	97
埼玉キャンパス	98
東京キャンパス	99
3. 淑徳大学地域共生センター開設準備における報告	101
淑徳大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化 中間まとめ	103
令和4年度 淑徳大学地域支援・ボランティアセンターの運営等について（合意・共有事項）	116

1. センター活動

淑徳大学 復興支援プログラム

第11回 パネルシアターキャラバン

淑徳大学 復興支援プログラム ～パネルシアター キャラバン（11）～
2022.8.30（火）～9.1（金）

◆目 的

大学地域支援ボランティアセンター主催の復興支援プログラム「パネルシアターキャラバン」は、淑徳発祥の「パネルシアター」を学生たち自ら上演し、子ども達を始め被災地の方々と交流を深めることを目的に実施しています。

パネルシアターを通して多くの笑顔が花開くように広がることを願いながら続けています。また、被災の現実と復興の現状に触れ、本学の建学の精神を体験的に学ぶボランティア活動です。

パネルシアターに興味関心のある方、授業でやったことのある方、どこかで体験したことのある方、どなたでも大歓迎です。感染症対策を万全に行いながら、一緒にパネルシアターで交流しましょう。

◆スケジュール ※感染状況により、内容が変更となる場合があります。

日 程	主 な 活 動 内 容（案）※実施施設は現在調整中
8月8日（月）	事前研修・打合せ※参加必須 日 時：8月8日（月）10：30～16：00 場 所：埼玉キャンパス 1号館307室 ※アクセスは大学HPにてご確認をお願いします 持ち物：筆記用具、昼食、飲み物 別日程にて、Zoom等により事前打ち合わせあり
8月30日（火）	07：00 東京駅集合（団体割引の為、途中乗車はできません） 07：16 東京発→09：21 一ノ関着（JR新幹線はやぶさ101号・盛岡行） マイクロバスで移動 09：30～12：00 一関 愛心幼稚園訪問（パネルシアター公演・交流） 一関幼稚園、むつみ幼稚園の園児も愛心幼稚園に合流 12：00～13：30 昼食 一関市内視察（中尊寺他） 15：30 マイクロバスで移動 17：30 宿泊所に到着（夕食後、ミーティング） 宿泊先：気仙沼市内のホテル（ラ・ジェント・イン気仙沼）
8月31日（水）	08：30 宿泊所出発 マイクロバスで移動 09：30 気仙沼カトリック幼稚園 11：30 昼食 14：30 陸前高田 東日本大震災津波伝承館（一本松）視察 マイクロバスで移動 17：00 宿泊所到着（夕食後、ミーティング） 宿泊先：気仙沼市内のホテル（ラ・ジェント・イン気仙沼）
9月1日（木）	08：30 宿泊所出発 マイクロバスで移動 09：30～12：00 大船渡 海の星幼稚園訪問（パネルシアター公演・交流） 12：00 昼食 13：30 大船渡出発 マイクロバスで移動 一関市内（巖美溪、ガラスパークなど）観光 16：49 一ノ関発JR新幹線はやぶさ110号・東京行（東京着18：56）

事前研修

第1回目：8月8日（月）10時30分～16時00分

場所：埼玉キャンパス（予定）

内容：参加者顔合わせ、ボランティア活動の心構えを学ぶ、現地での活動プログラムについて（パネルシアタープログラム作品決め・練習等）

第2回目：参加者に合わせて実施

場所：Zoom

持ち物について〈パネルシアター関係〉

◆分担した持ち物

後日相談

◆送付する物

後日相談

◆各自の持ち物

- 上履き ○着替え ○洗面具類
- 動きやすい靴 ○保険証（またはコピー）
- お金（集合場所までの交通費、現地での朝食夕食以外の飲食代は各自の負担になります）
- 常備薬 ○携帯電話
- 手をふくタオルやハンカチ等（1日1枚） ○その他各自必要なもの

〈パネルシアターキャラバン 訪問先などの関係施設所在地〉

	施設名	所長・代表者	住所	電話
1	一関幼稚園	佐々木泰子	岩手県一関市 字釣山31-4	0191-23-5153
2	気仙沼カトリック幼稚園	小松 智子	宮城県気仙沼市南町1丁目1番1号	0226-24-0511
3	陸前高田 東日本大震災津波伝承館 いわてTSUNAMIメモリアル		岩手県陸前高田市気仙町字土手影180 高田松原津波復興祈念公園内	0192-47-4455
4	大船渡 海の星幼稚園		岩手県大船渡市大船渡町字地ノ森47-3	0192-26-5222
5	巖美溪		岩手県一関市巖美町字滝の上地内	0191-23-2350
6	サハラガラスパーク		岩手県一関市巖美町字滝の上263-1	0191-29-2288



参加者

学生合計 11 名

	キャンパス	学籍番号	学科	学年	氏名	性別
1	千葉キャンパス	C1E029	教育福祉	2	加瀬 暖奈	女
2	第二キャンパス	C2F016	栄養	1	遠藤 美月	女
3	第二キャンパス	C2F028	栄養	1	加藤 杏菜	女
4	第二キャンパス	C2F062	栄養	1	田丸 麗愛	女
5	埼玉キャンパス	21K024	こども教育	2	大坂谷美咲	女
6	埼玉キャンパス	21K041	こども教育	2	金丸 果穂	女
7	埼玉キャンパス	21K090	こども教育	2	長谷川智哉	男
8	埼玉キャンパス	21K093	こども教育	2	久岡 桃子	女
9	埼玉キャンパス	21K120	こども教育	2	山崎 琴未	女
10	東京キャンパス	H20084	表現	3	山根 早貴	女

引率教職員：教育学部：松家まきこ、藤田佳子

事後研修日程は未定

場所：埼玉キャンパス

内容：報告会（報告書のまとめ）（ポロシャツ返却）

2,000字前後の報告レポートを提出。（写真も入れてください。A4サイズ 2 枚）

報告書締切日：9月10日（日）

はじめに

淑徳大学教育学部 准教授 松家 まきこ

このたび、2011年3月11日の東日本大震災の復興支援として2011年より始まったプログラムに、淑徳大学4キャンパスの学生10名と、大学地域支援ボランティアセンターの成田様、客員教授の藤田佳子先生と伺わせていただきました。

パネルシアターの上演は、一関市の愛心幼稚園、気仙沼カトリック幼稚園、大船渡市の海の星幼稚園の3か所で行いました。どこにいても、子どもたち、先生方が笑顔いっぱいに迎えてくださり、パネルシアターを通して心ふれあう時間を過ごさせていただきました。そして、一関では、私が駒沢女子短期大学に勤めていた頃からお世話になっている菅原順一先生が笑顔で迎えてくださり、学生たちに造形講座をしてくださいました。また、私が震災当初から毎年訪れている陸前高田では、保育士の鈴木和枝先生と子育て支援センターの菅原実黄子さんと再会し、あたたかな時間を過ごすとともに、震災当時の貴重なお話を伺わせていただきました。



陸前高田の東日本大震災津波伝承館では、映像や写真を通して震災当時やその後の歩みを学び、胸が詰まる思いがしましたが、10年を過ぎても、こうして勤務校の皆様のサポートのもと、被災地の方々と心の交流を続けていけること、そして、こうして毎年楽しみに待っていてくださる方がいることに、心から感謝しました。

今回最も嬉しかったのは、淑徳大学の4キャンパス全てから学生が参加してくれたことです。10名中4名は、今回はじめてパネルシアターに触れる学生でしたが、子どもたちに笑顔を届けたい一心で、日々、練習に励み、公演を重ねるたびに成長していく学生の姿はほんとうに頼もしく、公演先では、子どもたちのキラキラひかる眼差しに応じて最高のパフォーマンスを届けることができました。

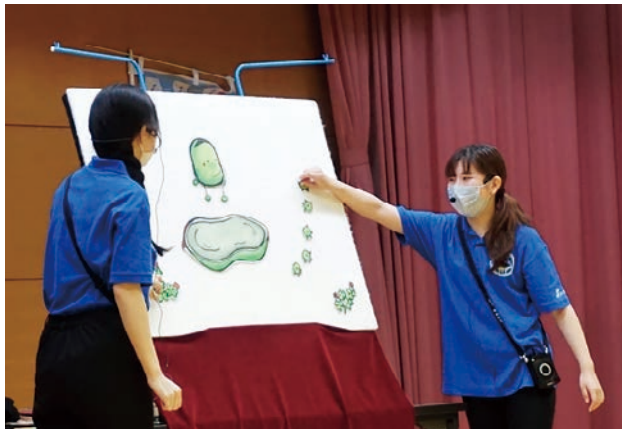
学生の報告書からは、はじめて子どもたちの前で演じたドキドキ感や、パネルシアターを通してたくさんの方々と心を通じ合わせることができた感動が、ひしひしと伝わってきます。ぜひ、記録写真からも、学生たちの目の輝きを感じていただければ嬉しいです！

一関の菅原先生、気仙沼、陸前高田、大船渡の子どもたち、先生方みなさま、鈴木和枝先生、菅原実黄子先生、ありがとうございます。そして、企画から引率まで、きめ細やかにサポートくださった淑徳大学地域連携ボランティアセンター姉帯様、成田様、そして、客員教授の藤田先生にも心より感謝申し上げます。何より、淑徳学園発祥のパネルシアターを通して、4キャンパスの学生が揃って被災地の方々と心を通わせ、笑顔を届けることができたことを、心より幸せに思います。誠にありがとうございます！

パネルシアターキャラバンで得たもの

総合福祉学部 教育福祉学科 2年 加瀬 暖奈

前回のパネルシアターキャラバンに続いて今回も参加することができました。今回は、実際に現地に行き、子どもたちの前で公演をすることができました。子どもたちや先生方が、手を叩いたり、声掛けに反応して返してくれたり、体を揺らして一緒に踊ってくれたりしました。パネルの歌にのって楽しそうにしている子どもたちを見て、演じている私も自然と笑顔になっていました。パネルシアターには、いろんな力があると感じました。



練習では、お互いに意見を出し合い充実した時間を過ごすことができました。何度も練習し、「ここはこういうことだと思うからこのように表現したい」というような意思をそれぞれが持ち、より良いものを作ろうとしていて練習時の空気感もとても良いものでした。去年の私はパネルを演じるのみでしたが、今年はピアノの伴奏にも挑戦しました。今まで発表会などでクラシックの曲を弾く機会はありませんでしたが、パネルに合わせて音を付けるというのは初めての体験でした。演技手に合わせるのももちろん、園児たちが歌いやすいようにゆっくり弾くなど探り探りでしたが、良い経験になりました。本番で子ども

たちが、大きな声で楽しそうに歌っているのを見て、安心したと同時にとても嬉しい気持ちになりました。「ほよよん行進曲」など子どもたちの前で踊る時は、体を大きく動かして、全身を使って演じました。新型コロナウイルスの事も子どもに近づいて何か交流をするということができませんでしたが、一緒に踊ることで子どもたちを近くに感じることができました。大学で保育者の進路を選択して、自分に向いているだろうかと進路について悩む時期もありましたが、子どもたちの様子を見て、子どもの近くで成長を見守る仕事がしたいと思いました。

キャラバンの公演と並行して、被災地で震災について学習しました。町中にある津波到達点の表示は、自分の身長、近くの建物よりもはるか高いところにあり、震災当時の事を考えるととても心が痛くなりました。東日本大震災津波伝承館では、震災のことや震災当時の様子、そして復興について知りました。展示物や震災後に整備された町を見て、防災教育の大切さを感じました。

震災から11年がたち、打ち切られた被災地支援が多くある中で、こうして今年も来てくれたことが嬉しいとお言葉をいただいたときは、とても嬉しかったです。それと同時に、一度深く傷ついた心や悲しみは、何年たっても、消えるものではないのだと改めて思いました。

今回パネルを見てくれた子どもたちは、みんな震災を体験していません。そのような子どもたちがこれから世の中には増えていきます。震災を知る一人の人として、何かできることはないだろうかと考えるきっかけになりました。

今回もパネルシアターキャラバンに参加することができてとても良かったです。自分の知らなかったことを学んだり、自分のスキルアップにつながるきっかけがあったりと得るものが多くありました。先生のパネルは子どもたちの興奮がすごかったです。大学生の私たちも、一緒になって楽しんでいました。みんなを引き付けて、離さず楽しませる、演技方引き込み方を私も身に付けたいと思います。学んだことや反省点を普段の学びや今後のサークル活動に活かしていきたいです。

パネルシアターキャラバンは私にいろんなきっかけをくれます。前回のパネルシアターキャラバン参

加後に私は、パネルシアターの面白さを知り千葉キャンパスのパネルシアターサークルに所属しました。そして1回目と同じように2回目も、メンバーに恵まれて、楽しく活動し有意義な時間を過ごすことができました。今回このメンバーに出会い活動できてとても良かったです。パネルシアターは私に様々な縁をくれます。この出会いを大切にしていきたいです。

今回の練習はなかなかハードなスケジュールでした。それぞれ個人の予定があり、一緒に練習するために集まるのも大変なことでしたが、一人ひとりのより良いものを作りたいと思う気持ちが強く、短期間の練習ではありましたが、とても良いものを作れたと思います。キャラバンの活動はこれで終わってしまいましたが、今後も交流を続けていきたいと思っています。

新型コロナウイルスの心配があるなかで、公演を受け入れてくださった園の先生方、熱心に指導してくださった先生、東京・千葉・埼玉というキャンパスの枠を超えて一緒に活動したメンバーの皆さん、すべての方に感謝いたします。ありがとうございました。



パネルシアターを通じて感じる思い

看護栄養学科 栄養学部 1年 遠藤 美月

今回私は、初めて「パネルシアターキャラバン」というボランティアに参加した。

私がパネルシアターキャラバンに参加した理由は、私自身がパネルシアターというものを知らず、どのようなものか体験してみたかったということと、東日本大震災の被害が大きかった東北が10年たった今、どのようなになっているのか知りたいというのが主な理由である。

今回のボランティアは8月30日から9月1日の3日間にかけて行われた。

1日目の一関愛心幼稚園では私は「カレーライス」を担当した。初めてのパネルシアターで失敗したらどうしようと緊張していたが、どの子どもたちも大きな声で歌ったり、私たちの「カレーには何が入っているのかな?」という質問に対して積極的に答えてくれたり楽しんでいる様子が見られて嬉しかった。また、練習の時に予想していた答えと違う答えが時々返ってきたことや質問した時に自分の意見が聞こえるように何度も言ってくれる子どもが多く、なかなかざわめきが収まらないことがあり、困惑してしまったことがあり、実際にパネルシアターを行うことは必ずしも練習通りにいくとは限らないということを体験することができた。



2日目の気仙沼カトリック幼稚園では「たまごでお料理」を担当した。子どもたちとの距離が少し遠く、パネルが見えづらくなることであまり楽しんでもらえなかったらどうしようと思ったが、子どもたちに楽しんでもらうにはまず自分が楽しもうと思うことで伸び伸びと行うことができた。また、たくさんたまご料理が出てくることで子どもたちが「まだ食べるの?」と驚いていたため、台本になかったセリフを少し入れて、状況に合わせてアドリブも入れることができた。

子どもたちも楽しんでくれている様子で、中には見入ってしまったばかりに後ろからどんどん前に出てきてしまっている子もいた。

午後からは陸前高田にある東日本大震災津波伝承館を訪れた。津波伝承館では津波によって流されたトランペットや3tもする橋の一部、津波によって曲がってしまった標識や看板、3月11日に撮られた津波が街を襲ってくる映像、日本列島の下プレートが3月11日にどれほど引っ張られていたのかわかるような映像、実際に津波がやってくるのを目の当たりにした人の経験談など、津波の凄惨さがうかがえるようなものがたくさん展示されていた。

津波で流されて泥まみれになっているトランペットを見て、この持ち主は学生だったのかな…、急に部活動ができなくなってかわいそうだな…。と胸が締め付けられる思いだった。

津波が街へ来る瞬間の映像集の中には車で逃げている瞬間もあり、前方に進む車が急にUターンをしたと思ったらその直後に津波が見え、車の10cm後ろに津波が迫っている状態で逃げている映像が出てきたときには思わずこちらも緊張した気持ちで見えてしまっていた。あの後に逃げきれたのかどうかとても気になる映像であった。また、経験談では、逃げる前に話した人が津波に巻き込まれて亡くなっていた

ことを後で知ったという話や自分の夫が頑なに逃げないため仕方なく自分が逃げたところ、自分の夫がいる家が流されているのを見たという話があった。

外には奇跡の一本松と呼ばれる、震災の被害が大きかったにもかかわらず、一本だけ残った松の木があった。

3日目の海の星幼稚園では、もう一度カレーライスを担当した。1日目も2日目も大きな失敗がなかったため3日目はあまり緊張せずにできた。3日間の中では一番人数が少ないように感じられたが、1日目と2日目の子どもたちと同じくらい歌声が大きく、楽しそうにしている様子が見受けられた。公演が終わった後に幼稚園の先生から「いつもの子どもたちは集中できる時間が15分程度ですが、今日は1時間も座っていました。それほどに楽しかったみたいです。」という話を聞き、子どもたちが楽しそうな様子は見ていたが、実際に言葉で感謝を伝えられるとこんなに嬉しいのだなと思った。



この3日間で、パネルシアターを通して、子どもたちに楽しんでもらうためにどうすればいいのか仲間内で考えあってどんどん改良していき、喜んでもらうことや、テレビでしか見たことがなかった東日本大震災後の岩手県や宮城県の復興した街並みを実際に見ることができた。

復興した街では、ほとんどの家や建物が坂の上にあった。2日目と3日目の幼稚園も高い坂の上にあった。



津波伝承館にあった昔の人が「ここより下に家を建てるな」という石碑を立てていたという話と、いろいろな場所でここまで津波が来たという印を建物の壁に付けていることを思い出した。過去の出来事を忘れないようにしているのだと思えた。

帰りの新幹線の中で3日間の中で出会った子どもたちの顔を思い出していた。今、幼稚園にいる子たちはあの被害の大きかった東日本大震災を経験していない。もしかしたらこれから先の人生で一回は東日本大震災と同じ規模の大地震や津波に遭遇するかもしれない。そう思うと心が苦しいが、先人たちの教を教訓に無事に成長してほしいと願った。



初めてのパネルシアターキャラバン

看護栄養学部 栄養学科 1年 加藤 杏菜



2022年8月30日から2泊3日で、復興支援プログラム～パネルシアターキャラバン～に参加しました。参加した主な理由は、Sナビで参加募集が送られてきたときに「行ってみたい!!」と思い、応募しました。研修があるまで、パネルシアターとはどのようなものなのか、ドキドキ・ワクワクしていました。

8月8日の研修に参加し、パネルシアターとは何か教えてもらいました!また、先生方の作品を見て、こんなに楽しいものがあるのだと驚きました!「ふわふわおばけちゃん」は参加型で、一緒に楽し

めました。「虹」は、歌うだけではなく手話やパネルシアターを使うことでいつもとは違う雰囲気を楽しむことができました。これを、私達がやるのかと思うとワクワクしました。そのあと、少し練習をしました。思っているより、スムーズにパネルを出したりしまうのが難しく、「先生たちのように楽しくできるのだろうか」と不安が残りました。

また、震災の様子を改めて知るために、動画や写真を見ながら、当時の話を全員でしました。私は、当時小学1年生だったので、詳しくは覚えていませんでした。しかし、皆さんのお話を聞いているうちに、テレビの中で見たことがない映像が流れていたことや、石油工場の爆発で、空が真っ赤になっていたことなどを思い出しました。改めて、復興を願う意味でもパネルシアターをがんばろうと思いました。

8月17日 千葉キャンパスでの練習がありました。

「森のくまさん」の練習は、歌詞を覚えるところから始まりました。その日は、ぎこちない「森のくまさん」が完成しました。「ぼよよん行進曲」は、最初に踊りを覚えました。覚えたあと、もう一度踊ってみると、最初の足踏みが長いため、子どもたちが飽きてしまうのではないかと考えました。そこで、先輩方の過去の動画を見たり、某動画サイトなどを見て足踏みの途中に振り付けを追加しました。他にも、「カレーライス」や「たまごをポン!」の歌詞を覚えました。みんなで動画を送り合って、家で歌ったり踊ったり、自主練習をしました。

8月27日、千葉キャンパス組で最終調整をしました。「森のくまさん」では、約1.5×1メートルのパネルの上で貼る場所の調整をすることで、世界観が広がることを教えてもらいました。そらめくんの話で、三日月と太陽の位置を少しパネルから飛び出させることで、奥行きが生まれました。同時に、



自分の番の時、パネルを張ることだけではなく、場所にもこだわろうと思いました。他のパネルも、前回よりスムーズに進んでおり私もがんばろうと更に気合いが入りました。

8月29日 東京キャンパスで最終打ち合わせをしました。曲の順番や、マイクの打ち合わせ、通し練習もできました。

8月30日 いよいよ出発です！ドキドキ緊張感もありながら、新幹線に乗り一ノ関に行きました。緊張する暇もないまま、1講演目！「ほよよん行進曲」で、みんな踊ってくれてとてもうれしかったです。マスク姿でしたが、お姉さんにはみんなの満面の笑みが見えたぞ～！手遊びも一緒にやってくれて、うれしかったです！！2日目、3日目と、どんどんつなぎが上手になり、子供たちができるだけ飽きないように、臨機応変に行動できました。

3日目に訪問した「海の星幼稚園」では、「発達障害の子が始めて1時間集中して座ることができた」と先生から伝えられ、とてもうれしい気持ちになり、「やってよかった」と思いました。

3講演で、緊張感よりも、パネルシアターを全力で楽しむことに専念できるようになりました。そして、1時間という長い間付き合ってくれた園児は、聞いてくれて、あのキラキラな目で見えてくれて本当にうれしかったです。帰り際に「また、明日来てねー」と言ってくれる子がいて、「また行きたい！！」と強く思いました。見えなくなるまで、手を振ってくれる子もいました。本当に可愛いです。

津波伝承館では東日本大震災の当時の様子が、写真・映像・実際に瓦礫から発見されたものなど、様々な形で残されていました。その中でも印象に残ったのが、「鍵盤ハーモニカ」です。当時、同い年ぐらいの子が、弾いていたのだと思います。その当たり前の日常が急になくなり、人は流され、家はなくなり、どんなに辛かったのだらうと思うと、泣きそうになってしまいました。しかしこれは事実であり、受け止め、このようなことが二度と起こらないようにしなければなりません。

訪問した幼稚園もすべて坂の上にあります。あの大きな津波に飲み込まれなかった幼稚園は「奇跡が宿っている」のだと思いました。

練習から、当日まで本当にありがとうございました。このメンバーに会えて幸せです。もろもろの手配から、当日の動きまでスムーズに進んだのは先生方の愛があつてこそです。本当に充実した日々を過ごすことができました。本当にありがとうございました。また、このような機会があつた際には是非参加したいです！！

テレビのインタビューに答えて、新聞に載って…岩手で時の人になったかも！？



希望の樹

緊張から楽しさまでの変化

看護栄養学部 栄養学科 1年 田丸 麗愛

私は今回、淑徳大学の東日本大震災のボランティアである「パネルシアターキャラバン」に参加した。参加した理由は、もともとボランティアというものが好きだからというのがある。加えて、福島県から千葉県に引っ越してきた友人の影響を受け、東日本大震災の被災地を自分の目で見たいというのもあった。

最初、「パネルシアター」というものはどのようなものか私は全く知らなかった。インターネットを用いて検索し、初めて知った。しかし、実際に自分がやっている様子を想像することができなかった。おそらくできると思ったが、それでも8月8日の事前研修までは非常に不安だった。

最初の事前研修の日である8月8日。パネルシアターを実際に見て、そして触れた。初めてパネルシアターと触れてとても楽しかった。自分でもパネルシアターをしてみたい。そんな気持ちが芽生えた。しかし、不安はまだ多少あった。パネルシアターをやってみようという気持ちとは裏腹に自分にもできるものなのか、また、緊張で前に立つことができるか心配していた。

8月17日と8月27日。パネルシアターの練習が千葉キャンパスで行われた。私が担当したのは、「森のくまさん」と「カレーライス」だった。初めは緊張していて、どのように声をかけたら良いのか、どのように貼ったら良いのか全くわからなかった。しかし、練習を何度か続けていくうちに緊張や心配が少しずつ消えていった。

8月29日。東京キャンパスでパネルシアターの通し練習が行われた。ボランティアのメンバーの目の前でパネルシアターをするということは非常に緊張した。言葉に詰まったり、次は何をするのかを忘れてしまった。2回目の通し練習では、順調にパネルシアターをすることができたが、翌日のボランティアにはまだ多少の心配の気持ちがあった。

ボランティア1日目の8月30日。始発の電車に乗り、ボランティアのメンバーと合流することができた。新幹線に乗り、一関に到着してからすぐに一関愛心幼稚園でパネルシアターの公演があった。園児の人数も多く、テレビ局や新聞社の人もいたため緊張はしたが、不思議と大丈夫だという気持ちもあった。園児の前でパネルシアターをしてみて、想像以上に自分も楽しめたことに気づいた。この時からパネルシアターはとても楽しい、もっと色々な人に見てもらいたい、という気持ちになった。パネルシアターの公演が終わったあと、お昼ご飯を食べ、巖美溪やサハラガラスパークというところに向かった。溪谷は初めて見るので、非常に楽しみだった。巖美溪では雨が少し降っていたため、土がぬかるんで



いた。初めて見る厳美渓はとても綺麗でこのような場所があったことに驚いた。サハラガラスパークでは、種類が豊富で色鮮やかなものが多かった。この後に、温泉にも行ったが良いお湯だった。ホテルにチェックインし、夜ご飯を食べ、21時からパネルシアターの練習が始まった。このときのパネルシアターも楽しく、緊張や不安はなくなっていた。



ボランティア2日目の8月31日。気仙沼カトリック幼稚園でパネルシアターの公演を行った。実際に1日目で公演をしてから、自分に自信がつき、緊張よりも楽しさが勝っていた。私たちが問いかけたことに対して園児の反応が返ってくるということが本当に楽しく、パネルシアターをやって良かったという気持ちになった。一緒に子どもたちとパネルシアターを楽しんで自分も笑顔になった。公演が終わり、陸前高田にある「俺っ家」でお昼ご飯を食べた。どの料理も美味しく、また陸前高田に来た際には食べたいと思った。その後、「東日本大震災津波伝承館」の視察に行った。当時小学1年生だった私にも東日本大震災は記憶に新しい。津波の被害などの映像を見て辛くなったが、実際にこのような震災があったことを忘れてはいけないと思った。被災した人の話を聞き、津波の被害は非常に大きく、今自分がいる場所も全て海になっていたことは怖いと感じた。津波の高さは、想像以上に高く、このような津波が来たことに怖さがあった。

ボランティア3日目の9月1日。大船渡にある海の星幼稚園でパネルシアターの公演をした。このときには、緊張や心配ではなく、どのようにしたら子どもたちに楽しんでもらえるかを考えていた。「カレーライス」では野菜がお鍋に入るときに、人参なら「にんにんにん……」、玉ねぎなら「たまたま……」と入っていくようにすると子どもたちの反応が良く、嬉しくなった。最初は緊張や不安だけで、自分自身も楽しむということはできていなかった。しかし、子どもたちとパネルシアターをしてみて、自分も楽しんで笑顔になれることに気づいた。パネルシアターを行う場所や人によって、その公演はまた違った雰囲気だった。パネルシアターは一期一会なものであり、楽しいボランティア活動になった。

最後に、沢山の笑顔や楽しさを与えてくれた子どもたち、現地の方々、バスの運転手の方、また藤田先生、松家先生、成田さん、本当にありがとうございました。



パネルシアターで子どもたちに笑顔を

教育学部 こども教育学科 2年 大坂谷 美咲

私は今回初めて、淑徳大学復興支援プログラム「パネルシアターキャラバン」に参加した。私は普段、パネルシアターサークルPITAPETAに所属しており、子どもたちの前で公演することは初めてではなかったが、遠くの地域へ行って公演することは経験したことがなかったため、この機会にぜひ経験したいと考え参加した。また、東日本大震災が及ぼした被害を自分の目で見て確かめ、忘れてはいけない教訓として広めていきたいと考えたことも参加した理由である。

1日目は到着後すぐに一関市の愛心幼稚園で公演をした。広い体育館でテレビ局の取材も来ており少し緊張したが、子どもたちの反応が嬉しく、自分自身も楽しんで公演をすることができた。

お昼は図画工作Iの授業でお世話になった、菅原先生のご自宅でお弁当を食べた。先生の作品が家中にたくさん飾られており、身近な材料で子どもが楽しめるものをこんなにも作れるなんてすごいなと感じた。

その後、厳美溪へ行き、つり橋をみんなで渡って自

然と触れ合ったり、ガラスパークへ行ってたくさんの綺麗なガラス工芸品を見たりして観光を楽しんだ。また、急遽亀の月ホテルの日帰り温泉に入り、心も体も温まった。

2日目は気仙沼カトリック幼稚園での公演だった。園まで急な坂道があり、荷物を運びながら坂道がきついなあと感じながら登っていた。しかし、松家先生が「この坂道があったおかげで津波の被害から免れ、通っていた園児は助かった」とおっしゃったのを聞いて、命を繋いだ坂を簡単にきついだなんて思っただけなのではないかと気付かされた。

また、その日は松家先生が「つばさをください」というとても綺麗な作品を演じていたが、「羽が生えて空を飛んでいく様子が天国へ上っていくみたい」と言っていた園児がいたという話を聞いて少し驚いた。震災の怖いイメージへ結び付けてしまったのかと少し不安になったが、色々な捉え方があるのだなと感じた。

お昼は陸前高田市にある「俺っ家」で和食を食べ、その後「東日本大震災津波伝承館」へ行った。当

時の津波の様子が防犯カメラや住民の撮影した映像に残っており、それらがシアター上映されていた。特に印象に残っているのは、避難していた車の目の前に津波が来てUターンする映像であり、思わず「逃げて」と呟い

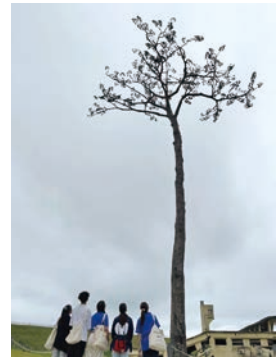


てしまった。自分が経験したわけでもないのに、見ていてハラハラした。また、松家先生のお知り合いで震災当時、保育士だったかずえさんという方が、「自分の10本の指一本一本で子どもたちを引っ張り、津波を見せないようにして高台へ避難した」というお話を聞いて、自分の身を守ると同時に子どもたちの命も守らなければいけないという一刻を争う状況でとても怖いと感じ、もし自分自身が同じ状況に置かれたらと想像しただけでも怖いと感じた。

伝承館ではこれまでの震災の歴史も紹介していたが、明治時代にも津波があり当時の人々が「ここより下に家を建てるな」という石碑を立てたのにも関わらず、このような被害を受けてしまったというのを初めて知った。長い月日が経つと忘れられがちではあるが、やはり昔の人たちの教訓は忘れてはいけないものであると感じた。

一通り伝承館を見た後は、近くの一本松を見に行った。細いのに津波に流されず、幹には流されてきた建物にぶつかったと思われる傷跡があり、よく耐えたなと感じた。伝承館の周りは津波が来たとは思えないくらい、とても静かな場所だった。

陸前高田市の海沿いをバスで移動中に外を眺めていると、どれも新しい建物ばかりであったし、「津波の高さここまで」という印がしてある建物がたくさんあり、こんなところまで津波が来たのかと想像しただけで怖いと感じた。



3日目は大船渡市の海の星幼稚園での公演だった。ベアの友人と「虹」のパネルシアターを急遽公演することになったため、前日の夜は念入りに練習を行った。しかし本番では緊張のせいか一番最初からミスをしてしまったが、みんなが手話で虹を作り綺麗に終えることができたので良かった。また最後に園児たちが歌のプレゼントを披露してくれた。これまでのパネルシアター公演で子どもたちからお返しもらったことは初めてだったため、とても嬉しかった。

お昼は大船渡プラザホテルでパスタを食べ、その後は道の駅へ行きお土産を見て回り、また道の駅の隣にあった平泉世界遺産ガイダンスセンターへ行き観光をした。

この3日間、3つの園でパネルシアター公演をしたが、どの幼稚園でも園児たちと先生方が私たちのパネルシアターをずっと心待ちにしていた様子でとても嬉しかった。また、自分の行ったことのない遠い場所へ行ってパネルシアターをすることがとても新鮮だったし、普段のサークルの仲間たちと行くのではなく、このキャラバンで初めて知り会った東京・千葉キャンパスの人たちも一緒だということが、お互いに良い刺激となったと感じる。

パネルシアター以外でも、実際に震災の被害を受けた場所へ自分の足で行き、見たり感じたりしたことはこの先も忘れてはいけないと感じた。また、みんなで色々な場所へ観光したり、食べたり、夜にホテルで練習したこともとても良い思い出と経験になった。

今回の学びを活かして、これからも色々な場所でパネルシアターをしていきたい。



人と人とのつながりを通して

教育学部 こども教育学科 2年 金丸 果穂

私は、「パネルシアターキャラバン」に初めて参加した。この活動があることは前々から知っていて興味を持っていた。この活動に参加しようと思った主な理由は、自分の出身である東北でパネルシアターを演じることができるからだ。大学に進学するために埼玉に引っ越してきて、地元や東北での子どもたちと接する機会というのがなかなかなかった。まだどこに就職するかなどはぼんやりとしか考えていないが東北で大学の活動をやってみたいという思いはあった。だからこそ今回のパネルシアターキャラバンに参加することを決めた。

1日目、一ノ関駅に着いてすぐに一関愛心幼稚園に向かいパネルシアター公演を行った。先生方や子どもたちがとても温かく出迎えてくれたのが印象的だった。ホールに子どもたちが集まった時にとてもびっくりした。今までサークルなどで行ったパネルシアターの公演の時よりもはるかに人数が多かった。コロナの関係で一関幼稚園の園児にお会いすることができなかったが、それでも多い人数だった。実際に演じてみると少し緊張していたことが嘘のように自分から楽しむことができた。一緒に歌ってくれることがとてもうれしかった。楽しんでもらえるということが、どれほどうれしいものか実感することができた。1時間という子どもたちにとっては少し飽きてしまうかなと思うくらいの長さの公演だったが、私自身もあっという間と感じたし、子どもたちも最後まで楽しんでくれたと感じた。

2日目、気仙沼カトリック幼稚園で公演を行った。この幼稚園は坂の上にある幼稚園だった。津波の被害が大きかった地域だということはバスに乗っていて窓から見た建物の壁に記されている津波の高さや津波の跡から重々わかっていた。しかし、この坂を自分が上る時は正直特に何も考えていなかった。あとから話をお聞きして、この坂が生死を分けたということが分かり津波の悲惨さを実感した。降りる時にはこの坂には重要な意味があったことを思いながらバスに向かった。おいしい昼食をいただいた後、陸前高田にある東日本大震災津波伝承館を訪ねた。ここで私はたくさんの衝撃を受けることになった。まずはモニターで地震が起きた原因が矢印で表されているものを観た。東日本大震災を表す矢印は恐怖を覚えるほどのものだった。その後、映画のような当時の震災の津波を映像で観た。さらに津波で壊されてしまった橋や当時、避難呼びかけなどで走らせていたぼろぼろの消防車を目にした。話を聞くよりも映像を観るよりも津波の悲惨さを感じた。伝承館の周りはきれいにされていて一本松がより印象に残る風景だった。かつてはここに住宅が並んでいたと想像することが正直できなかった。今は穏やかな海が当時は人々の命を一瞬で奪ったという事実がどうしても信じがたかった。でも今生まれてきた子



どもたちや、小学生には当時のことを伝えていかないと知ることはないので、私たちが伝えていくべきだと思った。絶対に忘れてはいけない出来事だと改めて思った。

3日目、大船渡にある海の星幼稚園に訪れた。ここも津波の被害がありながらも高い坂の上にあったため園は無事だったところだ。前日に津波について見て学んだこともあり坂のありがたさを感じた。「パネルシアターキャラバン」で行う最後のパネルシアターの公演が始まった。この3日間で思ったことは、園によって反応が違うということだ。1日目と同じ内容をしたはずなのに初めてやったような感覚になった。自分たちの公演が終わった後、子どもたちが私たちに歌のプレゼントをしてくれた。運動会で歌う曲を披露してくれた。とても元気の良い歌声を聞くことができて私たちの方が元気づけられたような感じがした。その後おしゃれなホテルで昼食をとった後、残念ながら時間がなく見ることはできなかった中尊寺の近くの世界遺産ガイダンスセンターを見学して無事すべての行程を終了した。

今回参加して、一番に感じたことは人とのつながりの温かさだ。初日からほとんどはじめての人ばかりなのに温かく出迎えてくれ、関わりを持つことができたのはこの「パネルシアターキャラバン」に参加しないと実感できなかったと思う。また、改めて東日本大震災の被害や現状を理解することができて、今まで自分でもわかっていたはずだが、認識が甘かったり、自分が思っていた以上のことだったりと考えを改める機会を持つことができてよかったと思う。絶対に忘れてはいけない、伝え繋げなければならないことを今回私たちが実際に話を聞いて、さらに目にしたりすることができたので、これを機に自分たちでも伝えられるようになりたいと思った。

今回、千葉、東京キャンパスの方々にお会いして一緒にいろんなことができたのはこのキャラバンのおかげだ。いつか会える日が来るかもわからなければ、きっと全員集まることも難しいと思う。それでも今回いろんな人と関わりを持つことができて学ぶことも多かった。この様々な出会いに感謝し、これからの大学生活に活かしていきたい。



私にとってのパネルシアターとは

教育学部 こども教育学科 2年 長谷川 智哉

私にとってパネルシアターは、子どもや大人関係なく、たくさんの人たちを笑顔にできるものと考えている。そのような想いで、今回のパネルシアターキャラバンに参加した。

今年は学生10名で開催された。4キャンパス合同での開催ということもあり、様々な学部やサークルに所属している人がいた。学生の中にはパネルシアターに触ったことがない人もいた。私は少し不安を感じた。というのも、練習時間が少ない中でパネルシアターの基本的な動作を覚え、さらに選んだ作品の完成までに至るのかという不安だ。私は埼玉キャンパスのパネルシアタークラブPITA PETAに所属している。そのため、1つの作品を完成させるまでの難しさを身にしみて感じていた。しかし、それは余計な心配だった。練習時間が少ない中、一度の練習を充実したものにし、それぞれ努力をすることができた。その甲斐あって、出発の前日の合同リハーサルでは、ついこの間、パネルシアターに触ったとは思えないような作品の出来栄であった。私たちは、これまで練習してきたパネルシアターの作品を早く見せたいという思いで東京を出発した。



1日目、パネルシアターキャラバン最初の公演は、一関市内にある一関愛心幼稚園だった。パネルシアターデビューのメンバーもいる中、私自身もコロナ禍での久しぶりの公演で少し緊張していた。しかし、これまでに練習の甲斐もあり、子どもたちにたくさんの笑顔を届けることができた。その後、主に岩手県で造形家として活動されている菅原先生のもとを訪れ、これまでに先生が活動されてきた、幼児の造形活動についてのお話を聞きながら、地元の食材を使ったお弁当を食べた。菅原先生が発案した幼児の造形内容は、どれも簡単に作れるが、一つひとつに工夫があり、かつ子どもたちがその後も楽しんで遊べるような教材だった。菅原先生の想いには、子どもたちが楽しんで作れて、遊べるような教材を作るという願いがあるそうだ。今回のパネルシアターキャラバンが開催されるにあたって、子どもたちに楽しんでもらいたいという、菅原先生の想いに近いものがあるのではないかと感じた。



2日目は宮城県へ移動し、気仙沼カトリック幼稚園で公演をした。1日目の公演を含めて、2回目ということもあり、自分たちも子どもたちと一緒に楽しんで、公演ができた。幼稚園へ移動中、10年経った今でも、街の中には東日本大震災の津波跡が残っていた。ここの幼稚園は丘の上にあったということもあり、津波にも耐え抜いたという。幼稚園の中は震災の経験を活かし、地震対策が多くなされていた。公演の中で松家先生の「翼をください」という作品を見た1人の園児が、天国のように見えたと話していた。東日本大震災が10年経った今でも、子どもたちの心の中には、震災の辛い思いや経験が多く残されているのだと改めて感じた。公演中には、子どもたちが笑顔で楽しんでいる様子が見られたが、その心の奥底では、震災への思いが強く残っているのだと思う。その後、私たちは陸前高田にある東日本大震災津波伝承館へ向かった。ここで見た光景は、私は一生忘れないだろうし、忘れてはいけないと思う。言葉では表せないような悲惨な光景が多く展示されていた。東日本大震災から10年が経ち、1つの区切りが経とうとしている。しかし、何年経っても震災の経験は心の奥底に残り、多くの人々を苦しめる。改めて、東日本大震災の悲惨さを学ぶことができた。

3日目、私たちは最後の公演の場所となる、大船渡にある海の星幼稚園へ向かった。パネルシアターキャラバン最後の公演ということもあり、様々な思いを込めながら、パネルシアターを演じきった。公演のお礼として子どもたちから歌のプレゼントもあり、とても楽しく過ごすことができた。その後、道の駅で地元の名産物などを買い、たくさんの思い出作りができた。



今回のパネルシアターキャラバンに、本当に参加して良かったと思う。たくさんの出会いがあり、思い出をつくることができ、学ぶこともできた。子どもや大人関係なく、たくさんの人々を笑顔にでき、そして笑顔にさせてもらった。子どもたちが楽しんでパネルシアターを見てくれることこそが、私たちの原動力であり、これからの成長につながると思う。これからもパネルシアターを通して、たくさんの人々を笑顔にさせたいという思いがさらに強まった。

パネルシアターで届けた笑顔

教育学部 子ども教育学科 2年 久岡 桃子

私は淑徳大学震災ボランティア「パネルシアターキャラバン」に参加した。参加した主な理由は自身がパネルシアターサークル「PITAPETA」に所属しておりパネルシアターが身近であること。自分がパネルシアターを披露することで被災地の方に笑顔になってもらいたいという思いがあったこと。そして、その経験が自分の成長につながると考えたためである。

一日目は、一関愛心幼稚園の公演だった。新幹線で一ノ関駅に到着してからすぐ始まり、心の準備をする時間もないまま子どもたちと対面した。自分が今まで公演してきた中では一番大きな会場で子どもの数も一番多かった。私はこの公演で「へんしんクレヨン」を演じた。子どもたちの前でこの作品を披露するのは初めてで、始まる前はシナリオ通りできるのかと不安になっていた。しかし、実際にやっていくと新しいアイテムを出す度にあがる子どもたちの歓声と笑顔で緊張はほぐれ、演じている自分たちも一緒に楽しむことができた。

公演後の昼食の時間では菅原先生のお家に伺わせていただき、菅原先生が過去に作られた作品を見た。先生の作品は思いつかないような斬新なアイデアが使われており、自分も実践の場で使えるように覚えておこうと思った。その後、厳美溪とガラスパークへ行った。厳美溪は国の天然記念物に指定されており、橋からの景色はとても綺麗だった。ガラスパークではガラスで作られた工芸品がたくさん販売されており、魅力的であった。

二日目は気仙沼カトリック幼稚園に行った。幼稚園は大きな坂の上に建っており、どうしてここに建っているのか不思議に思ったが、東日本大震災の時に園に残っていた園児、先生が無事であったのはこの坂のおかげであることを学んだ。命を守ったこの坂はとても重要で様々な思いが込められて使われているのかと考えた。公演では「はたらくくるま」を演じた。歌がメインであるこの作品は、子どもたちをどう取り込んでいくかが課題であった。振付を大きくしたり、自分たちが車の名前を言った後に耳に手を当てたりして参加してもらえるように工夫した。それによって、子どもたちは楽しそうに一緒に踊ってくれて教室全体が笑顔に包まれた。松家先生の作品である「翼をください」のブラックパネルシアターでは、終了後の子どもたちの感想で『天国はこんな感じなのかなと思った』という感想を聞いて、私たちが表現することで子どもたちの想像の世界も広がっていき、感性が成長するきっかけになるのかなと考えた。

公演後は陸前高田市にある東日本大震災津波伝承館を訪問した。津波が到達するまでの波の変化や今までの地震・津波の情報から映像を通して当時の状況を知ることができた。特に印象に残っているのは、昔の人が残した「これより下に家を建てるな」という石碑によって、被災を免れた地域があったことである。日ご



ろから海とともに生きている人々は、先人の教訓や知恵を用いながら工夫して暮らしてきたのだと分かった。実際に撮影された動画や写真を見て当時幼かった自分の記憶が蘇った。小学二年生の時にテレビで見た映像を実際に起こった地で見るとは感慨深かった。伝承館から見える景色は、残っている建物が数少なかった。中でも残っている建物に書いてある津波がここまで到達したという到達ラインをみて、近辺一体をその高さまで波が襲っていたのだと実感した。松家先生のご友人である、保育士のかずえさんとお会いし、当時の話を聞かせていただいた。子ども10人に対し一人の保育者という状況で両手の指一本一本に握らせて避難したという話を聞いた。かずえさん自身もドキドキしていたが、子どもたちに波にのまれる街の様子を見せないようにするのに必死だったとおっしゃっていた。自分が保育の道に立った時、災害という抗えないものに対して子どもたちを守ることができるのか、実際に体験したかずえさんの話を聞いて考えた。

伝承館を見学した後は、奇跡の一本松を見に行った。特別太くて強い幹には見えないのに一本だけ立っている姿に生命の力強さを感じた。また、付近には植樹活動によって植えられた松がたくさんあり、ここに住む人々だけでなく自然も前をむいて未来へ進んでいることが分かった。

三日目は大船渡にある海の星幼稚園での公演だった。一日目と同じ演目だったのだが、急遽「にじ」のパネルシアターを演じることになり不安だったが無事終えることができた。一日目に頂いたアドバイスをすぐに実践することができた。園長先生が、入園したばかりで一時間も座ってられない子どもが、パネルシアターを飽きずに座って楽しんでいたということをおっしゃっていて、とても嬉しかった。

今回、震災ボランティアに参加してみて、被災地の現状を学ぶことができた。震災を経験していない世代に保育者になったとき、どう伝えていくのか考えるきっかけになった。そして、パネルシアターを通じて被災地の人々に笑顔を届けられたことがとても嬉しかった。この経験を糧にして、これからの学校生活を頑張っていこうと思う。



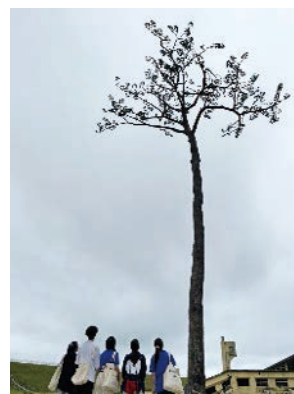
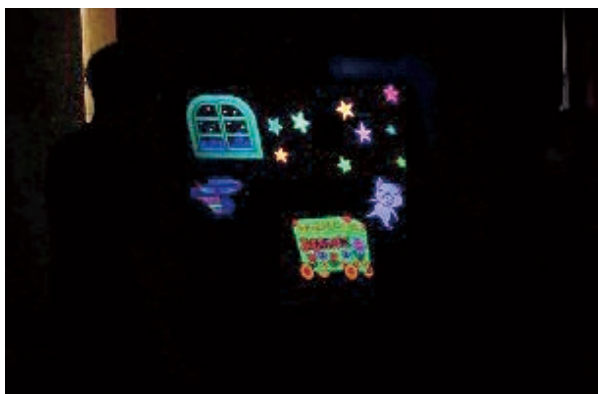
たくさんの笑顔とともに

教育学部 こども教育学科 2年 山崎 琴未

私は今回「淑徳大学パネルシアターキャラバン」に参加した。参加しようと思った理由は東日本大震災から10年経ち、現在までにどのような復興がされてきたのか知りたかったのと様々なところでパネルシアターを演じてみたかったからだ。私たちは2泊3日で岩手県と宮城県にある一関愛心幼稚園、気仙沼カトリック幼稚園、海の星幼稚園に訪問し、パネルシアターを演じた。

1日目は岩手県一関市にある「愛心幼稚園」で公演をした。私は「トトロ」と「おもちゃのチャチャチャ」をパネルで行い、「にじ」のピアノを弾いた。トトロは1番最初の演目で緊張していたが、子どもたちの「トトロ～!」という楽しそうな声や笑顔を見てすぐに緊張がほぐれ、自分自身も楽しむことができた。曲と一緒に歌ってくれて子どもたちと盛り上げることができた。「おもちゃのチャチャチャ」はブラックパネルシアターの2作品目だった。おもちゃ箱を出した瞬間に子どもたちは目を輝かせていてとてもかわいかった。特にロケットを打ち上げるところで「わー!!」と歓声があがったのが印象に残っている。一緒に歌って手をたたいて最後まで楽しんでもらうことができた。最後の「にじ」ではピアノを弾いた。この曲は何度か別のボランティアでも弾いたことがあったが、この曲を演奏するように先生に言われたのが直前でとても焦った。けれど何度か弾いたことがあったので自信をもって弾くことができた。子どもたちも知っている曲だったので一緒に歌ってくれて、私自身とても楽しく演奏することができた。パネルシアターを見てくれた子どもたちや先生方を笑顔にすることができたし、大成功の公演となった。公演の後に松家先生の恩師である菅原先生のお家へ行き、一緒にご飯を食べたり菅原先生が実際に幼稚園で作った作品を見たり作り方を聞いたりした。今後の実習やボランティアなどで簡単に制作ができるようなものばかりだったので活かしていきたい。この後に厳美溪とガラスパークに行き観光した。また、温泉にも入って1日の疲れをとることができた。

2日目は宮城県気仙沼市にある「気仙沼カトリック幼稚園」で公演をした。私は「トトロ」と「おもちゃのチャチャチャ」をパネルで行い、「魔法の電子レンジ」と「にじ」のピアノを弾いた。「トトロ」と「おもちゃのチャチャチャ」は1日目にもやっていたので自信をもって演じることができた。少し失敗し



てしまったところもあったが、最後まで笑顔で演じることができたので良かった。「魔法の電子レンジ」では歌と効果音のところでピアノを弾いた。以前サークルの公演でこの作品のピアノを弾いたので、作品を演じる人と打ち合わせをしっかりと一緒にピアノと合わせることができた。作品を見ながらタイミングを合わせてピアノを弾くのは難しかったけれど、子どもたちも一緒になって歌ってくれたので楽しみながら演奏することができた。「にじ」では1日目と同じように子どもたちの歌とともにピアノを弾くことができた。子どもたちや先生方の手話も上手でたくさんの笑顔を見ることができて良かった。公演の後に高田松原津波復興祈念公園へ行った。この場所は2011年3月11日におきた東日本大震災のことについていろいろな人に伝えるための場所であり、あの日を忘れないために作られた場所だと教わった。ここには様々な体験談や映像、津波の脅威が分かるようなものが多数あり、とても心が痛んだ。また、奇跡の一本松も見た。テレビでよく出ていたので、どのような松なのか気になっていた。実際に見てみると津波の脅威が分かるような傷があったり枯れてしまっていたりしていたが、今も変わらずに立っていて復興のシンボルだと感じた。東日本大震災は忘れてはいけなし今後も伝えていかなければならない。



3日目は宮城県大船渡市にある「海の星幼稚園」で公演をした。「トトロ」では音楽が流れた瞬間に「トトロ!!」と言って一緒に子どもたちが歌を歌ってくれてとても楽しかった。また、ニコニコ笑顔で楽しんでも嬉しかった。「おもちゃのチャチャチャ」では一緒に手をたたいてくれて、初めて見たブラックパネルシアターに目を輝かせていた姿が印象に残っている。子どもたちは最初から笑顔で楽しそうに作品を見てくれて最後まで楽しんでもらっていた。「にじ」では子どもたちも先生方も楽しそうに手話をしながら歌っていた。私は少し

ピアノで間違えてしまった部分があったが、最後まで演奏することができたので良かった。この3日間でたくさん笑顔を見ることができてとても良い経験となった。公演の後に少し観光をしたり世界遺産ガイダンスセンターに行ったりした。道の駅でお土産を買ったり食べ歩きをしたりして楽しむことができた。世界遺産ガイダンスセンターでは平泉の歴史について知ることができ、実際に世界遺産を近くで見られたので良かった。

今回パネルシアターキャラバンに参加して様々な人と関わることができ、とても貴重な経験となった。実際に被災地を訪れ、どのような復興が行われてきたのかを見ることができ、パネルシアターを見てくれた子どもたちや先生方を笑顔にすることができた。この経験を今後のボランティア活動やサークルで活かしていけるように今回演じた作品を忘れず、新しい作品にも挑戦していきたい。



人生と心に変化をもたらした3日間

人文学部 表現学科 3年 山根 早貴

私は、初めてパネルシアターキャラバンに参加して、パネルシアターの楽しさや人と人の繋がりやの貴さ、東日本大震災の記憶を忘れないことの必要性を実感した。

1日目にパネルシアターの公演を行ったのは、愛心幼稚園。私にとって初めて子どもたちの前でパネルシアターを行う公演だった。会場に着くまでは少し緊張していたが、いざ公演が始まるとひたすら「楽しい」という気持ちになり、あっという間に終わってしまった。私が担当した「そらめくんのベッド」では、子どもたちがしっかりと集中して観てくれていることがステージにいても感じられ、一生懸命練習を重ねてきて本当に良かったと思った。

他にも「ほよよん行進曲」や「にじ」では、参加した淑徳大学の先生や学生だけでなく、子どもたちや幼稚園の先生も含め、会場にいた全員で歌ったり踊ったりしたことが印象に残っている。「人と人の心を1つに繋げることができる」というパネルシアターの魅力を、公演全体を通して強く感じた。

公演が終わった後は菅原先生のご自宅でお弁当をいただいた。菅原先生と奥様は私たちを温かく迎えてくださり、公演の感想や先生が創作された紙コップのロボットにまつわるお話などを聞かせてくださった。松家先生と菅原先生のご縁が私にも素敵な経験を運んでくださったことに、人と人が繋がっていくことの素晴らしさを感じた。

2日目にパネルシアターの公演を行ったのは、気仙沼カトリック幼稚園。前日の公演以上に「幼稚園の子どもたちと先生方に笑顔を届けたい」という気持ちが、私の中で強くなっていた。この日は「たまごでおりょうり」を担当したが、私たちの言葉に子どもたちが返してくれたことや、歌に合わせて一緒に手を叩いてくれたことが特に印象に残っている。前日に担当した作品とは異なり、子どもたちの反応がダイレクトに返ってきたことで「子どもたちと一緒に1つの作品を完成させる」という、パネルシアターのまた違う魅力を味わうことができた。

他にもピアノを担当していた藤田先生の「たこやき」では、幼稚園の先生方や子どもたちが心から楽しんでいることがひしひしと伝わってきて、弾いている私も嬉しい気持ちになった。また松家先生の「翼をください」では、歌詞の意味と幻想的なパネルの世界観が合わさっていて、先生と一緒に歌いながら泣きそうになるほど感動した。公演後に「『翼をくださいのパネルシアターが天国みたい』と言っている子どもがいた」ということをお聞きしたが、本当にその通りだと思った。

公演の後には東日本大震災津波伝承館に向かった。バスで向かう途中、窓から見える建物が新しいものばかりだったことが非常に印象的だった。陸前高田の町が津波で大きな被害を受けたことはニュースで見て知っていたが、現地に赴き「この辺りも津波で壊滅的な状態になったのか」と想像すると胸が痛



くなった。しかし同時に町が復興していることも分かり、この地で生きる人々の覚悟や強さが陸前高田の町から感じられた。

館内では津波に流された消防車や津波の映像を目にした。そして松家先生のご縁でお会いした方から聞いた「友人が亡くなったのに葬儀に参列できなかった」という震災当時のお話が印象に残っている。被災して心も体も苦しい中でそのような悲しい出来事を経験されたということ、そして勇気を振り絞ってその記憶を話してくださっているということを考えると、言葉にならない思いだった。津波は多くの貴い命を奪っただけではなく、残された人々の心に深い傷を残していったということ、そしてその傷は町が復興しても消えないということを忘れてはいけないと痛感した。

3日目にパネルシアターの公演を行ったのは、海の星幼稚園。最終日の公演ということもあり、私は3日間の中で一番気持ちが高まっていた。この日もまた「そらめくんのベッド」を担当したが、子どもたちが大きな声で反応を返してくれたことや最後まで夢中になって聞いてくれたことが演じていて何よりも嬉しかった。最後の演目が終わったときには、ただ「楽しかった」の一言に尽きるほど充実感で胸がいっぱいになった。



公演後には子どもたちが駆け寄ってハグやハイタッチをしてくれたり、そらめくんのパネルを見せると興味津々に話しかけてくれたりした。また幼稚園の先生が「感動して泣きそうになった」と話してくださった。子どもたちだけでなく大人の心にも「パネルシアターを通じて届けたかったことが届いた」という思いで胸がいっぱいになり、私の方こそ泣きそうになってしまった。

今回のパネルシアターキャラバンを通じて「とにかくパネルシアターは楽しい!」ということが一番感じた。そして「もっと上手になりたい」「もっとやってみたい」という思いが一層強くなった。また藤田先生、松家先生、成

田さん、一緒に参加した学生のみんな、菅原先生と奥様、幼稚園の先生方と子どもたち、松家先生のご縁でお会いすることができたお二方、バスの運転手さんなど、参加したことで多くの方と出会い、学ぶことになった。人と人が出会い繋がっていくことの貴さを、身をもって知ることができた。さらに初めて東日本大震災の被災地を訪れ、被災された方のお話に触れたことで、これまで以上に自分事として向き合いたいと思うようになった。そして何より震災があったという事実を忘れることなく、その教訓を次の世代にも繋げていきたいと感じた。私の人生と心に大きな変化をもたらしたパネルシアターキャラバンだった。



やっと叶った3年ぶりの訪問！！

淑徳大学 客員教授 藤田 佳子

2011年9月から続けてきた東日本大震災復興支援プログラム「パネルシアターキャラバン」が3年ぶりにやっと再開できました！！ 2020年2月頃から日本でもCOVID-19、いわゆるコロナ感染が拡大の様相を示し、第10回パネルシアターキャラバンは2020年3月、残念ながら直前に中止となりました。得体のしれない感染症に日本のみならず世界中が緊張状態になりました。2020年度はオンラインで子どもたちとつながろうとしましたが、Wi-Fi環境や機器の問題がクリアできませんでした。そして2021年度に再チャレンジ！ 2021年12月に事前研修、2月上旬に訪問予定でしたが、年明けからまたまた感染拡大となり再び訪問が叶わず、代わりにDVDを作成しました。学生たちはどうやったらより対面でのパネルシアターの楽しさに近づけるか考えて演出したり、工夫をしたりし、2020年・2022年に訪問予定の園にお送りすることができました。



このような背景をもって臨んだ第11回パネルシアターキャラバン、10名の学生たちと一緒に一関・気仙沼・大船渡の子ども達に会えることを楽しみに、うきうきワクワクしながら学生たちと準備に入りました。今回は、11回目にして初めて4キャンパスの学生が揃って参加し、嬉しさのあまり小躍りしたのを覚えています。このパネルシアターキャラバンは、パネルシアターをやりたい学生だけでなく、被災地の復興に関心のある学生も参加し、それぞれの熱い思いのもと、チームワークよく、またモチベーションも高く活動している姿が素晴らしいといつも感心しています。今回は特に東京キャンパス・千葉第二キャンパスの学生たちは初めてのパネルシアターで、夏休みにもかかわらず、熱心に千葉キャンパスに集まり納得ゆくまで練習を重ねる姿は頼もしいものでした。

出発前日もリハーサルのために10名が集まり、子どもたちに楽しいパネルシアターを届けたい、笑顔をお届けしたいという目標に向かって、皆で話し合い、工夫をするパワーには感服しました。そのパワーは現地

入りしたホテルでの練習でも発揮され、幼稚園での公演を重ねるたびに1日1日成長してゆく学生たちを見て本当に誇らしく思いました。学年やキャンパスを超えて、集中して一つのものを創り上げるといった素晴らしい経験を通して成長してゆく学生たちとともに活動することができる幸せを感じました。



最後に訪問した「海の星幼稚園」でとても心が震えるような嬉しいお言葉を先生からいただきました。「普段は15分位しか座ってられない子が、今日は最後までパネルシアターを観ていました。」とおっしゃってくださいました。学生たちが考えて構成したプログラム、何回も何回も練習して会得した絵人形の配置や動かすタイミング、作品と作品との繋ぎ、そして何より子どもたちへの言葉がけによつての応答や大きな動作での表現などがすべてダイナミックな関係をもって、子どもたちの興味関心を惹きつけ、最後まで笑顔と楽しい感情をお互いに共有できたのではないかと考えています。この素晴らしい体験をその場に在るすべての人々と共有でき、涙が溢れてきそうで、ぐっと堪えながら最後まで元気にぼよん行進曲を子ども達・先生方、そして学生たちと一緒に踊っている自分がありました。パネルシアターを45年以上やってきていますが、本当にすべての公演が一期一会であることを改めて実感しました。



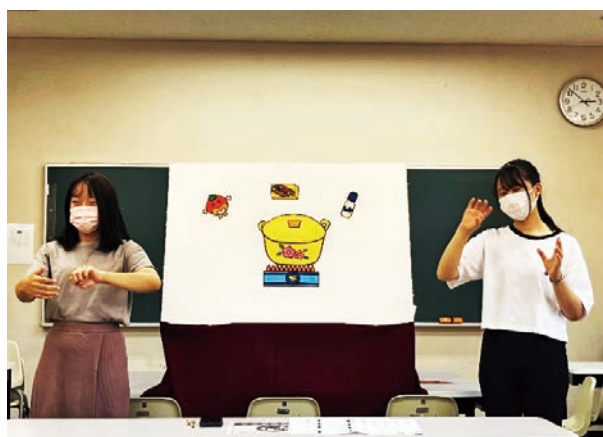
陸前高田を訪れるのは3回目でしたが、訪れるたびにその姿が大きく変わっていて驚きでした。2021年に完成した「東日本大震災津波伝承館～いわてTSUNAMIメモリアル～」は動画視聴できる部屋が多く、体験型で震災が身に迫ってくるような感覚がありました。建物や展示だけでなく、広い芝と海に向かって真っすぐに延びる道。その向こうに広がる海と植樹し続けている松の木々。心に深く響くものがありました。いつまでも『あの日』を忘れずにみんなで語りつないでいかなければいけないと感じました。多くの方々に訪れてもらいたいところです。街の中には、いろいろな建物の壁に『津波浸水深こまで』が書かれていました。ほとんどが2階に逃げても助からない水位です。自分の目で見て五感で感じる体験は大切です。

パネルシアターは面白い！！私の人生は、パネルシアター抜きでは語れないとしみじみ再認識しました。このような素敵な機会をいただいたことに心から感謝いたします。パネルシアターキャラバンを受け入れてくださった東北カトリック学園の3幼稚園の先生方と子ども達、コーディネーターとしてまた学生たちを温かく迎えてくださった菅原順一先生ご夫妻、訪問先を交渉してくださった松家先生、事務手続きをスピーディーにこなす成田さん、そしてこの活動を長年にわたり支援して下さる淑徳大学には心から感謝いたします。これからも学生たちと再び一緒に参加できますことを心から願っています。



【事前学習】



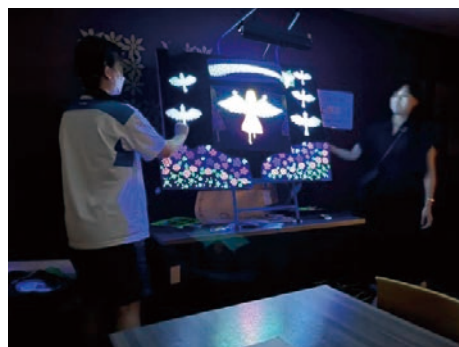


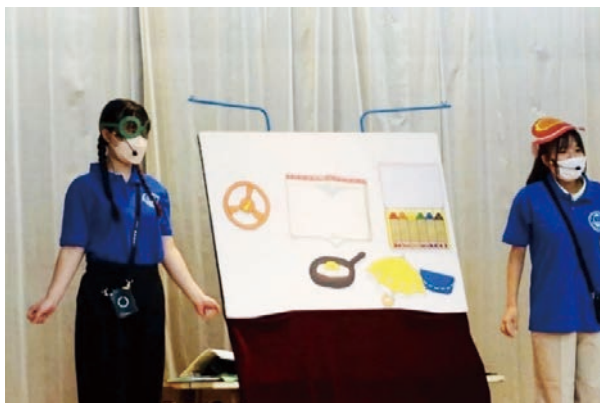
【公演記録】















公演プログラム



プログラムA (岩手県一関市 愛心幼稚園)

1. オープニング (松家)
2. トトロ (大坂谷、山崎)
3. へんしんクレヨン (大坂谷、久岡)
4. へんしんおばけ (松家)
5. そらまめくんのベッド (山根、加瀬)
6. カレーライス (遠藤、田丸)
7. ねこの医者さん (長谷川、金丸)
8. ほよよん行進曲 (加瀬、加藤)
9. 月夜のポンチャラリン★ (藤田)
10. おもちゃのチャチャチャ★ (長谷川、山崎)
11. にじ (松家)



プログラムB (宮城県気仙沼市 気仙沼幼稚園)

1. オープニング (松家)
2. 森のくまさん (加藤、田丸)
3. たまごでお料理 (遠藤、山根)
4. はたらくくるま (久岡、長谷川)
5. 魔法の電子レンジ (長谷川、金丸)
6. トトロ (大坂谷、山崎)
7. たこ焼きパクッ! (藤田)
8. ほよよん行進曲 (加瀬、加藤)
9. 翼をください★ (松家)
10. おもちゃのチャチャチャ★ (長谷川、山崎)
11. にじ (松家)



プログラムC (岩手県大船渡市 海の星幼稚園)

1. オープニング (藤田)
2. トトロ (大坂谷、山崎)
3. へんしんクレヨン (大坂谷、久岡)
4. たこ焼きパクッ! (藤田)
5. そらまめくんのベッド (山根、加瀬)
6. カレーライス (遠藤、田丸)
7. ねこのお医者さん (長谷川、金丸)
8. ほよよん行進曲 (加瀬、加藤)
9. 月夜のポンチャラリン★ (藤田)
10. おもちゃのチャチャチャ★ (長谷川、山崎)
11. にじ (久岡、大坂谷)



海の星幼稚園の子ども達から 歌のプレゼント!



復興支援プログラム 第11回パネルシアターキャラバン (2泊3日)を実施しました

大学地域支援ボランティアセンター主催の復興支援プログラム「パネルシアターキャラバン」は、淑徳発祥の「パネルシアター」を学生たち自ら上演し、子ども達を始め被災地の方々と交流を深めることを目的に実施しています。被災の現実と復興の現状に触れ、本学の建学の精神を体験的に学ぶボランティア活動です。事前に抗体検査など感染症対策を万全に行い、実施されました。



●実施日

2022年8月30日（火）～9月1日（木）2泊3日

●活動場所

岩手県一関市、大船渡市、宮城県気仙沼市

●参加学生

教育福祉学科1名、栄養学科3名、こども教育学科5名、表現学科1名 計10名

●引率教職員

教育学部子ども教育学科 准教授 松家まきこ先生、客員教授 藤田佳子先生 他1名

4キャンパスの学生が集まり、パネルシアターを初めて見て、演じる学生もいましたが、練習を重ねて、幼稚園で上演することができました。

また、コロナ禍で3年ぶりの実施となり、被災地の幼稚園の先生は、「最近のご支援いただける件数も減ってしまい、またこうして園児や私たちも楽しませていただいて、嬉しいです。」とお話ししてくださいました。

この度の活動は、地元ケーブルテレビの「一関ケーブルネットワーク：岩手日日ニュース」にて放映され、また岩手日日新聞にも掲載されました。

<https://www.iwanichi.co.jp/2022/08/31/8579507/>

●一関市、気仙沼市、大船渡市の幼稚園にて上演



●岩手県陸前高田市 東日本大震災津波伝承館を見学



●一関市内や気仙沼市内を散策



●参加学生の感想

【教育福祉学科2年】

自分の知らなかったことを学んだり、自分のスキルアップにつながるきっかけがあったりと得るものが多くありました。新型コロナウイルスの事もあり、触れ合って交流をすることができませんでしたが、一緒に踊ることで子どもたちを近くに感じることができました。大学で保育者の進路を選択して、自分に向いているだろうかと進路について悩む時期もありましたが、子どもたちの様子を見て、子どもの近くで成長を見守る仕事がしたいと思いました。

【栄養学科1年】

私はパネルシアターというものを知らず、体験してみたかったということと、東日本大震災の被害が大きかった東北が10年たった今、どのようになっているのか知りたいと思い参加した。公演後、幼稚園の先生から「いつもの子どもたちは集中できる時間が15分程度ですが、今日は1時間も座っていました。それほど楽しかったみたいです。」という話を聞き、子どもたちの楽しそうな様子と実際に言葉で感謝を伝えられるとこんなに嬉しいのだなと思った。今幼稚園にいる子たちはあの被害の大きかった東日本大震災を経験していない。もしかしたらこれから先の人生で一回は大災害に遭遇するかもしれない。そう思うと心が苦しいが、先人たちの教訓を教訓に無事に成長してほしいと願った。

【表現学科 3 年】

私は今回、初めてパネルシアターキャラバンに参加して、人と人が出会い繋がっていくことの貴さを、身をもって知ることができた。さらに初めて東日本大震災の被災地を訪れ、被災された方のお話に触れたことで、これまで以上に自分事として向き合いたいと思うようになった。そして何より震災があったという事実を忘れることなく、その教訓を次の世代にも繋げていきたいと感じた。私の人生と心に大きな変化をもたらしたパネルシアターキャラバンだった。

【こども教育学科 2 年】

震災当時保育士だった方が、「自分の10本の指一本一本で子どもたちを引っ張り、津波を見せないようにして高台へ避難した」というお話を聞いて、自分の身を守ると同時に子どもたちの命も守らなければいけないという一刻を争う状況で、もし自分自身が同じ状況に置かれたらと想像しただけでも怖いと感じた。

どの幼稚園でも園児たちと先生方が私たちのパネルシアターをずっと心待ちにしていた様子でとても嬉しかった。また、自分の行ったことのない遠い場所へ行ってパネルシアターをすることがとても新鮮だったし、このキャラバンで初めて知り会った東京・千葉キャンパスの人たちも一緒だということが、お互いに良い刺激となった。

【こども教育学科 2 年】

幼稚園へ移動中、10年経った今でも、街の中には東日本大震災の津波跡が残っていた。幼稚園の中では震災の経験を活かし、地震対策が多くなされていた。公演の中で「翼をください」という作品を見た1人の園児が、天国のように見えたと話していた。震災から10年経った今でも、子どもたちの心の奥底では、震災への思いが強く残っているのだと思う。

子どもや大人関係なく、たくさんの人々を笑顔にでき、そして笑顔にさせてもらった。子どもたちが楽しんでパネルシアターを見てくれることこそが、私たちの原動力であり、これからの成長につながると思う。これからもパネルシアターを通して、たくさんの人を笑顔にさせたいという想いがさらに強まった。

淑徳大学 地域共生センタープログラム

災害時のシミュレーションと 防災意識を高める

淑徳大学 地域共生センタープログラム 災害時のシミュレーションと防災意識を高める

◆目 的

淑徳大学 地域共生センターは、本学学生や教職員、卒業生、地域の方々と共に地域共生活動を行い、本学の建学の精神を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的に運営しています。

地域共生センターにて今後展開される事業の1つである災害支援活動や支援環境整備について、学生・教職員・卒業生等の様々な立場からの「災害」の意見を共有しながら模索し、今後起こりうる災害の支援体制を構築していきます。その初活動として、「災害時のシミュレーションと防災意識を高める」を行います。

本学卒業生が会長をしている大里綜合管理株式会社は、地域と共に活動し、様々なメディアにもとりあげられている会社です。その大里綜合管理株式会社にご協力をいただき、今後災害が起こった時を想定し、災害時にとるべき行動や活動について事例や実践、ワークショップを交えながら考えていきます。学生、教職員の皆さまのご参加をお待ちしています。

◆概 要

活動日時：2022年11月26日（土）

対 象：淑徳大学学生・教職員（千葉キャンパス）

参加定員：15名程度（定員になり次第、受付を終了します）

参 加 費：無料（昼食含む）※現地までの交通費は各自負担

実施場所：大里綜合管理株式会社：千葉県大網白里市

（現地集合、現地解散：外房線大網駅から徒歩約12分）

※大里綜合管理株式会社HPのアクセスにてご確認ください。



大里綜合管理株式会社
野老 真理子会長

◆申込方法

Google Formにて、2022年10月28日（金）までにお申し込みください。

◆スケジュール

日 程	主 な 活 動 内 容（変更する場合があります）
11/26（土）	【第1部】 9：30 受付開始 10：00－10：30 開会 参加者自己紹介 10：30－12：00 会長 野老 真理子氏講話 （会社紹介・地域活動紹介・ファーストミッションBOX紹介） 12：00－13：00 昼食（2Fレストラン） 13：00－15：00 防災ワークショップ（淑徳大学千葉キャンパスで、災害に遭った場合はどうする？交通機関もストップ。震災後48時間を学生・教職員・地域の人とみんなでシミュレーション。）※「防災でまちづくり」に参画している地域の方々も参加予定です。 15：00－16：00 発表・振り返り 【第2部】※自主参加 16：20～ 懇談会 17：30 終了予定

※新型コロナウイルスの感染状況によっては、中止または内容を変更する場合があります。

問い合わせ先：淑徳大学 地域共生センター
千葉キャンパス 15 号館 10 階（附属機関事務室）電話番号：043-265-7834 メール：f-jimu@soc.shukutoku.ac.jp

◆参加者名簿

	キャンパス	学籍番号	学科	学年	氏名	性別
1	千葉キャンパス	C01012	社会福祉	3	石川 流星	男
2	千葉キャンパス	C11027	社会福祉	2	植草 優斗	男
3	千葉キャンパス	C11174	社会福祉	2	楠 真聖	男
4	千葉キャンパス	C21074	社会福祉	1	藤田 朱里	女
5	千葉キャンパス	C21033	社会福祉	1	越川 未悠	女
6	千葉キャンパス	C0C079	コミュニティ政策	3	橋本 竜太	男
7	千葉キャンパス	C0C021	コミュニティ政策	3	小野 準	男
8	千葉キャンパス	C0C007	コミュニティ政策	3	小山 泰広	男
9	千葉キャンパス	C0C044	コミュニティ政策	3	鈴木まゆ子	女

防災意識の向上による今後の起こりうる災害からできること

総合福祉学部 社会福祉学科 3年 石川 流星

今回の地域共生センタープログラムは、とても勉強になり、人とのつながりの大切さを改めて実感しました。参加する前は、防災意識や実際に災害に遭った場合にできる行動について知らないことだらけでした。プログラムに参加した理由は、興味関心からと東日本大震災や3年前の台風による災害に遭ってから年数が経つごとに防災意識は薄れつつあり、いざという時に何もできない、知らないことは自身の命を落とす危険性があり、他者の命を守るために必要な知識として得たいと考えたからです。度々ニュースで話題となる南海トラフ巨大地震にも備えることはできるだけ備えておきたいとも真剣に思います。職員によるファーストミッションBOXを拝見した際に迅速な対応や役割分担が適切に行われており、安心感や緊急時でも対応可能であると信じられるものがありました。もし自分がその立場になったら、学んだことと自分が持ちうる力を最大限に生かして貢献していきたいと思います。最後になりましたが、大変お世話になりました。おかげさまで新たな知見を広めることができました。また機会がありましたら是非参加させていただきたいです。



～防災意識・平和ボケ～

総合福祉学部 社会福祉学科 2年 植草 優斗

今回地域共生センタープログラムに参加させていただきました。自身の防災に対する意識、配慮。また知識不足を痛感させていただきました。

3.11からまもなく13年が経過し、千葉県ではあまり被災すること無く今日まで平和に暮らしています。しかしこの平和を安心して変えて良いのか、危機的状況なのではないかと実感いたしました。日々何事もなく暮らしているものの、日常には常に「危険」と「死」が隣り合わせになっている中で、突然災害が起こった場合、自分自身が適切な避難を実施し自分の命を守り、独居高齢者の方や、孤立、無縁化している方、避難所がわからずに焦っている方にアプローチしていけるのかを考えた際に、確実に身を引いてしまうと考えました。

今現在、私自身もそうですが、「災害が起きたら私は動きます、動けます」と思っている方は改めてもう一度自分自身の災害意識に対する理解を見つめ直して欲しいと思います。それが不適切だと感じた場合は改善をしていくことが求められますし、災害が起こった場合は、一人ひとりの意識が統一されず1人でも逸脱した考えを持っている人が居たら間違いなく、二次災害につながると考えます。我々はどうして大学生という社会の一員で営みをしている中で、一人ひとりが自我を持ち生活をしています。小、中、高校生は担任教員がおり、災害が起こった場合は指示者がいる事で、安心、安全が保障されております。

しかし、我々大学生は社会の一員として扱われている為、災害時に全員が避難場所に集まり、集結すると、私自身考えられません。個人で考え、行動を強いられている中で、逸脱し、帰る人、または別の場所に避難をしていく人が間違いなくいると思います。そういった中で我々が協力し、避難を確実にすることにより二次災害をどう防いでいくのかが、今回私が参加した中での課題となりましたし、早急に考え、判断することが求められる議題になると感じました。

一つひとつの積み重ねと、継続する事で気づきを忘れずに、日々歩んでゆく事で、普段見えなかった世界に着目出来る他、日常にあるハザード、小さな汚れ、人間関係の歪み、悩み事解決への糸口が見えると学びました。

関して改めて認識し直すことが出来ましたし、自分がいかに他力本願になっていたかを知り、これからどうしていききたいのか、どうすべきなのかを考え直す良い機会になりました。そして、第1部を終えて第2部での懇談会で、残った方々とお話する形になりました。人数が少なく第1部より個人や参加した学生のこれからの焦点が当たったお話になり、比較的フラットな感じでお話することが出来て楽しかったです。今回の企画で沢山学ぶことがあり、参加させて頂いて良かったと思いました。

●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○

地域共生センタープログラム「災害時のシミュレーションと防災意識を高める」 に参加した感想

総合福祉学部 社会福祉学科 1年 越川 未悠

このプログラム全体を通して大きく分けて三つのことが大切だと、身に染みて実感することが出来ました。

一つ目は様々な経験をする事。二つ目は自己分析を常にすること。三つ目は災害に対する知識をもっとつけ、より災害への対策をするべきだということです。

一つ目の様々な経験をする事と、二つ目の自己分析を常にすることは、会長の野老真理子先生の講話から学びました。野老先生は「やれることは何でもやろう」「小さなことにも気づく訓練をしよう」とおっしゃっていました。そこから私自身が成長する機会を、自ら失っていたこと、そんな自分に気が付くことが出来ていなかったことに気が付くことができました。

三つ目の災害に対する知識をもっとつけ、より災害への対策をするべきだというのは、クロスロードと防災ワークショップ、ファーストミッションBOX体験から学びました。体験するたびに自分の災害に対する知識の無さを実感することができました。このままでは大災害が起きたときに自分の身すら守ることが出来ないと感じました。だから自分の活動範囲内で災害が起きたとき、自分になにができるのか、何をすべきなのかを考えておく必要がある、と強く考えるようになりました。

●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○●—○

大里総合管理株式会社での地域防災研修

コミュニティ政策学部 コミュニティ政策学科 3年 小山 泰広

私は、大里総合管理株式会社での防災研修に参加し、特に次の4点が印象に残った。

第1に、災害発生時には、例えば「3,000人の避難者がいる状況であるが、食料は2,000人分しかない。あなたは、食料配付をするべきであると考えるか」などといったように、「二者択一」の選択を迫られるようなシチュエーションが起こり得ることについて学ぶことができた。

第2に、先述のような状況の際に、必ず正しいと断言できる「答え」は存在せず、意見が分かれることが想定できるが、その際は、多数派の意見に押されないようにするという観点により、まずは少数派の意見から、その理由を尋ねるべきであることについて学ぶことができた。

第3に、行政に頼るだけではなく、住民自らが、自分たちの立場で、主体的に行っていくべきことがらは何であるかを考え、実際に行動をしていくことの大切さを感じるとともに、この点については防災

[大学HP掲載]

「災害時のシミュレーションと防災意識を高める」 を実施しました

本学では、学生や教職員、卒業生、地域の方々と共に地域共生活動を行い、本学の建学の精神を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的として様々な取り組みを行っています。

本学の取り組みの1つである「災害支援活動」や「支援環境整備」は、学生・教職員・卒業生等の様々な立場からの「災害」の意見を共有しながら模索し、今後起こりうる災害の支援体制を構築していきます。その活動として、「災害時のシミュレーションと防災意識を高める」を実施しました。



本学卒業生が会長である大里綜合管理株式会社は、地域と共に活動し、様々なメディアにもとりあげられている会社です。その大里綜合管理株式会社にご協力をいただき、今後災害が起こった時を想定し、災害時にとるべき行動や活動について学生、教職員、地域住民とともに事例や実践、ワークショップを行いました。

活動日時：2022年11月26日（土）10：00～17：00

参 加 者：淑徳大学学生・教職員・地域住民・大里綜合管理株式会社社員 合計25名程度

実施場所：大里綜合管理株式会社

はじめにクロスロード（災害対応カードゲーム）を行いました。



会長 野老 真理子氏による会社紹介、地域活動や災害について講話いただきました。



防災ワークショップ

淑徳大学千葉キャンパスで、災害に遭った場合はどうする？震災後48時間を学生・教職員・地域の人とみんなでシミュレーションを行いました。



グループ発表



大里綜合管理株式会社のファーストミッションBOX体験

ファーストミッションBOXを使った避難訓練を体験しました。



参加者感想

社会福祉学科 2年

今回のプログラムに参加してみて、気づきの大切さ、その結果に伴って起こる地域や地域住民との信頼関係（絆）がいかに大切であるかを、確認することができました。また、東日本大震災の時や台風災害の時などは、テレビで見たことがあるという程度でしたが、今回、実際に体験してみて、小中学校の時とは違い、自らリーダーとなって行動していくことが求められます。その為には、家や学校などの自分が1日のどこかには必ずいるような場所での避難所の確認を前もって知っておくことが大事になっていくのだと思いました。

社会福祉学科 2年

今回のプログラムに参加し、自身の防災に対する意識や配慮、また知識不足を痛感しました。

一つひとつの積み重ねと、気づきを忘れずに日々歩んでゆく事で、普段見えなかった課題に気づき、日常にある様々な課題の解決への糸口が見えることを学びました。

こうしたプログラムの中で、改めて災害に対する意識を改心すると共に、地域のハザード、大学構内のハザードなどを確認して、地域内、大学構内に、ファーストミッションBOXの導入を積極的にして欲しいと強く思いました。

コミュニティ政策学科 3年

防災ワークショップにて千葉キャンパスで災害に遭った場合どうするのかを考えたときに、防災意識に低さを痛感しました。グループワークを通して、やることが多くあること、やることの優先順位を決めることが難しいことを感じました。これまで災害が発生した後については、大学の職員の人などの指示に従えばよいと他人任せになっていたと反省しました。大里綜合管理の会長の野老真理子さんがおっしゃっていた、気づく訓練をすることの大事さを、身をもって感じ、今回時間が限られた中でも多くの意見が出て、もっと時間をかけて、多くの人と話し合いたいと思いました。

コミュニティ政策学科 3年

行政に頼るだけではなく、住民自らが、自分たちの立場で、主体的に行っていくべきことを考え、実際に行動をしていくことの大切さを感じました。

大里綜合管理株式会社の皆さんのファーストミッションBOXを活用した避難訓練は、避難や被害に遭い困ってきた地域の人々が安心できる本当に素晴らしいものでした。しかし、実際に災害が発生したときに、このぐらい避難訓練ができなければ混乱は避けられないと思いました。淑徳大学のファーストミッションボックスの策定、そして、ファーストミッションBOXを活用した避難訓練をすることの重要性を非常に感じました。

千葉事務局 総務部

普段、職員としての立場で、キャンパス内にいる学生の安全確保のために、避難場所までの誘導に重点を置いた避難訓練を毎年実施しているところであるが、避難誘導後についてのシミュレーションについての検討はあまりされていない。

今回のテーマにより様々な事象が生じ、その一つひとつの対応や問題点等を考えるきっかけとなった。参加学生も積極的に意見を出し、それに対しての他の学生や地域住民の意見も盛り込み、避難後の対応について検討する時間が短く大まかとなってしまったが、現実的なシミュレーションができたように思われる（避難場所、指揮命令、避難者の把握・管理、非常食配布方法等々）。

今回は同部署の職員のみでの参加であったが、他部署の職員の参加があれば、さらに現実的な意見交換ができたように感じた。

最後に、このような機会が、大学全体（教職員、学生、地域）で広がり、共有した認識を持てるように繋がっていくことを期待します。

淑徳大学 地域共生センター復興支援プログラム

2022年度 スタディツアー

淑徳大学 地域共生センター

復興支援プログラム 2022年度 スタディツアー

◆スタディツアーの目的

本学では「できることを、いま・ここから」をスローガンに、復興支援活動を続けています。今年度は、宮城県の震災遺構となった小学校や防災拠点・交流センター等を視察し、現地の被災状況や教訓、備えについて体験的に学び、今後自らの地域に災害が起こった時を想定し、災害時・平時の取り組みについて考え、行動する機会を得ることを目的に開催しました。

◆スケジュール

日 程	主 な 活 動 内 容 (変更する場合があります)
2 月中	事前学習・打合せ (Zoom開催予定)
2/26 (日)	07:00 東京駅集合 07:16 東京駅発→09:03 古川駅着 (JR新幹線はやぶさ101号・盛岡行) 09:15 古川駅周辺にてマイクロバスに乗車 10:45 車窓から釜谷大須雄勝地域にて堤防見学 (当時淑徳生が行った活動を説明) 11:30 昼食 道の駅 硯上の里おがつ (元たなこや商店街)・昼食 13:00 震災遺構 大川小学校 (児童・教職員を始め多くの住民が犠牲になった事象と教訓を学ぶ) 14:30 震災遺構 門脇小学校 (津波火災からの避難と教訓を学ぶ) 17:30 宿泊地到着…KIBOTCHA: キボッチャ (元野蒜 (のびる) 小学校) 20:00 夕食後 振り返り 
2/27 (月)	08:00 宿泊地 出発 08:25 「あおみな」から大高森 (松島四大観の一つ) までのハイキング (片道20分ぐらい) 10:00 松島町石田沢防災センターの見学 (バスや乗用車の避難を中心に考えた避難所) 11:00 日本三景松島の見学 (食事も含め、各自工夫した活動体験) 13:30 松島出発 14:30 岩沼市「千年希望の丘」(津波避難タワーの見学) 16:00 山元町産直市場「やまもと夢いちごの郷」 17:30 宿泊地 (グランドホテル新地) 20:00 夕食後 振り返り 
2/28 (火)	08:00 宿泊地 出発 08:20 避難体験 (山元町磯浜) 09:30 震災遺構 中浜小学校 (90人の命を守り抜いた小学校から災害に対する備えの大切さを学ぶ) 11:30 山元町防災拠点・山下地域交流センター (つばめの杜ひだまりホール) 昼食と見学 (安全安心を守る防災拠点の機能と親しみを持ち使いやすい交流拠点の役割を学ぶ) 13:00 ワークショップ (交流センター内会議室) (被災地それぞれの状況や今後の備えについて考察し、ディスカッションする) 14:00 山元町防災拠点・山下地域交流センター出発 16:31 仙台駅発→18:04 東京駅着JR新幹線はやぶさ32号・東京行 到着後解散 

◆参加費

20,000円（JR東京都区外は各自負担）、宿泊費および現地滞在中の食費を含む。）

◆持ち物

○着替え・部屋着 ○洗面具類 ○動きやすい靴 ○保険証（またはコピー） ○常備薬
○筆記用具 ○カイロ ○その他各自必要なもの
○お金（集合場所までの交通費、現地での朝食・昼食・夕食以外の飲食代は各自の負担）

◆参加学生

12名

1	千葉キャンパス	C01075	社会福祉	3	河野 一司	コウノ カズサ	男
2	千葉キャンパス	C01214	社会福祉	3	渡邊 莉央	ワタナベ リオ	女
3	千葉キャンパス	C21033	社会福祉	1	越川 未悠	コシカワ ミユ	女
4	千葉キャンパス	B9C060	コミュニティ政策	4	手崎 亮佑	テサキ リョウスケ	男
5	千葉キャンパス	C0C104	コミュニティ政策	3	吉澤 一希	ヨシザワ カズキ	男
6	第二キャンパス	C2F028	栄養	1	加藤 杏葉	カトウ アンナ	女
7	第二キャンパス	C2F063	栄養	1	知久 陽香	チク ハルカ	女
8	第二キャンパス	C2F027	栄養	1	加瀬 結	カセ ユイ	女
9	第二キャンパス	C2F038	栄養	1	日下部咲木	クサカベ サキ	女
10	埼玉キャンパス	22G048	経営	1	桑折 奏斗	コオリ カナト	男
11	東京キャンパス	R21062	歴史	2	青木 悠人	アオキ ユウト	男
12	東京キャンパス	H20043	表現	3	壽山 心優	スヤマ シンヤ	男

◆引率教職員

（教員：教育福祉学科 小林先生、職員：企画調整部 佐藤、地域共生センター 成田）

◆現地講師・語り部

岩佐勝先生（大須中学校元校長・本学10期生）

◆終了後の課題（事後学習）について

1. 事前学習内容、体験、感想をレポートにまとめて、メールにて提出。
2. 提出形式：A4サイズ2枚程度 wordにて作成（写真張り付け可）
3. 表題・学籍番号・学部・学科 学年 氏名を記載して、提出。
4. 提出期日：3月10日（金）厳守
5. 提出先：淑徳大学 地域共生センター担当 成田（narita@daijo.shukutoku.ac.jp）

スタディツアーを終えて

総合福祉学部 社会福祉学科 3年 河野 一司

私が今回参加した理由は、被災地を実際に見たことがなく、自分の経験値にしたいと思い参加しました。テレビ等での情報で、自分の中で少しは考えた状態で行くようにしました。しかし、実際に見た景色は自分の想像以上のもので、言葉では表せないものがそこには多くあり、考えさせられることも多くありました。その中でも、特に考えたことについて話したいと思います。それは、当時の人達の言葉です。3日間の間に多くの場所に行き、様々なものを見ることができ、場所によっては当時の人の言葉などがありました。

大川小学校

1日目の、大川小学校では、多くの子どもが亡くなり、津波によって壊された小学校を見学しました。私がそこに行って最初に思ったことは、恐怖や驚きではなく、自分がそこにいなくてよかったという思いでした。最初にも述べたように、今回のような被災地には行ったことがなく、率直な素直な気持ちでこのように思いました。

その後に見学していると、被災した人の言葉が壁に貼られているのを目にしました。その中でもとても考えさせられることがありました。

それは、「先生や生徒だけではなく、その他にも多くの人が亡くなったことを知って欲しい」という言葉です。小学校に着いてから実際に見たとき、多くの生徒や先生が亡くなったのではないかと考えました。確かにそこでは多くの人が亡くなり、たくさんの被害がありました。しかし、私が考えたことは、目の前に見えているものだけからの考えであり、そこから考えを広げようとは思いませんでした。このような状況の中で上記の文章を見てからは、多くのことを考えることができました。ここまで多くの犠牲者がでて、写真のように学校も崩れているのであれば、近くの地域も多くの被害を受けているし、多くの方が亡くなっている。このことを考えることは難しくはないはずです。しかし、実際に見てみるとそこまで考える余裕がなく、目の前のものしか見えなくなります。そのようにならないためにも、当時の被害にあった学校が今でも残されているのではないかと考えました。

そして、同時に私自身がここに来て学ばなければならないことであるとも考えることができました。



中浜小学校

2泊3日の最終日には、実際に被害を受けた中浜小学校にも行きました。この小学校は、大川小学校とは違い、中に入っただけの見学ができる場所でした。その場所に到着したときに見えた外見は、見学用に残されていたので、写真のようにきれいになっていたように見えました。しかし、どんどん近づいて行くと、掲揚台が倒れていたり、大きな石があったり、青い線で当時の津波の高さもわかるようになっていました。そこから中に入ると、自分の想像を超える状態が見えました。写真にあるように、天井がはがされていたり、石の壁が削れていたりと、津波の強さと怖さを再認識しました。

中浜小学校では、90人ほどが逃げ込み助かったという屋上があります。写真撮影は禁止でしたが、当時の状態のままを実際に見ることができました。逃げ込んだ屋上は、元々が物置のような場所で、学校で使われていた様々なものが残っていました。90人がいるには広いところではなく、トイレなども存在しないので、当時の人のつらさや怖さは、想像できないほどのものであると考えました。

その中でも、私が特に考えさせられたことが、当時の校長先生の言葉でした。屋上へ続く階段には、「のぼったら生き延びて降りるしかない」この一文が書かれており、津波は多くの被害を出しただけでなく、様々な人に大きな決断をさせていたこともわかりました。

この校長先生は、学校の責任者として児童や教員の命を守るべく、屋上への避難を決断した。その時に感じていたプレッシャーや責任は、私たちが想像することは難しい。

このように考えることができたのは、実際に来て当時の言葉を見たからであるし、テレビや話などでは感じることはできないものであった。最後の日に本当に貴重な体験をすることができたと感じました。

全体を通して

2泊3日で様々なことを考え、学ぶことができました。小学校のほかにも防災センターに行ったり、自由行動があったりと、復興が進む街も見ることができた。自分自身ができる予防は多くあり、すぐに実践できるものも多くありました。しかし、私が強く思ったことは、気持ちの準備はできないということでした。大切なものや人が、ふとした瞬間に消えてしまうことに対する気持ちの準備はできないし、「いつ起こってもいいように」と考えていても、実際に起きてしまうと、慌ててしまうと思う。今回のスタディツアーで、被災地については考えることができたが、自分の気持ちに関してはこれからも考えていこうと思いました。



スタディツアーから学んだこと

総合福祉学部 社会福祉学科 3年 渡邊 莉央

【始めに】

私がこのツアーに参加した目的は2つある。

1つ目は、中学1年生の時に被災地ボランティアを経験したことがあり、あれから8年経った今、どのように変化しているか知りたかったからだ。

2つ目は、私自身も2019年の台風19号の影響で小学校の体育館に避難したことがあり、その避難生活で感じたことや考えたことを振り返りつつ、改めて防災について考えたいと思ったからだ。

【1日目】

釜谷大須雄勝地域は、高さ約10mの堤防が道路に沿って長く連なっていた。その様子は、津波の被害を軽減させるため、人の命や住む地域を守るためのやむを得ない対策だとは理解できるが、海と人間が住む地域を完全に隔てている雰囲気寂しさも感じた。海は、普段は至って穏やかで、その景色は人々に感動を与えるが、時に大勢の命を奪う大津波を引き起こす。そんな海と堤防を見ながら、様々な思いが葛藤して複雑な感情を抱いた。



バスから見た堤防。海はどこ？



堤防の先。海がすごくきれい。



←堤防は人間と比べるとこの高さ。
165cmの人間だと3.5人分くらい？

大川小学校は、高さ8.6mの津波が押し寄せ、児童74名、教職員10名が犠牲となった学校だ。8年前に私はここを訪れたが、その時よりも周りが整備されていた。しかし、変わらず建物は震災直後の様子を生々しく語っていた。震災後、学校の対策や対応が問題視されており、その1つである裏山に実際に登ってみた。私の主観では、いくら普段からこの裏山に登り慣れていたとはいえ、経験したことの無い揺れを感じながら幅広い年齢層が80名以上もこの裏山に登るのはかなり大変だったのではないかと感じた。結果論ではなんとでも言えても、実際どうだったのかは当事者しかわからないと思う。しかし、もっと出来ることはあったとも思う。改めて日頃の対策が重要だと学んだ。

門脇小学校は、津波と火災が両方発生しつつも、裏山に逃げて全員が助かったという学校である。ここでの一番の学びは「垂直避難よりも水平避難を」ということだ。門脇小学校のように、地震の後に津波火災が発生することもある。そうなった時にただ屋上や高いところに避難するだけでなく、出来るだけ海から離れてなおかつ高いところに避難することが重要だと学んだ。



骨組みがむき出しになった小学校



裏山



裏山の道
狭く足場も悪い

【2日目】

石田沢防災センターは、災害時に帰宅困難となった地域住民や観光客等を受け入れる避難施設である。駐車場も広く、車で避難してくる人も受け入れられるようになっている。備蓄品も多く、災害時に大勢の人が最低限の避難生活を送れるように対策されていることがわかった。



石田沢防災センター



駐車場

千年希望の丘は、東日本大震災で発生した瓦礫などを活用して作られた場所で、最大11mの標高がある。丘の上のベンチの中には、防災器具やかまどがあったり、ソーラーパネルの下に非常用の充電器があったりした。このような自然を最大限に活用し、災害時の助けになるものが設置されている工夫に驚き、関心を持った。



千年希望の丘



ベンチの下に避難備品

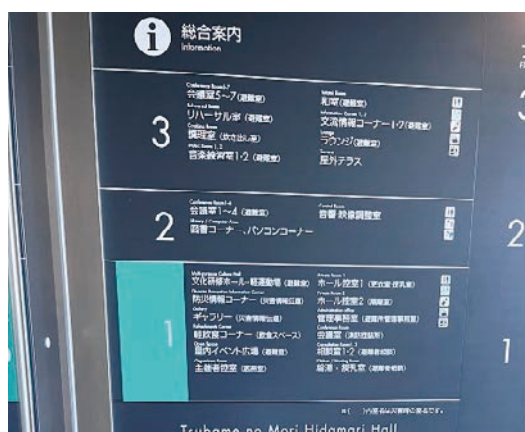
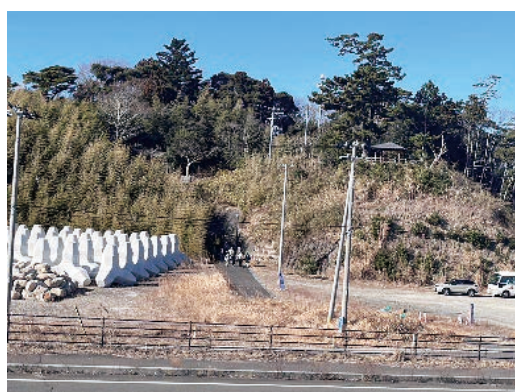


ソーラーパネルの下に充電器

【3日目】

津波が来ない高い山までに何分かかかるか避難体験を行った。最初にこの山に登ると言われた時は「5分くらいで着くだろう」と考えていたが、実際は2分くらいで着いた。避難場所は、高い場所に5分以内にいける場所と、様々な可能性を考えて避難先を一つだけに絞らず複数考えておくことが重要だと学んだ。

つばめの杜ひだまりホールは、普段は地域の交流拠点や防災拠点でありつつ、いざという時に避難場所にもなる施設である。施設全体で防災対策がされており、備蓄や部屋も充実していた。室名は括弧書きで災害時用も想定されており、災害時に混乱せずにすぐに共通認識で部屋割りができるのが良い対策だと感じた。また、災害時は、音楽室が乳幼児のいる親、和室は高齢者の部屋という配慮もあった。しかし、乳幼児用の部屋はかなり狭く、長い期間そこで過ごすことは大変だろうと思った。



()の中が災害時の室名



備蓄

中浜小学校は、様々な幸運が重なり、90人の命が守られた小学校だ。建物内は震災時の状況がそのままになっており、津波の威力を身に染みて感じた。一番印象的だったのは屋上までの出来事だ。屋上へ続く階段を登る時の当時の校長先生の「登ったらもう下へは戻れない」という言葉や、児童生徒を最優先させ、校長先生自身が一番最後に階段を登ったエピソード、屋上にあるダンボールや学芸品の作品など数少ない資源を活用して、暗闇の中、寒さを凌いだ様子がそのまま残されているのを見て、当時の

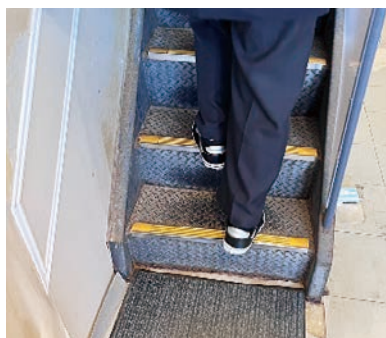
過酷さに胸が締め付けられた。あの暗闇の中、自分も不安でいっぱいだっただろうに校長先生が「明日には温かい朝日が見られる、それまでがんばろう」とみんなを励ました強さには本当に尊敬の気持ちを抱いた。また、この小学校では、2日前の3月9日に地震があった際、もしもの時にどうするか対策を練っていたこと、学校の建物自体を2m嵩上げしていたこと、円柱の柱で波を上手く逃がせたため建物が崩れなかったこと、10分後に津波が来るが「避難指定されていた近くの中学校までは20分かかる」という判断から垂直避難を選んだことなどたくさんの偶然と幸運が重なり助かったことも90人の命を救えたことに大きい。震災は、人間の対策はもちろん、偶然や運といったことも影響してくるし、それをいかに活かしていくかも重要だと理解した。



津波到達点と人間を比べると…



毛布が袋に入っていたことで
水に濡れておらず使えた



屋上に続く階段



アクリル板に視点を合わせると
津波と建物の高さの感覚がわかる

クロスロードのグループワークは、自分の考えや他者の考えと向き合うことが出来た。例えば、「あと数分で津波が来るが、ある人がいないと気づいた。それに対してあなたは助けに行くか行かないか」という問いに私は「助けに行かないでその人が亡くなってしまったら自分が死なせたと思ってしまう。結果がどうであれ、助けた後悔より助けない後悔はしたくない」と思っていた。しかし中には、「自分は非力だから他の人、他の手段を使って助けに行く。自分1人では行かない」という人もいた。状況と立場が違えば意見が変わることを学び、自分の考え方に気づけたこと、他者の気持ちを聞くことで新たな考えを発見できることを経験できてとても学びが深まった。

【全体のまとめ】

3日間を通して学んだことが3つある。

1つ目は、防災対策の大切さだ。防災備蓄や建物の構造について実際に見せていただいたり、説明していただいたりして、少しの工夫が命を救うことに繋がると知った。例えば、校舎を2m嵩上げするだ

けで水が一晩で捌け、翌日には校庭にヘリコプターが着陸できたことや柱を円柱にすることで波が上手く逃げ、柱が壊れず建物を維持できること、災害用の毛布は袋に入れることで津波により水に濡れることを防げるといったことがある。こういう些細な工夫が命を守ることに繋がり、逆にその工夫がなければどうなっていたか分からないということを痛感した。また、自分の防災グッズや避難先についてもしっかり把握し定期的に確認することが大切だと思った。

2つ目は、復興支援の様々な考え方や震災の出来事を風化させない大切さだ。ビデオやお店のポスターの多くに「がんばろう」や「遺されたものとして受け継ぐ」といった復興に向けての強い意志が見られた。私はその気持ちがすごいと思った。私が大切な人を亡くしたら、半年どころか10年経っていても未来に向けての前向きな言葉を発言できる自信が無い。一方で、一緒に行った仲間の中には「いつまでも悲観するのではなく、現地の美味しいものを食べたり特産品を買ったりして楽しむことも復興支援に繋がる」と言っていた。こういったことを話し合った後に先生は「被災した人の中には当時のことより復興を目指す今を見て！美味しいものを食べて！と思う人もいれば、もちろんまだ話を聞いて欲しい人もいる。いろんな人がいることを忘れてはいけない。」と仰っていた。これらを聞いて、どんな形でも、「3.11の震災を忘れないこと」「あの時の教訓を後世に受け継いでいくこと」を実現していくことが大切だと学んだ。

3つ目は、自分や他者の考えを尊重することの重要性だ。グループワークとしてクロスロードをやった時、自分の性格や考えと向き合うと同時にメンバーの様々な意見にも触れた。そこで自分には思いつかなかった新しい考え方を得る機会にもなり、とても学びが多かった。災害が起こった際はもちろん、何かを決断しなければいけないときに、自分がどう思うかはもちろん、周りの意見をしっかりと聴き、あらゆる可能性を考えて決断することが大事だと考えた。

また、このツアーに参加した目的の1つであった避難体験では、学校帰りだったため、所持品も少なく、お金も服も雨に濡れていた。残り少ない充電で土地勘のない場所の避難場所を必死で調べたが、実際の避難所はあまり備蓄が整っていなかった。しかし、その時に友人が服や充電器を避難所に届けてくれたことで避難生活を乗り切れた。その時の経験を振り返りつつ、この3日間のスタディツアーを経験して、千葉県はまだ防災意識が低いと思った。津波が来なくても台風や雪、火災、土砂崩れなどの可能性はある。防災対策は単に地震や津波のことだけを指しているわけではないし、自然相手に「絶対」は無いのだと痛感した。そして、被災地が12年でこれだけ復興を遂げてきたのは、地元の人の活躍はもちろん、ボランティアたちの力も大きいのだと思った。避難していた時に私の友人が助けてくれたように、誰かが困っている時に自分ができる範囲で行動できるようになりたいと考えた。

【終わりに】

私は東日本大震災当時、小学3年生だった。揺れる机の脚を一生懸命抑え、不安で泣いてしまう同級生がいた中、担任の先生が「みんなのことは先生が絶対に守るからね！」と叫んだのが今も忘れられない。自分も不安や恐怖があるはずなのに、誰かを励ます強さがあるということがどれほどすごいことか、今なら痛い程理解出来る。あれから12年。今の私は将来、乳児院や児童養護施設といった児童福祉施設で働くことが夢だ。あの時の担任の先生や中浜小学校の校長先生のように、安全はもちろん、子どもたちを勇気づけ、安心感を与えられるようになりたい。守られる立場から守っていく立場なのだと覚悟ができ、そのための防災対策などについて学べた有意義な3日間だった。

最後になりましたが、このような機会を提供して下さった成田さんや岩佐さんをはじめ、佐藤さん、小林先生、一緒に過ごした12人の仲間たち、カメラマンの河崎さん、運転手さん、各ホテルや施設の方々に改めて御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

復興支援プログラム 2022年度 スタディツアーを終えて

総合福祉学部 社会福祉学科 1年 越川 未悠

はじめに

スタディツアーを企画、開催するにあたって尽力してくださった職員の方々、現地で様々な経験や知識を話してくださった岩佐先生、カメラマンさん、一緒に見学、体験し意見交換してくださった皆さまに感謝申し上げます。

体験したこと・学んだこと・考えたこと

3日間でたくさんの学校や避難所、景色などを見学させていただきました。

松島のように自然が津波から人々や文明を守ったケースがあるが、大川小学校のように、自然によって津波が人々をさらってしまったケースもあることから、自然は美しいだけでなく、無慈悲な面があるということ、自然に抗うことは難しいことを学びました。



それに加えて、中浜小学校のように奇跡の判断によって生きることが出来た人々のケースがあることから、自然のなかでは皆平等で、運やタイミング等で結果は変わってしまうことを学ぶことができました。

災害を経て、10mの津波から守るための堤防をつかったり、震災遺構として建物をのこしておいたりすることで津波に対する意識を絶やさず後世に伝えていくこと、将来の糧になっていることを学びました。



津波で家が流された場所に産直市場をつくることで再び人が集まるようになり、笑顔が生まれたことはとても良いことだと感じることができました。

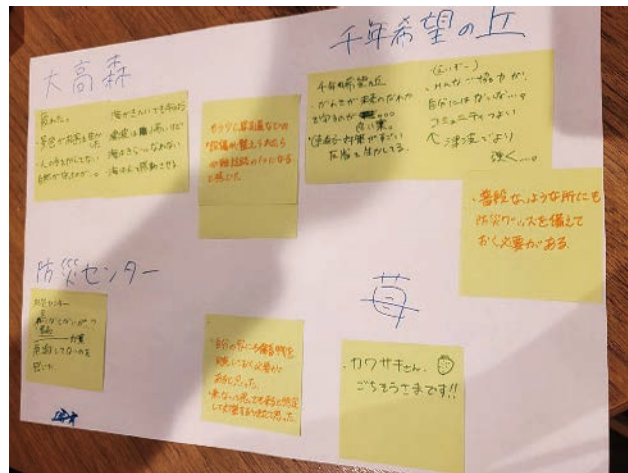
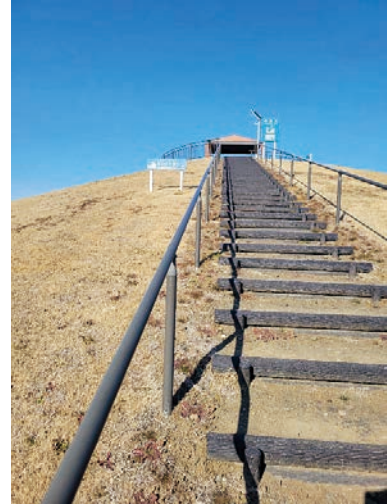
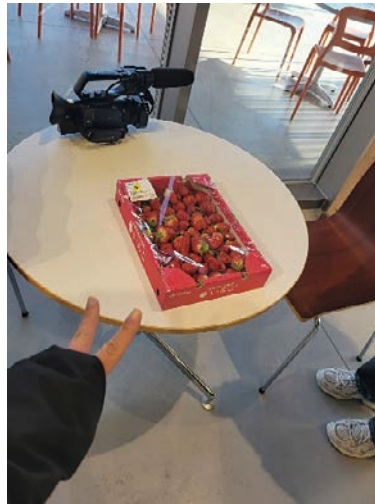
いちご、とても美味しかったです。

津波によって生まれてしまった瓦礫を使って「千年希望の丘」を作ったことで、誰かが自然と対峙したときに助かるかもしれない、自然が壊したものがいつかは自然から守ってくれると考えることができました。

「命や、物が無くなった」で終わらせるのではなく、これらを使ってどうやって未来に活かすかの正解に近い答えなのだと考えることができました。

防災センターと交流センターを見学させていただいたことで自分の災害に対する意識の低さを実感することが出来ました。

振り返りの時間で、自分が感じたことを他の方と共有することの楽しさや新たな考え方、感じ方を学ぶことができてとても楽しかったです。



まとめ

自然の素晴らしさと恐ろしさ、人類の次に進もうとする力の強さ、日常の中での災害に対する訓練の必要性、備え考えることの大切さなどを学び、考えることが出来ました。

貴重な機会に参加することが出来てとても嬉しいです。本当にありがとうございました。

スタディツアーを振り返って

コミュニティ政策学部 コミュニティ政策学科 4年 手崎 亮佑

今回のスタディツアーでは、「いまできることを見つける」ことを目的に参加しました。

この目的に対しては大きな成果が得られたと考えています。これまで、宮城県や福島県の被災地を訪れたことがあります。今回、訪問した雄勝、松島、山元町はそれぞれ被害の状況が異なります。今回ツアーで改めて感じたことは、津波の恐怖です。被災した地域では東日本大震災の浸水地域がわかるように標識が建てられており、どこまで逃げれば助かる可能性を上げることができるか判断しやすい工夫がなされているところもあります。また、震災遺構の大川小学校と中浜小学校の見学では、当時のまま残されており津波の恐怖がよくわかりました。

今回のツアーのテーマの一つに学校現場の防災についても考える機会もねらいとしてあったのではないかと思います。中浜小学校での当時の校長先生のインタビューを見て、校長先生の判断にはとても難しく大きなプレッシャーがあったと感じました。そして、判断が早かったのは、普段からの職員同士のコミュニケーションが取れていたからではないかと感じました。

中浜小学校の当時の校長先生のインタビュー映像から、学校が行う避難行動はとても難しいと感じた例が山元町の二つの小学校の避難方法です。この二つの小学校はどちらも全員が避難できましたが、当時の混乱した状況下での判断は一概にどちらが正しいと断言できるものではないと思います。一つは小学校の高いところに避難する垂直避難をして助かり、もう一つの小学校では、保護者の車を活用して内陸部に避難する水平避難を行い助かることができました。どちらも助かりましたが、中浜小学校では、小学校のかさ上げや校舎の特徴、自衛隊のヘリコプターが救助しやすい場所になっていたことなどいくつかの奇跡がありました。

今回のスタディツアーから、いまできることは、防災のグッズを持ち歩き万が一の時に備えることではないかと考えています。日本の歴史を振り返ると、全国で様々な災害が発生し原因も様々です。しかし、それぞれの災害にも共通していることもあります。それは、どれも混乱する状況があるということです。東日本大震災の教訓をもとに同じ過ちを繰り返さないということが大切だと思います。

震災遺構の場所を巡るだけでなく、東北の海の幸を堪能する機会もありました。雄勝では、道の駅硯石の里おがつの中にある伝八寿司で海鮮丼を堪能しました。この施設は雄勝の中心として雄勝に来る



宿泊地 キボッチャ
元野蒜小学校

人が気軽に立ち寄れる施設になっており、雄勝を代表するコミュニティ施設としての役割があると感じました。2日目の松島では、名産の牡蠣を堪能することができました。どちらの地域も機会があればまた来たいと思える地域でした。

ツアーを通して、震災の被害を目の当たりにして難しい感情を抱きますが、その地域の名産や観光を巡ることも大切だと思います。震災から12年が経とうとしています。当時の状況を知っている人がだんだんと少なくなりつつあり、これからの世代は震災を経験したことがない人が増えていきます。こうした状況でも語り部のように当時の状況を伝えることが貴重な活動になると思います。今後も震災という大きな被害を受け、もう一度街を盛り上げていこうとする活動に大きな支援が広がると良いのではないかと思います。そして、被災状況も見ながら今の地域の現状に目を向けてどのように変化しているのかを見ることも重要なのではないかと感じました。そして、今回のツアーに参加して、身近な人に被災地の様子を発信して、防災意識の向上に寄与できることもあったと思います。こうした輪が淑徳大学から広がると良いのではないかと思います。

最後に、今回のツアーで出会えた縁を大切にしたいと思います。淑徳大学の各キャンパスから様々な人との交流ができたことで充実した日々になりました。これからは、防災の意識を向上し、もしもの時には積極的に行動していきたいと思いました。

ありがとうございました。



震災遺構 中浜小学校
全員が救助された小学校

防災といのちの大切さ

コミュニティ政策学科 コミュニティ政策学部 3年 吉澤 一希

今回、3年生ながら初めて学内ボランティアセンターが主催するスタディツアーに参加し、改めて災害に対する考え方やいのちの尊さについての多くを、自分の目で、経験した人の生の声で感じることができた。

まず、今回のツアーに参加した動機は、私がまだ小学5年生の時、少年野球を通じて親善試合という形で被災地の同級生の子供たちと交流し、被災して間もない津波の痕跡を見たりしたことがあり、当時はそもそも津波というものを初めて知り、「こんなに大きい波が来ることがあるのかと、怖いな」といった程度の感想しか持ち帰ることができず、それから毎年震災が起きた3月あたりが訪れるたびにその後の被災地はどうなっているのだろうと感じて過ごしていた中で、当プロジェクトの募集メールを見すぐに応募を決めた、というものである。

事前学習に関しては、当時私がみた被災地の景色の記憶だけがほとんどで、現地で見ながら、肌で感じながら学びたいと思ったため、行先の写真を調べてみるにとどまった。

下記に今回のツアーで体験及び学んだことについて、写真を交えて1日ごとに印象に残ったことを記していこうと思う。

初日には雄勝地域にて堤防見学、震災遺構として大川小学校を訪れた。雄勝地域では、震災後に建てられた10mもの堤防の上のすぐそばに建てられた道の駅があり、そこには雄勝の魅力が詰まっていて、特にすぐそばにあるきれいな海から獲ることができる海産物を実際にいただいたが、雄勝の自慢である海産物を生み出している海と10mもの堤防を挟むことによって、距離を置いてしまっているようであるといった小林先生の話はすごく印象に残っていて、自然との共生の難しさをおぼえた。また、堤防の上のアスファルトには大きなヒビがあった。昨年の3月に起きた地震によるものという記載があったが、これを見て「大きな堤防があるからといって、安心はできないな」と感じた。自然による現象は震災時と同様に、人の想像を超える力が発生することもあるため、安心できる防災はないと感じた。

震災遺構として訪れた大川小学校は、当時の被害状況のまま残されており、その校舎を目にした瞬間言葉を失うくらい残酷なものであった。普段から上り下りしていたという高台が小学校のすぐそばにありながらも避難をすることができず、多くの犠牲者が出てしまったことから、緊急時にはパニックに陥ってしまい冷静になることが難しいということも災害の怖さだと感じた。校庭のあちこちには多くのことばが刻まれていて、「抱いている夢や希望を、未来の自分が叶えるために必要なことは何ですか それは あなた自身が生き延びることです」このことばにすごく感銘を受け、命の大切さに加え、生き抜くことの意味を再確認することができた。

2日目には石田沢防災センターから始まり、松島見学、千年希望の丘を訪れた。石田沢防災センターは、震災を受けて6億円をかけてつくられた施設で、震災に関する記録や情報の展示に加え、テレワークスペース、災害に備えた大きな備蓄倉庫を備えていた。普段は市民や観光客の休憩所や、防災を学べる場所として、有事の際には避難所として、多様な使い方ができる非常に便利で重要な役割をこれから



何年も果たしていくべき場所であると感じた。

日本三景である松島は、多くの小さな松の木が茂った島々と周りに広がるきれいな海があることで有名であるが、この多くの島々があったことによって津波の威力が分散され、松島地域では他の沿岸部よりも被害が少なく済んだと聞いて、自然が自然による現象から人々を守ることもあるんだという、人間ではなしえないことが起きることも自然の良さと感じることができた。

東日本大震災より発生した震災廃棄物（がれき）から再生した資材を活用して作られた千年希望の丘では、震災による大きな被害を受けて、災害の被害を最小限に減らす減災という考え方で、防潮堤、千年希望の丘、護岸、かさ上げ道路からなる多重防御をすることで、当時のような被害が再び起こることのないように厳重な対策をなしていた。

3日目は避難体験、震災遺構として中浜小学校、山下地域防災交流センターを訪れた。朝一番に行われた避難体験では、地上から歩いて2分もあれば十分な高さまで避難することができる当時も実際に避難した人がいた高台を実際に上ってみて、高台などをあらかじめ認知しておくことができれば、素早く安全を確保できると感じたため、少なくとも自分の地域のハザードマップは確認しておくべきだと感じた。

震災遺構の中浜小学校では、海に非常に近い立地にも関わらず、垂直避難で90人もの命を守った当時の校長先生の覚悟を決めた階段の印象が強く、自分自身が大人になった今、今後どういった場面でどれだけの人数の命を左右する判断が訪れてもおかしくないと思い、災害の知識を一つでも多く取り入れたいと感じた。また、小学校の土地が2mかさ上げされて作られていたことによって屋上への波の到達を防いだり、救助用ヘリが着陸することができたりなど、絶望的な状況から全員が助かるまでにあった奇跡についても知ることでよい勉強となった。

山下地域防災交流センターでは、見た目から内装までおしゃれなつくりの公民館であるが、その中にあるたくさんの部屋やスペースが緊急時には避難所、避難スペースとなり、さらに建物の周りには耐震性貯水槽やかまどベンチ、マンホールトイレ、地域の消防団との連携など、最先端の防災機能が数多く備わっていて、震災から10年以上経った今、年々防災意識が高まっていることを実感することができた。

今回のスタディツアーにおける感想としては、いつ、どこで、どんな状況でも起きうる自然現象及び災害に対して、人々がすることのできる災害対策は自分自身が今まで得てきた知識の何倍にも及んで対策を行うことができると知った。緊急時のために備えることについて、備えすぎ・過剰だといったことは絶対にならないという考えを持ち、「できることを、いま・ここから」という本学の復興支援スローガンのように、バスの中で岩佐さんに見せていただいた持ち運び用防災セットのような、身近で一番簡単に実行することができる災害対策からでも必ずしようと思うことができた。時に自分を、時に大切な人を、時に見ず知らずの人を助ける機会が訪れるかもしれない心の片隅に置いておこうと思った。

さらに、最後に参加者全員からのそれぞれの想いを聞くことができ、みんな同じように感じたことや、まったく別の視点や考えで学んだことなど、このメンバー・この人数で行けたからこそ意味のあるスタディツアーになったのではないかと感じた。そして、今回のツアーを企画してくださった成田さん、佐藤さんはじめ、小林先生、現地講師として付き添ってくださったOBの岩佐さん、バスの運転手さん、同行することができたメンバーに大きな感謝をしたいと思います。



復興支援プログラム 2022年度スタディツアー

看護栄養学部 栄養学科 1年 加藤 杏菜

スタディツアーに参加しようと思ったきっかけ

去年のパネルシアターキャラバンに参加した際、東日本大震災について学ぶ機会があり、今回詳しく学ぶことができるということで参加した。

釜谷大須雄勝 堤防見学

9.7mの堤防は、とにかく高かった。小林先生が「海とまちが断絶しているように感じてさみしい」と言っていた。しかし、津波が起こった際私が現場に居合わせたら、海を見るのが辛くなり、堤防をつくる事に強く賛成していたかも知れないと感じた。この3日間を通しておいしい海鮮を食べたが、あの恐ろしい津波を経験し高い堤防を立てても、海に出ている地元の漁師さんに感謝しなければならないと感じた。



大川小学校

海から10km離れている大川小学校では、津波により多くの小学生・先生の命が奪われた。大川小の子どもたちは、ここで最期に黒い波を見てどんな思いをしたのか、想像するだけで恐ろしかった。しかし、それが現実で実際にあったことなのだ。このことを忘れてはならない。そして、二度と起こしてはならない。自分が今できることは何か考えて、防災に取り組んでいく。



門脇小学校

この小学校では津波火災が押し寄せ、それが見えたため裏山の日和山公園に逃げる事ができた。ここで感じたことは津波が起こった時、火災も同時に起こる可能性があるということ。今までは津波に警戒をすることが大切だと思っていたが、火災も起こる可能性もあるという言葉聞き、二次災害、三次災害があることを思い出した。1つのことだけに警戒すれば良いのではなく、様々な可能性に備えることが大切だ。

松島町石田沢防災センター

この防災センターは、観光地「松島」の近くということもあり、車での避難に特化した緊急避難場所だ。大型車10台・普通車180台・障がい者向けの車3台を停めることができる。また松島町役場が津波などで浸水してしまった場合、この防災センターに役場の機能を移すことができるようになっている。ここで感じたことは、観光地に足を運んだ際の避難場所についてだ。自分の家からの避難場所は分かっている、旅行先など普段行かない場所での被災をあまり考えたことはなかった。災害は「いつ」「どこで」起こるか分からない。そのため、出先でも必要最低限の知識を得ることは大切だと感じた。

千年希望の丘

復興のシンボルとして、震災時に発生した瓦礫が使われた14の丘がある。この丘は海からの災害を少しでも小さくするために作られたものだ。丘に登ると、ベンチの中に防災グッズが入っており、テントを立てることができるようになっていた。これは最悪の場合、垂直避難した人が使えるようにするためのものだ。周りは更地になっていたが、震災前は数多くの家があったと思うと悲しかった。しかし、これが現実だと思い知らされた。また、東日本大震災の後の調べで、過去にも同じ場所で大地震が起きているデータが取れていたことが分かった。次の災害が起きた時の対策を今からとることができるのではないかな。



中浜小学校

この小学校は90人の命を守り抜いた。屋上への避難だったため、もう少し津波が高いところまで来ていたら助からなかったかも知れない。本来であれば、歩いて20分ほどの高台にある中学校に避難するところを、当時津波が到達するまで10分だという情報が入ったため、屋上の避難に決めた。そして屋上まで津波が来なかったのは、学校を立てかえるとき高潮対策で2m地盤を高くしたからである。ある災害について予防したことが、別の災害でも大きく関わることを学んだ。

つばめの杜ひだまりホール

ここでは避難時の部屋の名前があらかじめ決められていた。これは他の施設では見たことがなかったが、素晴らしいことだと感じた。なぜなら、避難所でもどの部屋で何をするかを決めるのに時間がかかってしまうからだ。あらかじめ決めておけば、避難者が迷うこともなく、案内する手間も減る。このような対策をとることで、迅速に避難者を受け入れることができると感じた。

3日間を通して

現地の被災状況を見なければ分からなかったこと、知らなかったことが数多くあった。災害で、まち・思い出・命が奪われた。被災地を訪れなければ、この現実を重く受け止めることはできなかっただろう。いままで災害を甘く見ていたと反省した。

東日本大震災があったことを人々は絶対に忘れてはならない。そして今回このツアーに参加し、私自身災害への意識が変わった。まずは、普段から岩佐先生が持っていたような防災グッズを持つところから始めて行こうと思う。

3.11から学んだこと

看護栄養学部 栄養学科 1年 知久 陽香

多くの人が地震や津波によって帰らぬ人になってしまった東日本大震災。あれから12年経っても、行方不明者が見つかっていない家族もいます。今回のスタディツアーでは宮城と福島の実地を見学することで、いろいろなことを考えることができました。

まず私がスタディツアーに参加した理由は、被災地を実際に見たかったからです。震災時は住んでいた地域が山地ばかりで津波の被害がありませんでした。テレビで福島の映像を見たとしてもあまり記憶がなく、地震に対して恐怖心が薄かったと思います。そのため、被害が多かった宮城や福島の被災地を自分の目で見て、聞いてみたいという心情があったため参加をすることにしました。さまざまな場所を回ってみて特に印象に残ったのは、大川小学校と防災センターと中浜小学校です。

1日目に行った大川小学校はとても衝撃的でした。2階がなく屋上もないため、あっという間に津波に飲み込まれてしまったというのがただで悟ることができました。語り部の岩佐さんの話では、「ここで津波に流されてしまった108名中74名が亡くなってしまった」という話を聞いて、さらに恐怖心に襲われました。中が丸見えになって椅子も机も無くなっていた教室や津波の勢いで倒れてしまった柱が、とても生々しく感じられました。学校の近くにある山に登り全体を見渡せるところまで行くととても高く、津波到達地点よりも上にありました。ここに登ることができていればもっと多くの人が救われたのではないかと感じました。



2日目に行った防災センターはさまざまな工夫が施されていました。車やバスが多く駐車できるため、より多くの人を避難させることができ、倉庫には防災グッズがたくさんありました。初めて見た防災用のトイレは、周りにカーテンがあり、車椅子の人でも使えるように手すりなどが設置されていました。また、避難所としてだけでなく講習会やイベントなどでも利用ができるためより多くの人に防災センターを知ってもらうことができると感じました。

3日目に行った中浜小学校は、津波に流されたものがほとんど当時のままになっていたため、一つひとつ見るたびに背筋が凍るような場所ばかりでした。音楽室で見た映像では、先生一人の判断で学校にいる生徒や避難



してきた地域の人たちの命が変わってしまうこと、その責任の重さを知りました。

この3日間を通して、津波によって当たり前で過ごしていた日常がすべてなくなってしまうこと。そして災害に備えての対策の重要性を以前よりも強く感じることができました。宮城や福島の人たちは震災の悲しみを忘れるのではなく、受け継ぐため復興に力を入れている姿に感動しました。私は津波の映像を見てから恐怖心が離れません。しかし、同じくらい大高森や松島で見た透き通った海がとても記憶に残っています。そのくらい地域の一人ひとりの力によって、外からも観光に来てくれるほどに発展することができたのだと感じました。一緒に参加した他学部の先輩方とワークショップをして自身の視点だけでなく、全く違った視点から見た意見もたくさん聞くことができ、自身の視野が広がりました。今回学んだことを活かして、岩佐さんのように常備できるものを用意するなど身近なことから意識していきたいと思いました。「私の地域には津波は来ないから大丈夫」ではなく、今までよりも大きい被害や津波が来た時のこともきちんと想定しておくことが大切なことだと感じました。



スタディツアーに参加して

看護栄養学部 栄養学科 1年 加瀬 結

堤防見学では、遠くからも高いと感じたが、堤防の前に立つことで高さをより感じる事ができました。

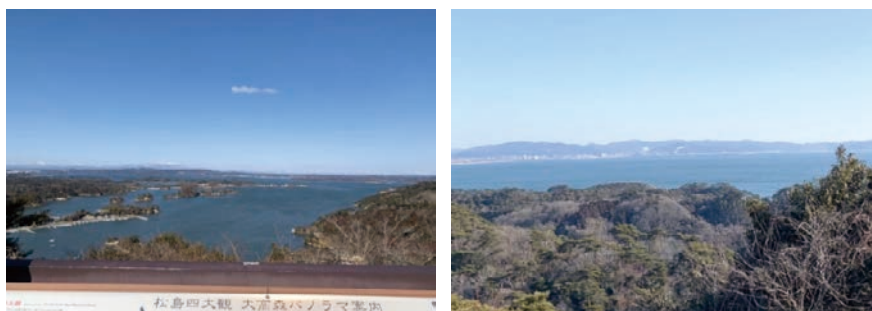


大川小学校では、体育館への連絡通路の柱が根本から折れていて、太い柱がなぎ倒されてしまうほど水の力が強かったことがわかりました。

大川小学校では、屋上がなかったことにより多くの生徒や、教員の方が亡くなっていて、近くの建物では屋上に避難したことで助かっていたので、より悔しいと感じました。



大高森に登って高いところから景色を見ました。島があったことにより津波の威力が弱まり被害が抑えられたという話を聞いて、海という自然が津波として災害を起こすこともあれば、島という自然が人を守ることだってある、規模が大きすぎて人間の力だけではどうにもできない部分もあるのだらうと感じました。



松島町石田沢防災センターには、広い駐車場や毛布、トイレなどが貯蔵されている倉庫がありました。車椅子の人でも利用できるトイレもあり、種類が豊富だと感じました。

自分の住んでいる地域にも防災センターがあるのか調べたことがなかったので調べてみようと思いました。



千年希望の丘では、丘から海を見るととても遠くに見えたのに丘の津波の到達地点は高く、ぎりぎりのところまで迫っていて高さに驚いた。加えて、丘の後ろの空港にまで波が到達していたと聞き、距離もすごかったのだと実際に見ることで感じました。また、丘の上には防災グッズが入った収納ベンチや非常時にかまどとして使えるかまどベンチ、非常時に携帯電話の充電ができるソーラー照明があり、災害に備え対策がされていました。



中浜小学校は、校長先生の判断により屋上に逃げたことで児童の命を守ることができていて、素早い判断が多く命を守ることにつながったのだと思いました。屋上下1mほどまで水がきいて、ここでも津波の高さを感じることができました。2m土地を高くして水が引くのが早くヘリコプターが止まることができたこともよかったことの1つだと聞き、いろんなことが重なって多くの命が助かったのだと思いました。また、学校に毛布があってそれを避難所に持って行ったという話を聞き、学校に非常時に必要なものを準備しておくことの大切さを感じました。



スタディツアーを通して、実際に建物や海を見ることで距離感や津波の持つ強さ、大きさを改めて感じることができました。避難体験の際には自分が思っているよりも、短い時間で高いところまで登ることができたので、災害が起きたときには少しでも高いところまで逃げ切ることが大切だと思いました。そして、逃げるためにもどこに逃げるのか、どうやって逃げるのかを日頃から考えておくべきだと感じました。また、災害が起きたときには素早い判断が生死を分けると思いました。その判断を短い時間で正しく行うためには、情報を集めること、知識を持つておくことが必要だと感じました。今回スタディツアーに参加したことで、災害が起きる前の準備や施設の情報を集めておくことの大切さについても改めて気づくことができました。

復興支援プログラムで学んだこと

看護栄養学部 栄養学科 1年 日下部 咲木

私が今回の復興支援プログラムに参加した理由は、被災した地域を実際に見てみたいと思ったからです。実際に被災した小学校を見学したり、津波の映像を見たり、被害にあった方の話を聞いて言葉を失ってしまう部分がありました。

私が住んでいるところは津波が来ないところに住んでいるので、映像でしか津波を見たことがありませんでした。映像で見ただけでも怖さが伝わってくるのに、実際に津波の被害を受けた方は映像以上の怖さを感じていたことが分かりました。津波の動画を見て、テレビで見てた時も恐怖を感じていたけど、津波によって被害を受けた場所を訪れた後に見た津波の映像はとても怖く感じました。実際に津波の被害を受けた建物を見て自然の怖さを学ぶことができました。どんなにきれいな海でも津波によって、たくさんの人の尊い命を奪ってしまうことが分かりました。大川小学校で津波の怖さを改めて感じることができました。

大川小学校の後ろが山になっていて実際に上ってみたら歩きにくかったです。上る前は「津波が来るってわかっていれば山を登ればもしかしたら命は救われていたのかもしれない」と思っていたけど、実際に上ってみたら、斜面が急だったりで、この歩きにくいところを小学生が歩くと考えたら難しい部分があると感じました。高学年の子たちは登れたとしても低学年の子たちは難しいと思います。逃げることに必死になるので抜けたり、怪我をする可能性があると感じました。

大川小学校にあった遺跡に書いてあった言葉に重みを感じました。「ここには町がありました。生活がありました。命がありました。子供たちが走り回っていました。」この言葉を見た時胸が痛かったです。津波が来る前のことを想像すると苦しかったです。

大高森のハイキングは思ったよりもきつかったです。歩きにくい道でした。片道20分と長い時間歩いて、頂上にはきれいな景色がひろがっていました。海の色がとても綺麗でした。高いところに上っていけば津波は来ないけど、上るまでが大変なことが分かりました。みんなが皆高いところに行ける人ではなく、高齢者や自力で歩けない人たちは避難が大変だと感じました。

歩いている途中で転びそうになったり、道がガタガタで危ないところがあったので道を少し整備をしたほうが避難しやすくなるのではないかと思います。

頂上で景色を見た時に、今は復興が進んでいて綺麗になっているところがたくさんあるが、復興するまでの苦労や辛さがあるからこそ今の松島があると感じた。

防災センターを見学して、自分の日ごろの防災に対する意識が低いことを改めて感じることができました。自分が住んでいる地域は、高台にあるから津波の心配がない、地震が来てもそこまでの被害にあわないから防災グッズはなくても大丈夫だと思っていたけど、備蓄倉庫を見て、防災グッズを普段から家などに備えておく必要があると感じました。常に津波が来ないところに居るわけではないので、家での防災グッズだけではなく、カバンなどに入れられる防災グッズも常備したほうが良いと感じました。日ごろから防災への意識を高めようと感じました。

千年希望の丘ではベンチの下に防災グッズがあったことに驚きました。ビデオを見て、復興に対する強い意志を感じることができました。

松島観光では縁結びの神社に行きました。将来素敵な男性と出会えるようにお願いをしました。お昼ご飯は生ガキとカキフライ定食を食べました。生ガキは初めて食べたけどとてもおいしかったです。また機会があれば食べたいです。お昼ご飯をたくさん食べたのにも関わらず、縁結び神社に行く途中においしそうなお団子を見つけたので食べました。

3日間を通して防災についてさらに関心を持つことができました。災害はいつ来るかわからないので万が一のことがあったらこの3日間で学んだことを生かせるようにしたいです。宿泊地で皆でお菓子を食べたり、カードゲームをしたり、卓球をしたり、充実した時間を過ごすことができました。

またこのような機会があったら参加したいです。

12年の時を経て、取り戻したもの

経営学部 経営学科 1年 桑折 奏斗

1. 事前学習

2011年3月11日14時46分東北地方太平洋沖地震が発生した。地震の規模はマグニチュード9.0と日本周辺における観測史上最大の地震であり、震源域は岩手県沖から茨城県沖と広範囲であった。また、地震による津波の被害は、北海道南岸から関東地方の太平洋沿岸部にまで及んだ。加えて、福島第一原子力発電所に到達した津波により、原子炉の制御機能を失い、メルtdownや水素爆発を起こしたことで、福島県の広範囲が被ばくし、立ち入りが規制された。警視庁緊急災害警備本部の集計によると、東日本大震災による死者・行方不明者数は、令和4年2月現在、12都道県で1万8,423人に及び、震災関連死者数も令和4年6月現在、3,789人に及ぶ。

2. 体験

- 釜谷大須雄勝地域 堤防見学

雄勝地域に建設された堤防は、高さ約10m長さ3km。毅然と立つ雄勝の巨大な堤防は、海と仲たがいをしたと感じ取ることもでき、津波の怖さを顕著に物語るとともに、復興は単純ではないと感じた。

- 震災遺構 大川小学校

大川小学校では、全校児童108名のうち74名の児童が死亡・行方不明となった。地震発生から避難開始までの空白の時間、避難の判断材料となる情報や時間が多くあったにもかかわらず、学校という場所において多くの小さな命を救えなかったことが後の裁判において激しく議論されたが、残された遺族の思いや憤りが積もっている。

混乱している中で重大な判断が迫られた当時、亡くなった児童や先生がどうして津波到達直前まで避難を実行することができなかったのか、少ない検証や証言、記録の中から憶測することができない現状を見たことで、『亡くなった人の声を聴くことはもうできないのだ』ということを感じた。

「守るべき命、守れなかった命」大川小学校を震災遺構として残していくことの重要性、そしてこの先、私たちが生き抜くための議論や対策をとるための土台となるもといえる。

- 震災遺構 門脇小学校（日和山公園）

地震や津波だけが被害のすべてではなく、多くは津波火災によって被害を受けた。門脇小学校もその一つであった。門脇小学校に津波火災が押し寄せた中で、とっさの判断によって、日和山公園に逃げ込むことができ、奇跡的に犠牲者をなくすことができたが、一つ判断を誤り、行動が遅ければ被害は予想することができなかった。

海岸に近く、開けた土地では垂直避難を余儀なくされるが、迫りくる火災に対し、津波によって逃げ場をふさがれ、命を失ってしまうことを初めて知った。

- 大高森山

松島海岸の被害が少なかった要因は、松島周辺の島々が障壁となり、津波を軽減したことにある。反対に、障害となるものがなく、津波が直撃した東松島地域は甚大な被害を受けた。

- 松島町石田沢防災センター

災害時に帰宅困難となった地域住民や観光客の受け入れを目的とし、平時は東日本大震災の記録や資料の展示スペースや、ワークスペースを開放し、イベントや行事、会議室として、松島の背後地にある立地を活かした交流施設として多岐に活用されている。

有事の際には、防災行政無線や自家発電機が機能することで、役場庁舎の代替として機能することも可能であり、大型の備蓄倉庫や耐震貯水槽が備わっていることから、防災拠点となる施設でも

ある。しかし、新型コロナウイルスなどの影響により、水や非常食などの備蓄が最低限となっており、屋内の収容人数も450人と限られていることから、長期の避難ではなく、一時的な避難を目的としていることがわかる。

また、景観条例に沿った街並みの維持に準じなくてはならないことや、施設を建設する以前は田畑であったこと、沢の流域であることから、津波や地震の対策だけではなく、土砂災害の対策や整備など、平時からのメンテナンスが必要である。防災拠点の設置は、建設のコストだけではなく、維持していくためのコストが幾重にも重なる。防災という言葉の意味は、決して災害にだけ焦点を当てたものではないと言える。

- 岩沼市「千年希望の丘」

堤防の建設だけではなく、かさ上げ道路や丘の建設を行い、津波に対して多重の防壁をつくることで減災につなげる取り組みの一つだ。建設する際、震災廃棄物を活用し、復興のシンボルとしての役割を果たしている。

4回の植樹プロジェクトが行われ、自然を取り戻していく光景には希望を感じるが、津波によって一帯が更地となってしまったことも同時に思い起こされる。

高台に設置されている東屋には、ほかでは珍しい防災毛布やかまどベンチ、電源などが設置され、細かな工夫と対策が施されている。

この、千年希望の丘は、自然と生きていく『希望』の地であり、これからも続く復興の出发点であると感じた。

- 震災遺構 中浜小学校

海岸から400mの場所に位置する中浜小学校では、屋上に避難した90人全員が命をつなぐことができた。

平成元年に再建された中浜小学校は、2mかさ上げをして建設されたことによって、奇跡的に屋上への浸水を最小限にすることができたことや、体育館から取り出すことのできた毛布、翌朝までに水がはけ、救助を迅速に行えたこと、震災の数日前に起きた地震を受けて、学校独自で避難計画などの見直しが行われ、迅速な判断につながったことなど、多くの奇跡的な出来事によって、多くの命を救い出すことができた。



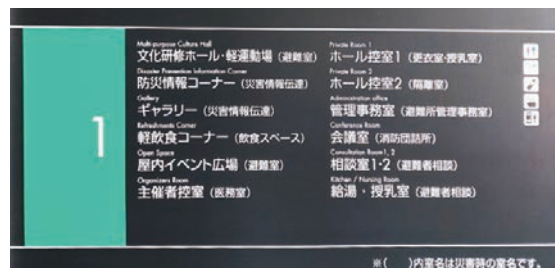
校舎に残された当時の痕跡は、当時彼らがどのようにして生き延びたのか、どのような思いを抱いていたのか、私たちに問いかけ、考えるきっかけにもなっている。

- 山元町防災拠点・山元地域交流センター

あらかじめ有事の際の施設の活用方針を明確にし、部屋ごとの機能を明確にしておくことで、災害時の迅速な対応につなげることができる。

自家発電機や耐震貯水槽、かまどベンチ、マンホールトイレなど設備や、消防団との連携、約4,000人3日分の備蓄が備えてある。

防災拠点として機能する施設は多くあるが、それぞれに目的とする機能がいくつかあり、平時から地域に密着した機能を有することが何よりも大切である。



3. 事後学習

スタディツアー終了後、東日本大震災に係る記録映像、自衛隊が記録した映像や活動を視聴した。

震災発生時、東北地方の太平洋沿岸地域の活動拠点となる多賀城駐屯地を含めた、多くの自衛隊基地も津波による浸水被害を受け、車両や航空機、装備が不足し、救出活動に遅れが生じる原因となった。震災以前は、津波が基地まで到達しない想定がされており、実際に津波が来た当時、自衛隊員は茫然と立ち尽くすことしかできなかった。特に多賀城駐屯地では、災害派遣の出動準備が完了直前に津波が到達してしまったために、装備の不足や活動の硬直が顕著であった。そうした状況においても、基地外で被害にあった隊員一人ひとりが救出活動を行い、多くの人々を救出していた記録があり、様々な場所でそれぞれの人が、自分なりの使命を果たし、困難を乗り越えていたのだと知ることができた。



4. 感想

一見して完全に復興が終わっているようにも見えるが、一部では河川に堆積した土砂がまだ残っている風景や、継承できずになくなってしまった文化、人口の減少など、震災はいまだに続いていることを知ることができたのは、現地に足を運び、体感したことで得られたものだと感じました。

自然と共に生きていくため、小さな命を守るため、明日への希望をつなぐため、防災用品を備えてみることや、地域のハザードマップを入手すること、自治会に参加して近所との交流を深めてみるなど、防災に関わらないことも出来ることから一つひとつ、普段の生活の中から紡いでいくことが大切だと実感しました。

震災から12年が経ち、多くの地域で復興が進み、人々の記憶から風化が進んでいる今、災害が起きたとき自分はどのように動けるのか、その場面によって状況は変わっていくが、災害について一人ひとりが向き合う機会を増やしていくことができたと思います。

- 参考文献リスト

警視庁（2022）「平成23年東北地方太平洋沖地震の警察措置と被害状況」

復興庁（2022）「東日本大震災における震災関連死の死者数」

スタディツアー

人文学部 歴史学科 2年 青木 悠人

私はこのスタディツアーで、災害の想像を超える恐ろしさ、災害に対する備えの重要性、人と人とのつながりの大切さを学ぶことができた。

1日目は大川小学校に足を運んだ。この小学校は多くの生徒・職員が犠牲になった学校だった。生徒78名中74名が犠牲になり、うち4名は今も行方不明に。教職員も11人中10人が犠牲になった。まず校舎を見たときの衝撃が強かった。外壁はどこも一切なく、残っているのは柱と屋根だけだった。このような建物をみたのは初めてで驚きが隠せなかった。1階はなにもなく、2階には窓枠だけが残っていた。震災の日、ここにいた生徒たちは地震が起こるまではどんなことをして過ごしていたのか、楽しく遊んでいたのか、みんなと一緒に授業を受けていたのか、そして地震が発生したときの恐怖、津波が見えたときの恐怖、そのときの生徒のことを思うと胸が痛かった。跡形もなくすべてを破壊してしまう津波の恐ろしさをこの大川小学校で知ることができた。しかし、2階の教室を破壊するほどの大きくて強く、高い津波を想像することは全くできなかった。



夜のディスカッションでは実際の津波の動画と、淑徳大学のボランティアの動画を見た。津波の動画には衝撃を受けた。建っていた家、止まっていた車も数分後には流され、気付いたら一面が海になっていた。人々の生活が一瞬にして奪われる瞬間を見て言葉がなかった。大学のボランティアの動画では、当時の学生の一つひとつの言葉がとても重く感じた。個人的には「足元に転がる木片一片でさえ、誰かの財産だと気づいた時、私は瓦礫を『瓦礫』と呼ぶことが出来なくなりました」という言葉にとっても感動した。どんなものでも、壊れていても、それは直前まで誰かの使っていたものかもしれない、誰かのお気に入りのものだったのかもしれない、たくさんの思い出が詰まっているもの、ということに気づかせてくれた言葉だった。また、学生はボランティアで被災地へ行き被災した人たちを支えていたが、その学生ボランティアを支えていたのが炊き出しをしていた現地の方々だった。困っている人を支える人がいる。そしてその支えている人を支えている人もいる。人はこのようにしてお互いを支えながら過ごしているということを強く学ぶことができた。

2日目は大高森、石田沢防災センター、岩沼市の「千年希望の丘」に足を運んだ。大高森ではハイキングを行った。頂上からの景色はとてもきれいで海がとても光って見えた。しかし、そんなにきれいな海も地震が起こると姿を変えて人々の住んでいる町へやってくる。そして生活、思い出、命を一瞬にして奪っていくものになる。自然のすごさを良い意味、良くない意味の両方で感じる事が出来た。石田沢防災センターでは、プロジェクションマッピングで津波がどのように迫り、東北を襲ったのかという映像を見ることが出来た。松島の被害が少なかったのは、海に浮かぶ島々が津波を食い止めていたからであった。「自然」でできた島々が「自然」である津波の災害から守ってくれたということを学んだ。備蓄庫を見た際には、毛布や飲料水が多く置いてあり、自分の防災意識の低さを感じた。家には水や缶詰などの備蓄はあるが、それがどのくらいあるのか、どこにあるのかといったことは親しか知らず、自分はそれについてなにも知らないというのが現状だった。また、避難所、避難経路の確認など、行っていないことが多く、これからできることがたくさんあることがわかった。できる限りのことをしっかりと行うことができれば、大きな被害を防ぐことが出来るため、これから防災意識を高め、生活していく

べきだと感じた。最後に訪れた「千年希望の丘」は周りに何もない更地だったが、震災前は家が建っていたといい寂しさを感じた。まず目に留まったのは壊れた塀だった。津波によって壊された塀を目の当たりにして、ここにも強い津波が来たということを感じることが出来た。丘に登る際に津波が来た位置に看板が置いてあり、前日の大川小学校を訪れたときには想像のつかなかった津波の高さを、少しだが想像することが出来た。頂上に着いて周りを見渡したらどこを見ても更地で、最初感じた寂しさよりも強い寂しさを感じた。頂上のベンチの中には防災用具が入っており、柱には携帯電話の充電ができるソーラー照明が設置されていた。いつ地震が起きても対策できるようになっているということを感じた。

夜のディスカッションでは、2日目に何を学んだのかということについて自分の言葉で書き表し、他者に伝えた。1日目より学んだことを文字であらわすことが出来るようになっていた。他の班で出た答えで多く共感したのは、防災センターで感じた「防災意識」についてだった。「もっと防災意識を高めなくてはいけない」「意識が低かったことに気づいた」という声が多かった。これは自分のことでもあるため、強く共感できた。このディスカッションを通して、防災センターを訪れた時よりも「防災意識」について強く考えるようになった。

最終日の3日目は山元町磯浜、中浜小学校、つばめの杜ひだまりホールを訪れた。山元町磯浜では避難訓練を行った。ここも実際に津波が来た場所で、避難が行われた場所だった。こんなに高いのにここまで津波が来たということを見ると恐怖を感じた。ここには家があり、そこの人に助けてもらったことなどを聞き、ここでも人と人とのつながりを感じることが出来た。また、海に出た際には磯浜、海ともにきれいで、このような海が命を奪ってしまうという現実をここでも学ぶことができた。次は中浜小学校を訪れた。ここは、目の前が海にも関わらず、90人の命を守り切った小学校だった。外は時計台が倒れていることや、1階の窓枠が破壊されているなど、悲惨な状態で、とても強く大きな津波が来たということが想像できた。中に入ると、あるはずの下駄箱がなく後方に飛ばされていた。机や椅子も流された状態でおいてあり、入ってすぐに強い衝撃を受けた。壁は剥がれていて、床も天井も剥がれている状態など、とても悲惨な状態だった。2階にはジオラマが置いてあり、震災前の中浜小学校の周辺を知ることが出来た。当時は周辺には家があったが、今は当時ほど家がないということを見るととても寂しかった。音楽室では当時の避難がどのように行われたのかという、当時の小学校の先生たちのインタビュー動画を見た。本来は坂元中学校に避難するという「平行避難」が本来の避難計画だった。しかし、大津波警報の「到着予想時間まで10分、予想の高さ6メートル」という想定外の情報が入り、屋上に避難する「垂直避難」に切り替えた校長先生の判断はとても勇気のいる決断だったと思う。それができたのは、前日の3月10日に避難計画を振り返ったことでできたものであった。9日に地震、津波注意報が出たことで10日に会議をして避難計画の振り返りを行ったという。中学校までは20分かかると、避難先は津波到着予想時間と比較して行うことが教職員に共有されていた。そのため、この想定外の事態に対応でき、被害が起きずに済んだ。このことを知り、事前の準備がどれだけ必要なものであるのかということについて強く感じる事が出来た。また、事前準備もそうだが、偶然に





偶然が重なったことも助かった要因の一つであった。1階、2階がそれぞれ4メートル、標高が2メートル、に加えて敷地が約2メートルかさ上げされていたことで、津波の10メートルから逃れることが出来ると判断に至った。また、翌朝運よく校庭に瓦礫が溜まらなかったことでヘリコプターが校庭に着陸することができ、救助がスムーズに行われた。事前準備に加え、偶然に偶然が重なったことで全員を守り抜いたことを学ぶことができた。屋上に生徒全員を避難させた後の校長先生の「のぼったら生き延びて降りるしかない」という強い気持ちにとっても感動した。それに加え、生徒に津波を見せないという配慮、児童をなんとしても守るという思いを大人全員で共有するといった団結力、人と人とのつながりを強く感じる事が出来た。最後につばめの杜ひだまりホールに足を運んだ。ここは防災拠点であり、地域交流センターとして親しまれている。2日目に訪れた防災センターとはまた異なり、マンホールトイレといったようなものがあつた。自家発電もあり、停電したら自動で稼働し、復旧したら自動で止まるといったもので全国では数少ないものであつた。消防車も置かれており、消防と防災拠点が連携していた。近くには割れる小窓があり、この窓を割ると鍵を開けることが出来るようになっていた。これは、開館前や閉館後に地震が起こつた際に使われるものであり、直近に使われたことがあるという。その後は備蓄庫に行つた。ストーブやサーキュレーター、救助用の毛布が多く置いてあつた。また、建物内の会議室には避難室と括弧で記載されていた。これは震災時の呼び名を表したものである。この施設の震災に対しての備えを学ぶことができ、自分にも活かせることがたくさんあると感じた。施設を見学した後に、ワークショップでクロスロードを行つた。クロスロードでは自分とは異なる意見を聞くことができ、自分の視野が広がつた。似たようなお題が出されたときに、回答が変わることもあつた。これは他の人の意見を聞き、自分の持っていなかつた考え方を知ることができ、視野が広がつたために起こることだと感じた。

以上がスタディツアーで学んだ震災に対する、災害の想像を超える恐ろしさ、災害に対する備えの重要性、人と人とのつながりの大切さである。

私はこのツアーに参加した理由として「将来に活かしたい」という想いがあつた。私は社会科の教師を目指している。その際に道徳や地理の授業で東日本大震災について教える機会がある。そのときに「震災では多くの人が亡くなつた、家が流された」というように教えるのではなく「自分が大学生のころに実際に足を運んでこんなところに行き、ここではこんなことが起こり、こういう結果になつた。それに対して自分はこう感じた」というように教えたいという気持ちがあつた。このスタディツアーでは複数の震災遺構を訪れ、それぞれ共通していること、異なることを学んだ。震災について語れる人が年々減っていく中、教師という立場として、震災について後世に伝えていきたいと強く思つた。

最後に、このスタディツアーで人と人とのつながりの大切さについて一番強く感じた。震災を学んで人と人が支えあうということは毎日感じたが、ツアー参加者とのつながりの大切さについても強く感じた。初日こそなかなか打ち解けることができなかったが、時間が経つにつれてだんだんと打ち解けることができ、男女関係なく、年齢関係なく仲良くなれたのではないかと思う。その参加者から学ぶことも多くあり、とても濃い学びのある3日間だつた。この12人だつたからこそ、ここまで学ぶことができ、仲良くでき、楽しい3日間を過ごすことができたと思う。この出会いに感謝して、これからも人と人とのつながりを大切にしていこうと思う。

今回のスタディツアーで学んだこと

人文学部 表現学科 3年 壽山 心優

僕が今回のスタディツアーに参加した目的は震災遺構や防災センターに直接足を運んでいくことで、なにか就活の面接で役に立つようなことが得られるのではないかと考えて参加しました。そしてこの前宮城県に行った際に荒浜小学校という震災遺構にも訪れて震災の悲惨さも目にしていたため、正直少し旅行の気持ちもありました。しかし、実際に被災された方の話やその日の振り返りを行うことで真剣に向き合うことができました。引率の方のアイスブレイクのおかげで、緊張で不安だったこのツアーを全力で楽しむことができました。ツアーの行程に沿いながら、記していこうと思います。

初日は小学校と堤防を見に来ました。まずは堤防ですが、こちらは想像以上の高さがありました。新しく作り直されたらしいのですがそこで初めてこの旅で海を見ました。とても綺麗で心が穏やかになりました。海鮮料理を食べ、文化的な作り物も見ました。そのあとに大川小学校を訪れました。ここでは建物内には入れず外から見ることになりました。外からでもわかるほど壊されていて、石碑などに心を打たれました。裏山があり、そこに逃げたという話も聞きましたが実際登るのはとても大変でした。当時は季節的に寒く、焦って冷静な判断ができなかったと思います。そんな中、この山に登る判断をすることができたのは素晴らしいと思いました。被災後からもわかるおしゃれな校舎でした。石碑には校歌や後世に遺された言葉たちが並んでいました。宿泊地は学校を改築したところでした。温かく歓迎していただいて、施設はとても綺麗で快適に過ごすことができました。夜は反省会と実際の津波の映像を見ました。そこには雨の中逃げる人々が映し出されていました。相当寒かったのだろうと考えたくもなかったです。映像の中には当時ボランティアに行った学生たちの言葉がありました。その中で「落ちているがれきが誰かの財産だと気づいたとき、それががれきだと思えなくなった」というセリフに惹かれました。一生覚えていたいと思います。

2日目は松島に行きました。まず展望台に行きました。そこで初めて松島を生で見て海と共に映る島々に見とれてしまいました。同時にこの島々がこの町を守ったのだなとも感じました。しかし、そんな松島でも大きな被害を受けたところもありました。ただ、他の街に比べて影響が少なかったと知り、津波は自然の怖さを感じましたがまた自然は人を守ってくれる存在であることを認識することができました。つぎに防災センターに訪れました。ここでは貯蓄倉庫に十分な蓄えがあることを学びました。いざという時に身を守るものがたくさんあるのは心強いと思います。ただ実際に何かあった時にこれで足りるのかと少し疑問に思いました。停電した時に使える自家発電電源など、様々な対策がされていることを学びました。松島の自由時間では快晴の下で海とそこで取れた海の幸を味わうことができました。2日目最後に行ったのは千年希望の丘です。ここでは今でも震災のまま残っている家があることや、同じような悲劇が起らないようにとられた対策をたくさん知りました。たとえばかさあげ道路のような通常より高い位置に道路を作ることによって堤防の代わりになります。この公園の丘では実際に津波の上がった高さを丘で体感することができました。何気ない公園のベンチにも防災グッズが隠されており、絶対来ないだろうというところにも対策しておくことの大切さを学びました。またこの公園の記念館では止まった時計などが掲載されており、広島平和祈念館に行ったときと同じ感覚になりました。この日は福島のホテルに泊まりました。福島も原発事故など震災で苦しめられたところなので、いつか訪れてみたいと思っています。

3日目は避難体験から始まりました。学校で行われる避難体験を想像していましたが、裏山に登るという、思ったより早く終わりました。ここではこの高さまで意外と早く行けるのだと思っていましたが、ここにも津波が来たと聞いて驚きました。やはり侮れないですね。自由時間で海まで歩きました。波音がとても綺麗で癒されました。しかし、こんなにも人の心を穏やかにするこの海が何人もの命を奪ったと考えたくなかったです。それでも向き合わなければいけない。そう思うと複雑な思いになり

ました。つぎに中浜小学校を訪れました。外装はとても綺麗でおしゃれな見目をしていました。門をくぐると倒れた石像がありました。これは津波の力で流されたものと知り、驚きました。校舎に入ると崩れた下駄箱があり、その先には校舎内の机やイス、外から流れ込んだ木が多目的ホールを埋め尽くしていました。2階には学校と学校周辺の街の模型があり、所々にその場所での思い出が記されていました。つぎに音楽室で映像を拝見しました。ここは階段状になっていて、防音のための分厚い壁という構造であったため、他の教室に比べて被害が少なく、ほぼ当時の状況を活かして改築された部屋でした。そのため壁には津波の名残傷なんかも残っていました。映像では防寒具を探しに行く人たちの映像が映し出されました。当時は雨だったため季節もあって相当寒かったことでしょう。つぎに屋上に向かい当時のままになっている物置を見ることができました。最後に案内をいただいた岩佐さんが創った防災施設に向かいました。ここではたくさんの貯蓄物や防災用トイレ、自家発電などの整備がしっかりとされていました。先日訪れた防災センターの上位互換のように感じました。建物も比較的新しく、屋上からはきれいな景色を見ることができました。線路の向こうには一軒家が並んでいました。この中にはこの町から離れたくないという思いを持った人がたくさんいるのだと知りました。

この3日間はとても濃いものでした。いつどこで降り注ぐかわからない身の危険を少しでも早く安全に守ることができるように防災に対する意識を高めていきたいと思いました。これから就職するとき、自分がその街を守り人々を導くことができるようにしていきたいです。まずは危険を少しでも減らせるような街づくりを目指していきたいと思いました。

令和5年2月26日～28日「スタディツアー」を終えて 災害から命を守る。共生と備え ～震災遺構と防災拠点から学ぶ～

岩佐 勝

これまで、何度か淑徳大学のスタディツアーやパネルシアターキャラバンに関わらせていただきましたが、いつも私が学生の皆様に伝えたいことは同じでした。

それは、「命を守る防災」です。ただ、これまでを振り返ると、関わり方の濃淡もあり、全員にしっかり伝えきれていなかったかもしれません。今回は、大きな災害を受けた現場での学びのなかで、「災害に備える想像力」を高めてもらえるように、いろいろと工夫をしました。

今回のスタディツアーは、事前に昨年5月、担当の先生方が学習場所等を実際に視察し、その後細部にわたり検討なさいました。私も、いくらか関わらせていただきましたが、プログラムとしての熟度の高さを感じていました。

あとは、学生の皆様の「意欲・行動力・学習力」ですが、一人ひとりのきびきびとした行動から、とてもすばらしいと感じました（大学の先輩としての欲目かもしれませんが）。

実は、今回のスタディツアーでは、被災した小学校3つと、最新の避難所2つを内容に織り込みました。被災した子どもたちの多くが、避難所に避難しますが、快適であるところがほとんどないのが現実です。東日本大震災時には、避難所にたどり着きながら、そこで亡くなった等の震災関連死が3,789人でした。今回見学した「震災遺構中浜小学校」では、屋上に90人が避難して全員が助かりましたが、そこを出るときに、避難先の毛布不足を見越して校長が毛布を持たせました。それが、避難所の生活を助けることになりました。

淑徳大学の学生の皆様なら、災害時に自分の避難する避難所をすでに決めているとは思いますが、そこに自家発電機が一つもないのでは、そこでの生活が思いやられます。

各人の防災の備えも大切です。災害に備え、我が家は2つのリュックサックを準備しています。1つは、災害時のライトや救急用品等、もう1つは災害時の食料品です。災害時を想定し、事前に準備をしておくことが命を助けると思います。

今回スタディツアーに参加した皆様には、3日間の経験を周りの人に伝え、防災の大切さを広げたいと思います。

末文になりますが、参加した学生の皆様とこの企画・運営にあたられた大学職員の皆様とともに、3日間という短い期間ながら、良き時間を共有できたことに感謝をしています。

淑徳大学 地域支援ボランティアセンタープログラム

認知症サポーター養成講座

この講座は学生のみならず教職員が地域社会の一員として、認知症と認知症の方への接し方を理解し、積極的に行動できることをめざして淑徳大学地域支援ボランティアセンター東京が主催しています。2022年度も前年同様新型コロナウイルス感染症の流行が収まらず、一般募集はオンライン（Zoom）参加に限定されたため応募はありませんでした。しかし、人文学部の学生と短期大学部の学生は感染対策を行った上で対面で受講することができました。今後とも、コロナ禍下でも地域住民とも連携できる取り組みについて検討し、積極的に企画・発信していきたいと思います。

◆東京キャンパス 令和4年12月2日（金）

学生、教職員を含め34名が出席しました。（内訳 人文学部9名、短期大学部23名、職員2名）

（講師）

非営利型一般社団法人日本福祉環境整備機構

鹿糠沢 裕太 氏

今年度も鹿糠沢様に講師を依頼したところ快諾いただき、例年以上に分かりやすくアクティブな講義内容で学生たちの認知症に対する理解が深まりました。学生たちは真剣に講義を聞き入り、メモを取り、グループワークも活発に行われ意見の発表等も積極的に行われました。

講座後アンケートと引き換えにオレンジリングに代わり「認知症サポーターカード」を手渡されました。

また、今回の講座に授業等で参加できなかった学生のためにビデオ撮影を行い、短期大学部のYouTubeチャンネルに限定公開としてアップ。教職課程運営委員会とボランティアセンター運営委員会のメンバーにURLの共有を行いました。



認知症サポーター養成講座 アンケート

(N = 29)

設問 1	本日の講座の内容はいかがでしたか？	人数	割合 (%)
	たいへんよかった	25	86.21
	よかった	4	13.79
	あまりよくなかった	0	0
	よくなかった	0	0
設問 2-1	受講された方の年代		
	10 代	20	68.97
	20 代	6	20.69
	30 代	1	3.448
	40 代	1	3.448
	50 代	1	3.448
設問 2-2	受講された方の性別		
	男	4	13.79
	女	24	82.76
	未回答	1	3.448
設問 3	今後、認知症サポーターとして、できると思う活動に○をつけてください。		
	講座で学んだことを、家族や友人に話すことができる	28	96.55
	認知症サポーターカードを携帯し、友人などに養成講座の受講を勧めることができる	21	72.41
	近所の高齢者に日頃からあいさつをするなど、声をかけることができる	26	89.66
	近所で認知症かもしれない方をみかけたら、声をかけることができる	26	89.66
	介護する家族の方の大変さなどを聞くことができる	26	89.66
	ひとり暮らしの高齢者を最近見ないなど気になったとき、民生委員やおとしより相談センターに相談できる	20	68.97
	物忘れなどの相談を受けた時、相談先(おとしより相談センターやもの忘れ相談医)を案内することができる	23	79.31

認知症のより良い対応方法を考え、頑張ります。
全体的な認知症に関する情報を得ました
認知症がどのようなものか、認知症の方への接し方など、少しですが、知識をつけることができ、良い時間でした。
認知症の方の特徴や声のかけ方、病気の種類について分かったので良かったです。
認知症の方と関わったことがない私にとっては、とても勉強になりました。ありがとうございました。
三大認知症として、アルツハイマー型、レビー小体型、脳血管性がありましたが、前頭側頭型認知症の方はあまりいないのでしょうか？
パワーポイントがすごく見やすく、内容が頭に入ってきやすかったし、演習もあって楽しく受講できました。普段の授業だと認知症について深くは学ぶことができなかったもので、実際に現場で働いている方から体験などの話も聞くことができ、とても勉強になりました。
授業で少しだけ習っていた認知症の知識をより深められ良かったです。また、演習があり体験的に学ぶ事で楽しく学びが深められる事ができました。
認知症についてより理解を深めることができたので、これからの学びに繋げて行けたらいいと思います。
認知症についての理解をより深めることができ、楽しい講座でした
前期に高齢者福祉の分野で認知症について学んだのですが、改めて確認することができました。こんなことがあったらどうすればいいのか、実際にその場面になることがあるかもしれないので適切な対応を身につけられ良かったと思います。
とてもわかりやすく、演習にも意味があって良かったです。
認知症の方のことをよく知ることができました。
このような機会がないので本当にタメになりました。
理解が深まりました
祖母が認知症だったことがあり、その時私はあまり対応ができずイラッとする事があり、後悔していたので今回、話を聞けてどのように関わればいいのかを聞けて良かったです。
認知症について課題を用いながら講義をして下さり分かりやすかったです！ありがとうございます。接する際は今回学んだことをもとに接していきます！貴重な機会をありがとうございました。
認知症に対して支援が必要なことがよく分かりました。認知症かどうかを見極めるためのコツを知りたいです。
認知症には種類があることを初めて知ることが出来ました。私の祖母が認知症を発症しており、まだまだ知識として浅い部分があったことを実感したので、家族にもこのことを伝えていきたいと思いました。また、心構えにもあった、驚かせない、急がせない、自尊心を傷つけないという部分をきちんと覚え、これからの生活に活かして行ければと思います。
アンケート用紙にも書いたのですが、私の祖母は最近物忘れが酷く、家族がとても困っていました。時にはなんでわからないのと家族に責め立てられている祖母を目の当たりにし、心が痛くなります。今回の講座を振り返って、本人が一番つらく苦しいということを自分が家族に伝え、少しでも祖母が楽にできるような、そして、もしものために病院で検査を受けてみるなどの処置をとりたいなと感じました。
今回の講座を聞き、認知症に対する知識が深まりました。認知症は誰でもなり得てしまうという病気ということを知り、いつかは自分や家族などの身内もなってしまう可能性があるもので、今のうちに知識をつける重要な機会をいただきました。もし、家族や身内、また、認知症などで困っている方がいたら、本日の講座を基に手助けを積極的にやりたいと感じました。また、今回の講座を聞き、認知症の方に対しての接し方や対応を変えていきたいと考えました。
認知症についての理解が深まり、お年寄りにもっと歩み寄り優しく接していきたいと感じました。
認知症の人と接する時の心構えの「3つのない」を意識して接していこうと思いました。
認知症について、とても分かりやすい説明が聞けて理解が深まりました。
医療業界に進む学生と一緒に受講しました。相手に寄り添い、傾聴し、相手に合わせて対応することは、医療現場で最も求められます。認知症に限らず、高齢者が訪れるため、様々なケースがあり、またその相手の態度が何からのものなのか、少し立ち止まって考えることで、臨機応変な対応ができると思います。実際に現場で働いている先生からの生の声は学生にしっかり響いていて、講座を受けて良かったと思いました。貴重なお話をありがとうございました。

2. 各キャンパスにおける活動内容

令和4年度 ボランティア活動実績（千葉キャンパス取りまとめ分のみ）※予定を含む

日時	種別	単発 継続	件名	依頼元・協力先	内容	人数	備考
4月～	学・障	継	小学生への手話指導ボランティア(リモート)	個人依頼(手話サークルへ)	リモート	5	2020. 11より
4月～	学	継	千葉市学習支援ボランティア	千葉市内小中学校	教員サポート	56	
4月～	保・学	継	放課後児童クラブの学習・生活支援	わくわくの樹(富津市)	スタッフ支援	1	
4月～	高・地	継	白旗地区高齢者配食サービス	千葉市社会福祉協議会他	高齢者支援	92	月2回実施 ※人数は延べ数
4月～	障・学	継	障がい者参加キャンブプログラム	NPO法人朝日キャンブ	スタッフ支援	1	
7月～	学	継	茂原市立豊田小学校	茂原市	教員サポート	1	
4月16日	他	単	フードバンクでの仕分け積み込み等	フードバンクちば	イベント支援	6	
4月～	他	継	食の支援配布スタッフ	フードバンクちば	イベント支援	7	
5月8日	他	単	フードドライブ	フードバンクちば	イベント支援	3	
5月14日	他	単	ウクライナ支援映画上映会	株式会社レインカラース (CPF関連)	イベント支援	11	
5月15日	保・学	継	児童養護施設の生活支援	社会福祉法人 ミッドナイトミッションのぞみ会	イベント支援	1	
5月20日	地	単	自転車安全利用キャンペーン	千葉市市民自治推進部 地域安全課	教員サポート	6	
6月1日	障・地	継	パラスポ2022 学生実行委員	千葉県環境生活部 生涯スポーツ振興課	イベント支援	1	
6月～	学・障	継	フレッシュサポーター	千葉県教育振興部特別支援教育課	教員サポート	3	
6月～	学	継	八千代市学習支援	八千代市役所 健康福祉課	スタッフ支援	2	
6月11日	障・地	単	障がい者施設での販売会	社会福祉法人 オリーブの樹	イベント支援	1	
6月17日	他	単	フードバンクでの仕分け積み込み等	フードバンクちば	イベント支援	5	
7月2日	地	単	白旗七夕まつり	白旗町内会	イベント支援	17	
7月3日	学	単	留学生校外学習	国際交流センター	スタッフ支援	20	
7月6日	地	単	Yohas (大賀ハスまつり夜の部)	Yohas運営事務局	イベント支援	8	
7/9～11	学	継	山村留学ボランティア	千葉市立長作小学校	教員サポート	7	
7月16日	地	単	ゆうきの夏まつり	ゆうきの夏まつり実行委員会	イベント支援	16	
8月～	保・学	継	大蔵寺小学校夏季子どもルーム	千葉市	スタッフ支援	1	
8月4日	地	単	ピーチクリーンボランティア(事前清掃)	千葉市民花火大会実行委員会	イベント支援	12	
8月6日	地	単	ピーチクリーンボランティア(当日ゴミ分別案内)	千葉市民花火大会実行委員会	イベント支援	9	
8月28日	地	単	佐倉市福祉フェスタ	佐倉市	イベント支援	1	
10月1日	地	単	千葉駅赤い羽根募金呼びかけ	千葉市社会福祉協議会	スタッフ支援	8	
10月8日	保	単	千葉市美術館保育ボランティア	千葉市美術館	スタッフ支援	2	
10月10日	障・地	単	メンタルヘルスデーイベント	シルバリーボンジャパン	イベント支援	12	
10月12日	他	単	献血呼びかけ	日本赤十字社	スタッフ支援	3	
10月16日	地	単	ジェフ かざぐるま	Let`s enjoy そが	イベント支援	1	
10月21日	他	単	フードバンクでの仕分け積み込み等	フードバンクちば	スタッフ支援	4	
10月29日	保	単	保育園芋掘りイベント	千葉市ひなたぼっこ保育園	スタッフ支援	3	
10/31～11/2	学	単	小学校移動教室引率	千葉市少年自然の家	スタッフサポート	1	
11月3日	地	単	オーガニックシティフェスティバル	木更津市市民活動支援課	イベント支援	2	
11月6日	障	単	スポーツレクリエーションポッチャ	千葉市市民局生活文化スポーツ部スポーツ振興課	イベント支援	3	
11月6日	地	単	アクアラインマラソン	ちばアクアラインマラソン実行委員会事務局	イベント支援	17	
11月～	学	継	日本語学習プログラム	国際交流センター	スタッフ支援	2	
12月1日	障・学	単	特別支援学校駅伝大会(中学部)	千葉県特別支援学校体育連盟	スタッフ支援	19	
12月18日	地	単	Green Adventure 竹あかりイベント	NPO法人おりがみ	イベント支援	3	
12月20日	地	単	防犯講座	千葉県警	スタッフ支援	10	
12月25日	他	単	「子ども達をよろしく」 上映会	NPO法人ハイティーンズサポートちば	イベント支援	7	
1月8日	他	単	ウクライナ支援チャリティーイベント	槐会	イベント支援	5	

1月9日	地	単	20歳と語る未来の千葉市	千葉市こども未来局こども未来部こども企画課	イベント支援	1
1月～	学	継	里親家庭学習支援	ちばこどもおうえんだん	スタッフ支援	2
1月13日	障	単	手話講座	蘇我コミュニティセンター	リモート	4
1月19日	障	継	障がい者施設での生活支援	社会福祉法人 松里福祉会	スタッフ支援	1
2月9日	学	単	小学校のウインタースクール補助	江戸川区立北小岩小学校	教員サポート	1
2月17日	他	単	フードバンクでの仕分け積み込み等	フードバンクちば	スタッフ支援	1
2月19日	地	単	千葉中央いきいきフェスティバル	千葉中央コミュニティセンター	イベント支援	7
合計						412

災害支援活動ボランティアは「災害関連ボランティア活動実績」を参照。
直接学生が先方と連絡をとって実施したボランティアは一部含まれず。
支援の種別についてはそれぞれ、保:保育、学:学習、障:障がい、高:高齢者、地:地域

令和4年度 災害関連ボランティア活動実績（千葉キャンパス）※予定含む

淑徳大学地域支援ボランティアセンター							
日時	種別	単発・継続	件名	企画元	内容	参加者 (延べ数)	備考
通年	被災地支援 (石巻市雄勝)	継	【大学千葉企画】 雄勝カレンダープロジェクト	地域支援 ボランティアセンター (千葉キャンパス)	復興支援カレンダー作成	9	平成23年度から継続中
8/13～15	被災地支援 (石巻市雄勝)	継	【大学千葉企画】 雄勝町花火大会	地域支援 ボランティアセンター (千葉キャンパス)	花火大会での灯籠流しの準備	9	平成23年度から継続中 3名×3日
8/30～9/1	被災地支援 (岩手県一関市・ 陸前高田市・ 大船渡市・ 宮城県気仙沼市)	継	【大学全体企画】 パネルシアターキャラバン	地域支援 ボランティアセンター	子どもたちをはじめ被災地の方々と 交流を深めることを目的としたパネ ルシアターの上演	3	平成23年度から継続中 1名×3日
2/26～28	被災地支援 (古川市・石巻市・ 岩沼市・山元町)	継	【大学全体企画】 スタディツアー	地域支援 ボランティアセンター	被災地でのボランティア体験を通 し、「できることを、いま、ここから」を 学び考える	15	平成25年度から継続中 5名×3日
千葉企画参加者						18	
大学全体企画参加者						18	
総合計						36	

* 人数は千葉キャンパスからの参加人数
一般ボランティアは「ボランティア活動実績(千葉キャンパス取りまとめ分のみ)」参照
雄勝地区への「学習支援ボランティア」は今年度中止

令和4年度活動実績(千葉第二キャンパス)

日時	単発継続	件名	依頼元	内容	参加人数	備考
4～6月	単発	健康診断ボランティア	千葉市立おゆみ野南中学校	運営支援	6	今年度初
5月21日(土)	単発継続	松が丘中学地区子ども食堂	松が丘中学地区育成委員会	松が丘中学地区育成行事	4	
5月28日(土)	単発継続	松が丘中学地区子ども食堂	松が丘中学地区育成委員会	松が丘中学地区育成行事	4	
5月29日(日)	単発継続	美浜いきいきプラザ 「健康フェスティバル」	千葉市美浜いきいきプラザ	運営支援	3	
6月4日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	
6月4日(土)	単発継続	松が丘地区 子供110番	松が丘中学地区育成委員	松が丘中学地区育成行事	5	
6月19日(日)	単発継続	美浜いきいきプラザ 「健康フェスティバル」	千葉市美浜いきいきプラザ	運営支援	3	
7月2日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	2	
7月3日(日)	単発継続	松が丘地区 子ども夏祭り	松が丘中学地区育成委員会	松が丘中学地区育成行事	14	
7月9日(日)	単発継続	稲毛いきいきプラザ 「健康フェスティバル」	千葉市稲毛いきいきプラザ	運営支援	5	
9月3日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	
9月18日(日)	単発	松が丘地区緑化推進プロジェクト	松が丘地区 千葉市緑化推進プロジェクト (千葉市中央区地域活性化事業)	緑化推進	3	
10月1日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	
10月22日(土)	継続	松が丘中学地区子ども食堂	松が丘中学地区育成委員会	運営支援	3	
11月5日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	
11月17日(木)	単発	献血ボランティア	千葉県赤十字血液センター	運営支援	12	今年度初
12月3日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	
12月17日(土)	継続	松が丘中学地区子ども食堂	松が丘中学地区育成委員会	運営支援支援	0	
12月19日(月)	単発	千葉県立南高校高大連携事業内 キャンパスツアー	千葉県立南高校	運営支援支援	3	
2月4日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	
3月4日(土)	継続	淑徳オレンジカフェ(ひだまり)	ひだまり	運営支援	0	

※図書館開放ウィーク(8/9～8/23)について、ボランティア学生は未募集のため、表から削除しております。

令和4年度 ボランティア活動実績（埼玉キャンパス）

日時	種別	単発・継続	件名	依頼元	内容	人数	備考
6/11,18 7/16,29 8/10,27 9/10	教育	単年	子ども大学☆ふじみ	富士見市教育委員会	子ども大学の運営サポート、活動支援	56	
6/11,18 7/3,9, 8/20 9/17 11/26	教育	単年	子どもスポーツ大学☆ふじみ	富士見市教育委員会	子どもスポーツ大学の運営サポート、活動支援	42	
6/11 7/2,24	教育	単年	子ども文化芸術大学☆ふじみ	富士見市教育委員会	文化芸術大学の運営サポート、活動支援	18	
8月21日	教育	単年	みよし子ども探検隊	三芳町教育委員会	子ども探検隊の企画運営、サポート	17	
3月21日（見込み）	教育	単年	FUJIMI☆クラフトピアフェスタ	富士見市	ピアフェスタの企画運営	13	
6月	教育	単年	子育て支援プログラム	保育所27箇所、三芳町立竹間沢児童館	保育所等からの指示に基づく活動	57	
6/20, 7/4, 9/11, 10/11, 10/31, 12/20, 1/30, 2/27, 3/13	教育	単年	子育て支援ルームびよびよあそびの会	教員保育士養成支援センター	ベビーマッサージ教室、パネルシアター、手遊び、ハンドベル演奏など	38	
6月25日	教育	単年	第6回エコラフフェスタ	ふじみ野市・三芳町環境センター	バルーンアートワークショップ	3	
6/28, 12/13	教育	単年	子育て支援プログラム	三芳町立藤久保児童館	手遊び、ペープサート、パネルシアター、ハンドベル演奏など	10	
7/5, 3/14	教育	単年	わくわく遊び隊	子育て支援センターびっぴ	手遊び、ペープサート、パネルシアター、トーンチャイム演奏など	13	
7/5, 12/13	教育	単年	子育て支援プログラム	三芳町立竹間沢児童館	手遊び、ペープサート、パネルシアター、トーンチャイム演奏など	7	
7/9, 8/9, 9/3, 9/10, 11/26	教育	単年	子ども大学みよし	子ども大学みよし実行委員会	各回の企画・運営サポート	10	
7/11, 7/22, 9/5, 9/26, 11/21, 12/5, 12/19, 2/20, 3/6	教育	単年	子育て支援ルームびよびよ ベビーマッサージ教室	教員保育士養成支援センター	ベビーマッサージ教室、パネルシアター、手遊び、ハンドベル演奏など	25	
7月～翌年10月	教育	継続	彩の国かがやき教師塾ベーシックコース	小学校	学級担任の補助、学校行事の補助等	26	
8/1～8/4	教育	単年	富士見市夏休み宿題教室	富士見市青少年市民会議	夏休みの宿題や1学期の復習等の学習支援	40	
8/3～8/5	教育	単年	三芳町サマーチャレンジボランティア	三芳町教育委員会	夏休みの宿題や1学期の復習等の学習支援	13	
8月4日	教育	単年	Enjoy!English!サマーワークショップ	三芳町立中央公民館	英語でパネルシアターなど	7	
11月～ 月3回	教育	単年	三芳町適応指導教室	三芳町学校教育課	学習支援	1	
11月15日	教育	単年	子育て支援プログラム	三芳町立北永井児童館	手遊び、体操、パネルシアター、へびダンスなど	5	
11月19日	教育	単年	わくわく遊び隊	藤久保児童館	バルーンアートワークショップ	3	
11月30日	教育	単年	わくわく遊び隊	かすが保育園	ダンス、集団ゲーム、サーキット遊び、制作コーナー、バルーンアート	28	
12月～ 週1回	教育	単年	さいたま市アシスタントティーチャー	さいたま市教育委員会	学習支援	1	
12月8日	教育	単年	わくわく遊び隊	子育て支援センターけやきっ子	手遊び、ペープサート、パネルシアターなど	3	
12月10日	教育	単年	淑徳コミュニティーカレッジ「親子で遊ぼう！わくわくクリスマス」	淑徳大学	パネルシアター、ペープサート、巻物シアター、バルーンアート、ハンドベル演奏など	11	
単発、週1日等	教育	単年	保育所等でのボランティア	保育所等	保育者の補助	7	
週1日等	教育	単年	淑徳教師養成塾	小学校	学級担任の補助、学習支援、学校行事の補助等	28	
10月3日～12月31日	経営	単年	ボランティア研修	児童福祉ボランティアグループ まいまい	誕生日カード・卒業カードの作成	3	自宅での作業
10月9日～12月27日	経営	単年	ボランティア研修	市民福祉活動センターばれっと	ベルマーク集計作業・からだ測定会・ばれっとあきまつりのサポート・子ども食堂の開催、弁当の販売およびイベントのサポート	4	期間内で4人がそれぞれ活動を実施。合計人数を記載。
11月19日～12月30日	経営	単年	ボランティア研修	NPO法人子どもサポートげんき	学習支援	1	
9月29日～12月15日	経営	単年	ボランティア研修	一般社団法人彩の国子ども・若者支援ネットワーク	学習支援	1	
10月21日～23日	経営	単年	ボランティア研修	有限会社 en	イベント「アースガーデン」の運営サポート	1	
10月22日～11月26日	経営	単年	ボランティア研修	FARM BBQ morimori	接客サポート・ファームボランティア	1	
10月7日～10月30日	経営	単年	ボランティア研修	M Media Apps	悩み相談サービス「きいて」における相談支援	1	オンラインでの活動。
11月7日～11月14日	経営	単年	ボランティア研修	メイブルノブ 大宮制作室	ブライダル用品の制作補助等	1	
10月19日～11月16日	経営	単年	ボランティア研修	ツナグコミュニティ合同会社	要介護者の外出中移動介助など	1	
7月12日、9月16日、 1月20日	経営	単年	ボランティア研修	富士見市社会福祉協議会	ボランティア活動の意義や留意点などの講義および成果報告会への参加。	15	ボランティア研修の講義に富士見市社会福祉協議会の方々に参加いただきました。合計人数を記載。
単発、週1日等	経営	単年	ボランティア研修（前期）	履修学生各自の発案、または応募による	清掃活動、イベント（夏祭り、マラソン大会等）、援農、児童センター、フードバンク、母校の部活動、日本語教室等でのボランティア	84	前期に行われたものをまとめて表記
合計						595	

令和4年度 ボランティア活動実績（東京キャンパス）

日時	学科	件名	依頼元	内容	人数	備考
5月29日	社	知的障がい者生涯学習支援事業 「おしゃべりしよう」	センター事業	知的障がいのある方が学生との交流を通じて、自己表現の機会とする	15	
10月1日	こ	子どもの居場所活動について ～NPO法人みんなの広場ひびき様の実践活動に学ぶ～	センター事業	・板橋社協が行っている「子どもの居場所活動」の概要を知ると同時に、そうしたものが必要になる背景を知る。 ・板橋区内で学習支援から子ども食堂、多世代交流を行っている方の話から、活動を始めた理由や問題意識、運営上心がけていることや、ボランティアや社会資源を含めた地域とのつながりについて知る。	10	
10月15日	こ	親子で遊ぼう！ ～牛乳パックを使ったおもちゃを作って親子で遊ぼう～	センター事業	学生と協力し、牛乳パックを使った簡単なおもちゃを製作。	28	
10月25日	こ・介	障害者ホームヘルプサービスの実践現場における「共生」とは	センター事業	自立生活センター自立の魂 代表磯部 浩司様による講話、他	25	
11月5日	こ	歌って・踊って・動いて & エブロンシアター	センター事業	歌、ダンス、エブロンシアターで地域の乳幼児及び保護者と交流	32	
11月12日	介	しゅわしゅわ手話	センター事業	知的障がいのある方と学生が手話歌の練習に取り組み、淑徳祭のステージで発表を行った。	20	10/15、10/29、11/5に練習を行った
11月26日	こ	体育館でアスレチックあそびをしよう！	センター事業	アリーナに様々な遊具を配置し、学生がサポートしながら、親子が楽しく遊んだ。	70	
11月27日	表現	第9回いたばし結まつり	いたばし総合ボランティアセンター	オンライン配信の会場スタッフ	2	
12月1日～	こ	ユニバーサルキッズすまいるコンサート	板橋区社会福祉協議会他	今年度のボランティアセンター行事を動画にまとめ、板橋社協のYouTubeチャンネルで公開	6	オンライン
合計					208	

3. 淑徳大学地域共生センター 開設準備における報告

淑徳大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化

中間まとめ

2021年6月4日

淑徳大学地域支援ボランティアセンター



はじめに

令和3年度の新体制では、引き続き求められる高等教育の在り方を踏まえた改革が進められると共に、建学の精神を根底に据えた「淑徳ならではの」教育、研究、社会貢献、大学運営等を「チーム淑徳」で推進されることとされた。

強化する政策の4点目では、地域支援ボランティアセンターの発展と強化（ブランディング構想）が示された。山口学長の「大学運営の基本方針」（2021年4月1日）では、その内容について「統一的な大学改革が進む一方で独自性を強調し、選ばれる大学として特殊性の構築を目指す。建学の精神を前面に打ち出した教育の具現化を計画的に進め、淑徳地域共生センター（仮称）の創設を検討する」と示され、大学地域支援ボランティアセンターの創設の経緯、各キャンパス、短期大学部も含めた仕組みづくりについて言及があった。

これを受けて、センターにかかわる教職員一体となって検討し、4月、5月の2か月間に8回（延17時間）の会議を開催し、本案を取りまとめた。

中間まとめ 目次

はじめに (P.1)

中間まとめ 目次 (P.2)

1. 淑徳大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化

- ・ 淑徳大学地域支援ボランティアセンター発足の経緯 (P.3)
- ・ 淑徳大学の地域支援とボランティアの概念について (P.4)
- ・ 淑徳大学地域支援ボランティアセンター活動と教育との関係の課題整理 (P.5)
- ・ 淑徳大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化イメージ(現状・今後・理想) (P.6)

2. 淑徳大学地域共生センター(仮称)の創設に向けて

- ・ 淑徳大学地域共生センター(仮称)の創設に向けて、目的と目標 (P.7)
- ・ 本センターの機能と地域共生ネットワーク (P.8)
- ・ 淑徳大学のふくし文化醸成のサイクル(イメージ) (P.9)
- ・ 各キャンパスとセンターの守備範囲とターゲットの想定 (P.10)
- ・ ともいき学習プログラム(イメージ)「地域とともに」愛称:ちっと (P.11)
- ・ 視察報告 視察先:大里綜合管理株式会社 2021年5月27日訪問 (P.12)
- ・ 検討会議(センター会議)実施日程(4月・5月) (P.13)

2

淑徳大学地域支援ボランティアセンター発足の経緯

- ・ 淑徳大学地域支援ボランティアセンターは本学の建学の精神「共生と実学教育」を行動化し、地域で社会活動を行う学生を大学として支援することを目的に、2005年に設立され、2011年東日本大震災に対する支援活動を契機に各キャンパスを横断する役割が本センターに期待されるようになり、2014年全学的な運営体制の基盤が構築された。(淑徳大学 五十年史 2015年9月発行より)
- ・ 1993年「淑徳短期大学ボランティア情報室」が開設し、2004年「淑徳短期大学ボランティアセンター」に改称。2014年4月人文学部設置に伴い、2015年淑徳短期大学から「淑徳大学東京キャンパスボランティアセンター」となり、本学が展開する全学的な取り組みにも参加するようになった。その後、2020年1月「淑徳大学・淑徳短期大学部 地域支援ボランティアセンター東京」に改称。



2010年ゆめ半島千葉大会のボランティア活動



日本赤十字義援金の募金活動



東日本大震災支援ボランティアセンター長 定立 副学長(当時)視察



東日本大震災復興支援プログラム「パネルシアターキャラバン」



淑徳大学東日本大震災支援活動経過報告書



認知症サポーター養成講座キャラバンシンボルマーク

3

淑徳大学の地域支援とボランティアの概念について

一般的概念

● ボランティア活動

自発的に（**自発性・主体性の原則**）、他者や社会のために（**社会性・連帯性の原則**）、自らの時間や金銭を提供するなどの活動（**無給性・無償性の原則**）また、誰もが暮らしやすい豊かな社会を目指して、様々なネットワークをつくりながら、社会の課題の解決に取り組む活動。（**創造性・先駆性・開拓性の原則**）

大乗仏教の精神に基づく

● 人間開発

直接支援活動



淑徳大学のボランティア活動

- 建学の精神と教育理念のもと、以下の通り展開される直接支援活動
- ・個人・家族を支える活動や環境問題等に取り組む活動。
- ・出会いや学び、発見、感動そして喜びといった経験を通して学びを得る活動。
- ・実学教育の伝統のもとに展開される災害支援・復興支援活動。

淑 徳 人

人間と社会に働きかける存在

教育研究活動の一層の向上の場
地域が「もう一つのキャンパス」

建学の精神

「利他共生」
「自利利他」
「感恩奉仕」

教育の理念

実学教育
「実証精神」
「実践志向」
「自己表現」

「for him(彼のために)ではなく、Together with him(彼と共に)でなければならない」

社会福祉の増進・教育

間接支援活動



● 社会開発

淑徳大学の地域支援活動

- 建学の精神と教育理念のもと、以下の通り展開される間接支援活動
- ・地域の中に入り、地域・社会の人々に寄り添いながら、課題解決に取り組む活動。
- ・個人・地域・社会をつなぐ様々な協働のネットワークを地域活動を通して学ぶ活動。
- ・各キャンパスに隣接する地域住民とコミュニティを形成する活動。

4

淑徳大学地域支援ボランティアセンター活動と教育との関係の課題整理

添付：別紙①（A3）

淑徳大学の目的等

（学則第1条、2条）

（目的）

第1条 淑徳大学は、大乗仏教の精神に基づき、社会福祉の増進と教育とによる人間開発、社会開発に貢献する人材の育成を目的とする

（教育の基本方針）

第2条 本学における教育の基本方針は、次のとおりとする。

（1）人間福祉の増進と協働的な人間社会の実現に貢献する人材を育成する

淑徳大学ビジョン
共生社会の創出をめざして

①教育の方向
共生実践人材を育成

②社会との関係
地域社会に根ざし、地域への貢献

大学の役割 使命

（教育基本法第7条）

教育

ディプロマ・ポリシー

教育課程（カリキュラム）

正課教育

体験学習

（正課外教育）

カリキュラム・ポリシー

アドミッション・ポリシー

「知識」「技能」「態度」

「体験」

研究

多岐にわたる専門分野の研究
（2研究科6学部11学科、短期大学部2学科）

（学士課程答申
2008.12月より）

学士課程教育を通じて達成すべき学習成果は課外活動を含め、あらゆる教育活動の中で修得年限全体を通じて培うものである。

再構築

- ①地域支援、ボランティアに参加しやすい学内環境の整備等
- ②同窓会、学内外の関係機関との連携強化
- ③ふくし文化の醸成への取り組み

社会に還元

地域が「もう一つのキャンパス」

社会貢献

社会連携・社会貢献に関する方針

1. 教育研究活動の成果を広く社会に還元
2. 学生並びに教職員の教育研究活動の一層の向上

実学教育を支える学部附属組織

- サービスマーケティングセンター
- 実践学習支援センター
- 他

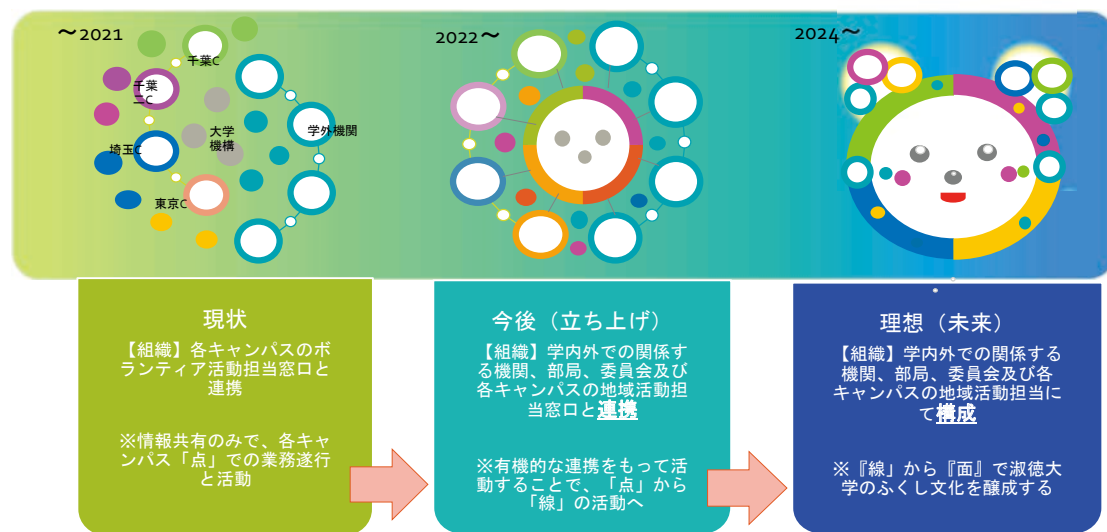
大学附属機関（一部）

- 地域支援ボランティアセンター
- 地域連携センター
- 国際交流センター

福祉マインドの醸成に正課外活動の役割は大きい（2016年度調査）

5

淑徳大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化イメージ



6

淑徳大学地域共生センター（仮称）の創設に向けて

目的

1. センターは淑徳大学の社会連携・社会貢献活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を社会貢献に資すること及び地域との産学官連携事業等を通じて、地域社会の活性化及び発展に寄与することを目的とする。

2. センターは本学学生、教職員等（聴講生、科目等履修生、また過去に在学、在籍していた者を含む）が生涯にわたり地域社会に貢献するという生き方、共生の精神、ふくし文化の醸成に寄与することを目的とする。

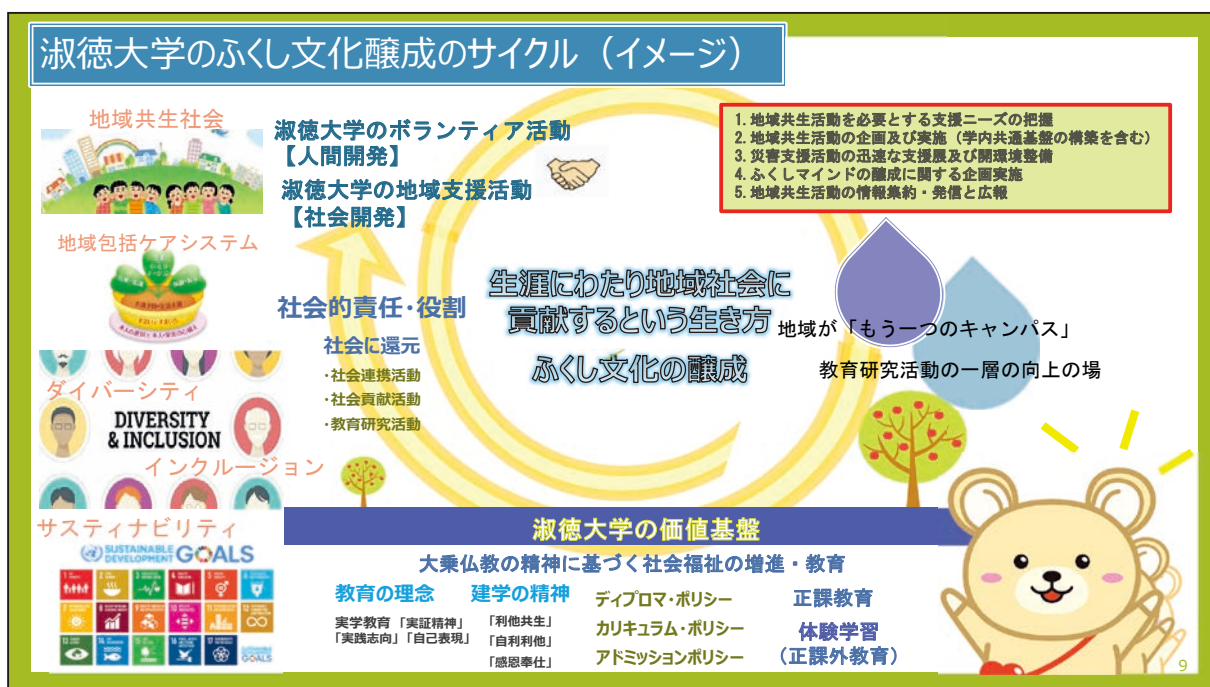
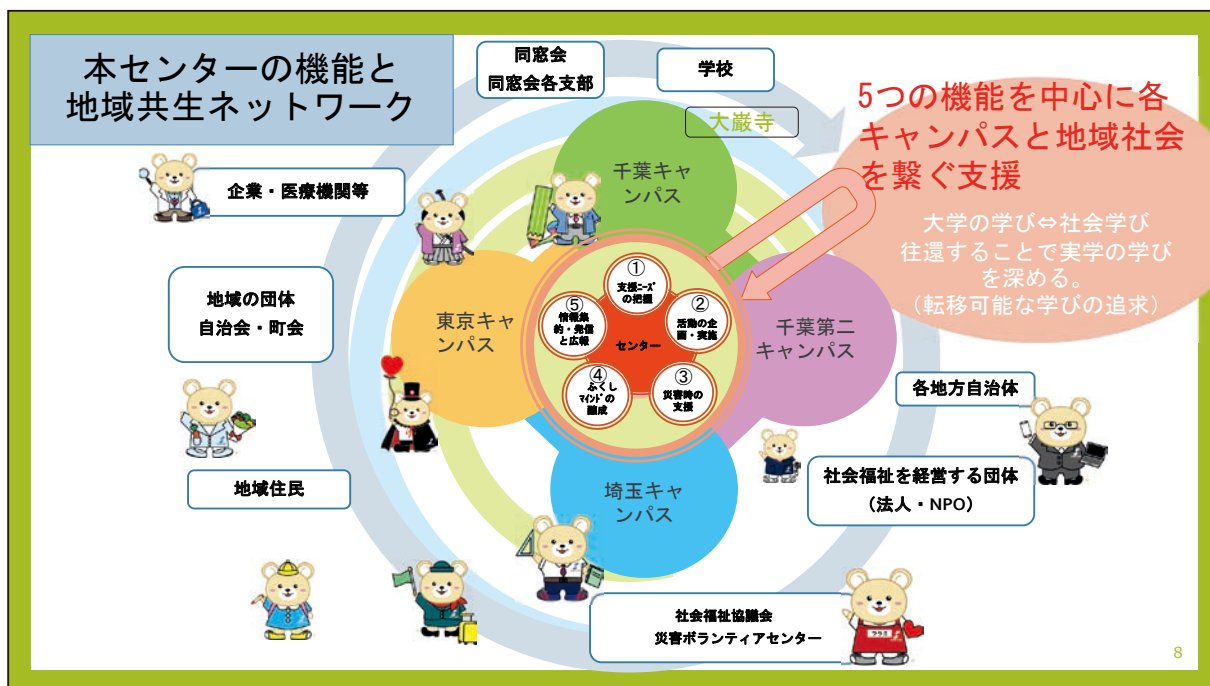
※ここでは、本目的を達成するために行う活動を「地域共生活動」という。

目標

1. 地域共生活動を必要とする支援ニーズの把握に関する事項
2. 地域共生活動の企画及び実施（学内共通基盤の構築を含む）に関する事項
3. 災害支援活動の迅速な支援展及び開環境整備に関する事項
4. ふくしマインドの醸成に関する企画実施に関する事項
5. 地域共生活動の情報集約・発信と広報に関する事項

添付：別紙②（A3）

7



各キャンパスとセンターの守備範囲とターゲットの想定

	学生	教職員	卒業生	地域住民	地方自治体 その他外部団体 (社協・NPO法人他)	遠方地域・ 被災地	受験生・ その他
各キャンパス	各キャンパスの実態を把握し、今後検討						
大学地域支援ボランティアセンター	①導入セミナー ②復興支援プログラム (3プログラム) ・新規プロジェクトと ・コーディネーター ・各キャンパスで取 り組む活動の情報収 集と調整	・ボランティア休 暇等教職員のボラ ンティアのしやすい 環境の整備	⑥卒業生プロジェ クト	④認知症サポーター 養成プログラム ⑤人間開発プログラ ム (キャンパスサロ ン)	⑦社会開発プログラ ム (地域活性化)	③災害支援プログラ ム 全学的な災害支援 復興支援の企画・ 実施	・地域共生人材特別 入試の検討 ・奨学金制度導入？ ・全学的なボラン ティア活動の情報発 信・広報

※今後、各キャンパス、各学部、短期大学部との役割分担、協働、淑徳大学地域共生センターにおける専任教授、客員教授の配置、コーディネーターの配置等、実行体制の検討は急務。
※また、淑徳人（共生実践人材）を育成する“学士課程教育”全体の体系化の中で教学組織との関係性、連動性の検討が必要。

10

ともいき学習プログラム（イメージ）「地域とともに」愛称：ちっと



11

視察報告

視察日：2021年5月27日（木）14：00～16：00

視察場所：大里綜合管理株式会社（千葉県大網白里市）

視察対応者：野老 真理子 氏（ところ まりこ）（1985年淑徳大学社会福祉学部卒業）

視察内容：約8500件の土地管理などを手掛ける大里綜合管理の野老真理子会長は自社の特徴を「本業6割、地域活動4割の会社」と話す。本業では土地管理を収益の柱とする一方、300以上という地域でのボランティア活動を通じて、他に類を見ない地域住民との深い信頼関係を構築している。日頃の掃除を含め、社員の「気づく訓練」の積み重ねの成果だという。

地域貢献活動内容：まちのクリーン活動、コミュニティダイニング、地球塾、大網白里学、大里学童保育、大里ファミリー会、友の会他300以上

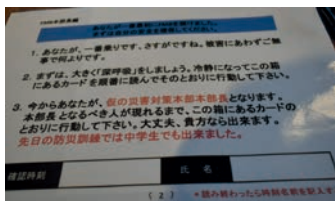
今後の本学との活動提案事項：**覚悟は必要。10年、20年かかる。今の大学はこうした活動ができる柔軟さ、組織形態、環境なのかどうかを示唆された。** できることから取り組むものとして、災害時のファーストミッションボックス共同開発、インターン、ボランティア活動研修等共同で実施することと可能とのこと。



オープンでゆったりとしたオフィス



野老 真理子会長
（ファーストミッションボックスの説明）



ファーストミッションボックスの概要
災害発生時に、最初（First）に参集した人達が迅速且つ適確な初動対応が行えるよう、その任務（Mission）を記載した指示書（カード）と最低限必要となる事務用品を一つの箱（Box）にまとめたものである。
指示書（カード）は、専門的知識を有せずとも誰でも行動できるように単純でシンプルであること、事前に指示書（カード）を作成することで初動時の任務を整理し最優先の行動が明確になる。（First Mission Box®危機管理教育研究所HPより）

12

検討会議（センター会議）実施日程（4月・5月）

【2021年度 第1回】センター会議

日 時：2021年4月8日（木）13：00～15：30
議 題：

1. 新体制の確認
2. 学長の基調説明「大学運営の基本方針」の対応
3. 淑徳地域共生センター（仮称）設置について（ブランディング構想）の検討について
4. 2020年度 大学自己点検・評価報告書の作成（4月19日締切）について
5. 今後のスケジュールについて

【2021年度 第2回】センター会議

日 時：2021年4月15日（木）13：00～15：00
議 題：

1. 新体制の確認（進捗状況）
2. 学長の基調説明「大学運営の基本方針」の対応（学長打合せ内容含）
3. 淑徳地域共生センター（仮称）設置について（ブランディング構想）の検討について
4. 2020年度 大学自己点検・評価報告書の作成（4月19日締切）について
5. 今後のスケジュールについて
6. その他

【2021年度 第3回】センター会議

日 時：2021年4月22日（木）13：00～14：30
議 題：

1. 新体制の確認（進捗状況）
2. 学長の基調説明「大学運営の基本方針」の対応
3. 淑徳地域共生センター（仮称）設置について

（ブランディング構想）の検討について

4. 大学地域支援ボランティアセンター 2021年度事業計画（案）
5. 今後のスケジュールについて
6. その他

【2021年度 第4回】センター会議

日 時：2021年4月29日（木）13：00～16：00
議 題：

1. 淑徳大学地域支援ボランティアセンター長業務、淑徳大学地域支援ボランティアセンター3カ年計画
2. 《第1次：令和4～6年》の実施時期および報告書との関連の確認【資料あり】
3. 淑徳地域共生センター（仮称）設置について～ブランディング構想～
4. 報告書作成スケジュール【資料あり】
5. 報告書柱建て（案）【資料あり】
6. その他

【2021年度 第5回】センター会議

日 時：2021年5月6日（木）13：00～16：00
議 題：

1. 課題整理
2. 中間報告書（案）
3. その他

【2021年度 第6回】センター会議

日 時：2021年5月13日（木）13：00～16：00
議 題：

1. 地域支援ボランティアセンターの発展と強化

（規程との関連）

2. 中間報告書（案）2021年度5月13日更新版
3. 今後のスケジュール
4. その他

【2021年度 第7回】センター会議

日 時：2021年5月20日（木）13：00～15：00
議 題：

1. 地域支援ボランティアセンターの発展と強化（規程との関連）
2. 中間報告書（案）2021年度5月19日更新版
3. 大里綜合管理視察の事前準備
4. 今後のスケジュール
5. その他

【2021年度 第8回】視察実施、中間まとめ案打合せ

日 時：2021年5月27日（木）13：00～15：00

視 察：大里綜合管理視察
視察場所：大里綜合管理株式会社（千葉県大網白里市）
視察対応者：野老 真理子氏
（1985年淑徳大学社会福祉学部卒業）

13

淑徳大学地域支援ボランティアセンターの 発展と強化について（中間まとめ）要旨

1.（検討の経緯）

「淑徳大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化について（中間まとめ）」（以下「中間まとめ」という。）は、山口学長体制での、淑徳ならではの教育、研究、社会貢献、大学運営をチーム淑徳で推進するにあたり、特に、地域支援ボランティアセンターの発展と強化（ブランディング構想）が打ち出されたことを受け、大学地域支援ボランティアセンターを担当する教職員が、2021年4月、5月の2か月間に8回（延17時間）にわたる集中協議を行い、今般、山口学長、米村担当副学長にご説明するもの。【中間まとめ1、13頁関係】

2.（中間まとめが示すもの）

中間まとめでは、大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化をテーマに、大学全体、短期大学部も含めた地域支援ボランティアセンターの発展形を模索した。

そのため、中間まとめでは、これまでの地域支援ボランティアセンターの経緯を踏まえた①発展と強化のイメージの具体化、②発展と強化を具現化する基盤、プラットフォームとして発展改組する「淑徳大学地域共生センター（仮称）」創設について提案することとした。

【中間まとめ2、3頁関係】

3.（大学地域支援ボランティアセンターにおけるボランティア、地域支援の概念整理）

中間まとめの協議では、一般的に使用されている「ボランティア」（概念は一般的に知られている）と「地域支援」（一般的に共有できる概念のようなものは見当たらない）について、本学の目的（学則）と照らし検討した。一般にいうボランティアは直接支援活動を中心としたものと仮定し、本学の示す「人間開発」の一部に相当するものとし、地域支援は、社会資源開発等、地域社会への間接支援（地域住民、産学官等（以下、「地域住民等」という。）による協働の推進を中心としたものと仮定し、本学の示す「社会開発」の一部に相当するものと再整理した。

（「人間開発」「社会開発」と「地域支援」「ボランティア」との関係）

「人間開発」と「社会開発」は、一体的に取り組まれることが重要である。その一体的に行う姿を「淑徳人」と定義した。

淑徳人とは「人間と社会に働きかける存在」であり、学生、教職員、在籍したことのある学生、教職員の全体をさす。淑徳人の姿勢とは、社会事業、社会福祉事業、ソーシャルワーカーの基本的な姿勢に共通するものでもあり、少子高齢人口減少社会における、地域共生社会の実現において重要な行動指針でもある。【中間まとめ4頁関連】

4.（社会福祉教育から出発した総合大学としての淑徳大学の固有の視点）

社会福祉教育から出発し、総合大学となった淑徳大学の固有の教育の視点とは、淑徳人たる人間として、各学部で成長する学生たちの学びの場であり、教職員が働く場である。地域共生社会の実現においては、学びや働きはキャンパス内にとどまらず、地域社会でもあることを強く打ち出す必要があり、その基盤整備が急務である。【中間まとめ5頁関連】

(淑徳大学のポジショニング)

地域住民等にとって、淑徳大学は学びの場、共生の場であること、つまり、淑徳大学は地域社会と共にあることを強く打ち出す(淑徳大学のポジショニング)ことは、山口学長体制における淑徳大学のブランディング構想の1つとして位置づけられることを提案する。

【中間まとめ5頁関連】

5. (大学地域支援ボランティアセンター事業の教育上の位置づけの明確化)

これまで大学地域支援・ボランティアセンターで行われてきた事業は、災害支援(被災地へのボランティア派遣、学習支援、パネルシアター活動、スタディツアー等)、地域支援(地域における認知症サポーター養成等)を実施してきたが、これらについて、いわゆる正課教育と正課外教育との関係では明確に整理してこなかった。

また、現行の仕組みで整理したとしても、正課外の領域に位置づくだけである。しかし、それだけでは大学地域支援ボランティアセンターが目指すものは十分に成しえないことを意識していくべきである。なぜなら、正課外教育という振り分け方では、「正」と「外」が与えるイメージにおいて、現に学生が、教職員が、正課外科目について、正課科目との関係ではそれをサブシステムのよう位置付けたり、補完する科目のように扱ったりしたりしてしまう危険性があるからである。特に、ボランティア活動の推進において、学生の主体性、自主性が排除される環境を形成することは防ぎたい。

【中間まとめ5頁関連】

(「体験学習(ボランティア学習、地域支援学習)」の明確化)

そのため、正課外教育を「体験学習」として捉えなおすことを提案する。そして、その機会は淑徳大学の教育の理念を実現させる重要なものとして、大学のブランディング構想の中で、積極的な予算と人員の配置による基盤整備を、今後計画的に進行管理する必要があることを提案する。

【中間まとめ5頁関連】

(「体験学習」のポリシーへの明示と基盤整備)

「体験学習」とは、従来のような正課外教育科目の決定手順のみならず、すなわち教員が主体となって用意、進行するもののみならず、同窓会、学外の産官民、民間非営利組織(社会福祉法人、NPO等)と連携強化を図り、協働し展開していく必要がある。こうした「体験学習」による成果は、いずれ「ふくし文化」を身にまとう淑徳人(在学生、教職員、同窓生など)そして、「ふくし文化」漂う地域社会が醸成されていくことを目指すものである。

そこで、本学ポリシーには、「知識」「技能」「態度」に加え「体験」を盛り込む必要がある。他大学では、正課外教育をディプロマポリシー、カリキュラムポリシー、アドミッションポリシーに明示している例が確認されている。また、コーディネーターの配置等事務局の強化や専属、兼任教授などの配置も当然に検討されるべきである。

【中間まとめ5頁関連】 【中間まとめ別添資料①(A3判) 関連】

(実現する事務局体制の再編)

特に、事務局体制の再編については検討する必要がある。現在、学部附属組織、大学附属機関において、大学地域支援ボランティアセンターは大学附属機関に属する。新たに「体験学習」を軸とした展開を全学的にすすめるにあたり、限りある職員体制のなかでの関係機関の統合、合併等、効果的・効率的運営の検討は急務であることとした。

【中間まとめ別添資料①(A3判) 関連】

6. (発展と強化の工程表)

発展と強化のイメージは、第1期山口学長の4年間の間におけるタームを想定し、2021年度(現状)、2022年度(立ち上げ)、2024年度(理想形)を工程とした。

しかし、これは、実際は10年、20年とかけていく文化醸成のスタートに過ぎない。

また、これを実現するために、学内外の連携を強化することが重要であり、学内のみの「連携組織」から学内外の参画による「構成組織」へと転換する必要がある。【中間まとめ6頁関連】

7. (淑徳大学地域共生センター(仮称)の創設に向けて)

大学地域支援ボランティアセンターの発展と強化の延長線上にある淑徳大学地域共生センター(仮称)の創設については、現行の関連するセンターについての運営規程を大幅に見直す必要がある。

また、大学協議会資料では、学長が学長特別補佐に、地域支援ボランティアセンターとの統合等を指示されていることから、中間まとめでは、地域連携センターとの連携、統合において、「地域連携」「ボランティア」「地域支援」を包含する概念として「地域共生活動」という定義を新たに設けることを提案した。【中間まとめ7頁関連】 【中間まとめ添付資料②(A3判)関連】

8. (地域共生のネットワーク、社会資源の創出と往還することで深まる実学)

淑徳大学地域共生センター(仮称)が設置されることにより、学内、学外各関係組織、グループとの協働実践がさらに加速し、大学での学びと地域社会での学びが連関し、往還することで、実学の学びが深まることが期待される。【中間まとめ8頁関連】

9. (「ふくし文化」、「ふくし文化」の醸成)

「ふくし文化」という語は、日本福祉文化学会等で福祉文化を、2000年の社会福祉基礎構造改革(厚生省)の審議会で福祉文化がテーマとなっていることを背景に、それ以前より淑徳大学が「大巖寺文化苑構想」「社会福祉の大学」として出発した淑徳大学の歴史文化を継承することを表現する、文化醸成のための概念として検討した造語である。

その理由は、こんにち、総合大学として、人間、地域社会に広く貢献する高等教育機関として、実学教育による各分野の学問は日常生活の充実、さらには、ダイバーシティ、インクルージョン、サステナビリティ、地域包括ケアシステムの深化、地域共生社会の実現といった、各方面が共通に取り組むテーマについて、本学の役割とその目指すものを標榜する社会的責任の明示である。

【中間まとめ9頁関連】

10. (各キャンパス、各学部、短期大学部との役割分担、協働)

淑徳大学地域共生センター(仮称)の設置にあたり、各キャンパスの教職員は非常に多忙で、書類作成に忙殺され余裕のない日々を送っていることは間違いない。そのため現行の仕事をそのままに新たな業務を課すことは「ふくし文化」の醸成にはならず、共生でもなく、強制に過ぎない。現在の教職員の勤務状況、心の健康状態を無視してトップダウンですすめてはならない。

そこで、淑徳大学地域共生センター(仮称)では、専任教授、客員教授の配置、新たにコーディネーターの配置をすすめる等、実行体制の検討なしでは実現しえないことは留意する必要がある。

中間まとめで示している内容は、理念、気持ち、現行の体制のみでは実現できないブランディング構想であり、具体的な進行管理を法人、大学として意思決定する必要がある。その際の、進行管理に必要な守備範囲、ターゲットの想定についての枠組みを原案としてまとめた。これらは幹部、大学改革室等関連者、部署で協議される必要がある。

また、淑徳人(共生実践人材)を育成する“学士課程教育”全体の体系化の中での教学組織と関係性、連動性の検討も必要となろう。【中間まとめ10頁関連】

11. (とりあえずの取り組み)

できることから、目の前にあることからまず取り掛かるという姿勢、方法は重要である。具体的な取り組みとしては、「体験学習」を全学的に展開することを提案する。

例えば、2022年度から全学展開で、ともいき学習プログラム「地域とともに」愛称:「ちっと」「地域とともに」「ちよっと」の造語)を始動させ、これを、2021年度初夏から、大学地域支援ボ

ランティアセンター運営委員会で協議する、あるいは、新たな検討体制を構築し協議するなどの準備が必要である。また、各学部、短期大学部の理解の上で、試行することも考えられる。

【中間まとめ11頁関連】

12. (インタビューから得た示唆～本学卒業生の共生への取り組み視察から)

中間まとめが目指す淑徳大学の地域社会とのあり方について、大里綜合管理株式会社（会長野老真理子氏：1985年社会福祉学部卒）を視察した。野老氏からは、中間まとめの目指す体制づくり、実現には強い覚悟が必要であること、つまり、現に地域社会の課題一つひとつに愚直に、投げ出さず、長い期間を覚悟して取り組む姿勢こそ重要で、目標、目的といったものに拘束されるスタイルでは実現できるものではないという意見もいただいた。

【中間まとめ12頁関連】

以上

淑徳大学の目的等 (学則第1、2条)	大学の役割・使命 (教育基本法第7条)	教育課程（カリキュラム） 正課教育 正課外教育*	淑徳大学地域共生センター開設準備における報告書
〇学則 (目的) 第1条 淑徳大学は、大東仏教の精神に基づき、社会福祉の増進と教育とによる人間開発、社会開発に貢献するとともに、社会福祉の増進と教育とによる人間開発、社会開発に貢献する人材の育成を目的とする。 第2条 本学は、教育研究上の目的及び人材育成に係る目的について学部ごとに定める。	①教育	ディプロマ・ポリシー 本学は、大東仏教の精神に基づき、社会福祉の増進と教育とによる人間開発、社会開発に貢献する人材の育成を目的とする。この教育理念の実現に向け、学則に示す卒業要件を満たし、以下に示す知識・技能・態度を有する者に卒業を認定し、学位を授与する。 【1】社会の福祉員としての基本的知識・技能・態度 (1) コミュニケーション能力及び情報リテラシーを修得している。 (2) 課題発見・問題解決能力を持ち、主体性をもって協力し合う態度を身に付けている。 (3) 人間の文化や社会と自然等に関する広い知識と豊かな人間性を実践的に活用している。 【2】専門教育分野における知識・技能・態度 解を求めている。 (1) 専門分野の基礎である原理・原則を理解し、それに基づいた専門的知識を身につけている。 (2) 修得した知識を、実践の場で活用する技能・能力を身に付けている。	ディプロマ・ポリシー 本学は、大東仏教の精神に基づき、社会福祉の増進と教育とによる人間開発、社会開発に貢献する人材の育成を目的とする。この教育理念の実現に向け、学則に示す卒業要件を満たし、以下に示す知識・技能・態度を有する者に卒業を認定し、学位を授与する。 【1】社会の福祉員としての基本的知識・技能・態度 (1) コミュニケーション能力及び情報リテラシーを修得している。 (2) 課題発見・問題解決能力を持ち、主体性をもって協力し合う態度を身に付けている。 (3) 人間の文化や社会と自然等に関する広い知識と豊かな人間性を実践的に活用している。 【2】専門教育分野における知識・技能・態度 解を求めている。 (1) 専門分野の基礎である原理・原則を理解し、それに基づいた専門的知識を身につけている。 (2) 修得した知識を、実践の場で活用する技能・能力を身に付けている。
②社会貢献	社会に還元	社会貢献 淑徳大学ヴィジョン 共生社会の創出をめざして —継承と改革— ①教育の方向 利他共生の精神を礎とし、学工としての基本能力を備え、様々な分野で活躍する共生実践人材を育成する。 ②社会との関係 地域社会に根ざし、世界にも開かれ、地域への貢献と世界との交流を拡大する。 ③大学の運営 教職員一体で大学の仕組み・運営を見直し、教育改革や組織変革を推進する。	社会貢献 淑徳大学ヴィジョン 共生社会の創出をめざして —継承と改革— ①教育の方向 利他共生の精神を礎とし、学工としての基本能力を備え、様々な分野で活躍する共生実践人材を育成する。 ②社会との関係 地域社会に根ざし、世界にも開かれ、地域への貢献と世界との交流を拡大する。 ③大学の運営 教職員一体で大学の仕組み・運営を見直し、教育改革や組織変革を推進する。
③研究	社会に還元	研究 淑徳大学地域共生センター開設準備における報告書	研究 淑徳大学地域共生センター開設準備における報告書

地域支援ボランティアセンターの発展と強化に向けて（プランディング構想）～規程からの視点～

令和3年度【現在】		令和4年度【強化・発展後】		令和6年度以降【理想】
地域支援ボランティアセンター		地域共生センター（名称変更+α）		地域共生センター（実質化）
（センターの目的） 第2条 センターは、淑徳大学(以下「本学」という。))の全学的な地域支援ボランティア活動に関する事項を取り扱い、本学的な地域支援ボランティア活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的とする。	（センターの目的） 第2条 センターは、淑徳大学(以下「本学」という。))の全学的な地域支援ボランティア活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的とする。	（センターの目的） 第2条 センターは、淑徳大学(以下「本学」という。))の全学的な地域支援ボランティア活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的とする。	（センターの目的） 第2条 センターは、淑徳大学(以下「本学」という。))の全学的な地域支援ボランティア活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的とする。	（センターの目的） 第2条 センターは、淑徳大学(以下「本学」という。))の社会連携・社会貢献活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を教育と社会貢献に資することを目的とする。
人材育成には、【体験】が重要であり、センターはこの【体験】学習（正課外教育）の共通基盤を作る役割を担う。（確認）	（定義） 第2条の2 この規程で使用する用語の定義は、次に掲げるとおりとする。 (1) 地域共生活動とは、第2条の目的を達成するために行う活動という	（定義） 第2条の2 この規程で使用する用語の定義は、次に掲げるとおりとする。 (1) 地域共生活動とは、第2条の目的を達成するために行う活動という	（定義） 第2条の2 この規程で使用する用語の定義は、次に掲げるとおりとする。 (1) 地域共生活動とは、第2条の目的を達成するために行う活動という	（定義） 第2条の2 この規程で使用する用語の定義は、次に掲げるとおりとする。 (1) 地域共生活動とは、第2条の目的を達成するために行う活動という
（業務） 第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するために、次の業務を行う。 (1) ボランティア活動が必要とする支援ニーズの把握に関する事項 (2) ボランティア活動の企画及び実施に関する事項 (3) ボランティア活動の情報発信と広報に関する事項 (4) 各キャンパスで取り組むボランティア活動の情報共有と調整に関する事項 (5) その他必要な事項	（業務） 第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するために、次の業務を行う。 (1) 地域共生活動が必要とする支援ニーズの把握に関する事項 (2) 地域共生活動の企画及び実施（学内共通基盤の構築を含む）に関する事項 (3) 災害支援活動の迅速な支援展開環境整備に関する事項 (4) ふくしマイノリティの醸成に関する事項 (5) 地域共生活動の情報集約・発信と広報に関する事項 (6) 各キャンパスで取り組む地域共生活動の情報共有と調整に関する事項 (7) その他必要な事項	（業務） 第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するために、次の業務を行う。 (1) 地域共生活動が必要とする支援ニーズの把握に関する事項 (2) 地域共生活動の企画及び実施（学内共通基盤の構築を含む）に関する事項 (3) 災害支援活動の迅速な支援展開環境整備に関する事項 (4) ふくしマイノリティの醸成に関する事項 (5) 地域共生活動の情報集約・発信と広報に関する事項 (6) 各キャンパスで取り組む地域共生活動の情報共有と調整に関する事項 (7) その他必要な事項	（業務） 第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するために、次の業務を行う。 (1) 地域共生活動が必要とする支援ニーズの把握に関する事項 (2) 地域共生活動の企画及び実施（学内共通基盤の構築を含む）に関する事項 (3) 災害支援活動の迅速な支援展開環境整備に関する事項 (4) ふくしマイノリティの醸成に関する事項 (5) 地域共生活動の情報集約・発信と広報に関する事項 (6) 各キャンパスで取り組む地域共生活動の情報共有と調整に関する事項 (7) その他必要な事項	（業務） 第3条 センターは、前条に規定する目的を達成するために、次の業務を行う。 (1) 地域共生活動が必要とする支援ニーズの把握に関する事項 (2) 地域共生活動の企画及び実施（学内共通基盤の構築を含む）に関する事項 (3) 災害支援活動の迅速な支援展開環境整備に関する事項 (4) ふくしマイノリティの醸成に関する事項 (5) 地域共生活動の情報集約・発信と広報に関する事項 (6) 各キャンパスで取り組む地域共生活動の情報共有と調整に関する事項 (7) その他必要な事項
（連携する組織） 第4条 センターは、前条に規定する業務を遂行するに当たっては、各キャンパスのボランティア活動担当窓口と連携を図るものとする。	（連携する組織） 第4条 センターは、前条に規定する業務を遂行するに当たっては、学内外の関係する機関、部局、部局、委員会等及び各キャンパスの地域支援ボランティア活動担当窓口と連携を図るものとする。	（連携する組織） 第4条 センターは、前条に規定する業務を遂行するに当たっては、学内外の関係する機関、部局、部局、委員会等及び各キャンパスの地域支援ボランティア活動担当窓口と連携を図るものとする。	（連携する組織） 第4条 センターは、前条に規定する業務を遂行するに当たっては、学内外の関係する機関、部局、部局、委員会等及び各キャンパスの地域支援ボランティア活動担当窓口と連携を図るものとする。	（連携する組織） 第4条 センターは、前条に規定する業務を遂行するに当たっては、学内外の関係する機関、部局、部局、委員会等及び各キャンパスの地域支援ボランティア活動担当窓口と連携を図るものとする。
（構成） 第5条 センターは、センター長、副センター長及びセンター員で構成する。	（構成） 第5条 センターは、センター長、副センター長及びセンター員で構成する。	（構成） 第5条 センターは、センター長、副センター長及びセンター員で構成する。	（構成） 第5条 センターは、センター長、副センター長及びセンター員で構成する。	（構成） 第5条 センターは、本学教職員、同窓会、地域の方等をもって構成する。 2 センターにセンター長、副センター長及びセンター員を置く。

2022（令和4）年 3月12日

淑徳大学 地域支援・ボランティアセンター

令和4年度 淑徳大学地域支援・ボランティアセンターの運営等について（合意・共有事項）

2022年度に検討を開始した、学長指示事項である地域支援・ボランティアセンターの発展と強化については、センター員（教職員）協働でその考え方と実施方法を検討してきました。また、令和4年度には、大学に地域共生センターの創設が予定されています。

つきましては、令和4年度は、地域共生センターの創設と基盤整備など（令和5年度は、全学共通カリキュラム実施の年でもあります）、を行う時期であることから、地域共生センターの本格実施を想定した、地域支援・ボランティアセンターの発展と強化については、学長、担当副学長のもと、この間のセンター員協議を踏まえ、以下により運営する方針等を取りまとめました。例年はこうした文書を作成していませんが、令和4年度は新規立ち上げの正念場となりますので、特に関係者間で共有することとします。

記

1. 地域支援・ボランティアセンター（地域共生センター）と教育との関係

地域支援・ボランティアセンターの発展と強化にあたっては、本学の教育理念である「人類福祉の増進と理想的な人間社会の実現に資する人材」を育成するため、「知識」「技能」「態度」の3つの教育目的との完成性を意識しているものである。しかし、大学構内というエリアを超えて、地域支援・ボランティア活動の領域は無限に広がる。したがって、これらは正課教育の実践だけでは十分ではないことを認識している。そこで、地域共生センターでは、各学部や全学共通カリキュラムの「正課教育」における関連科目の達成とともに「体験学習」¹を展開し、すべての教育目的を達成することを目指す。

「体験学習」とは建学の理念である「“利他共生”によって、他者と向き合い、共にいき、共に生かす社会の実現と、生涯にわたり地域社会に貢献する」²という生き方、「ふくし文化」³の醸成に寄与し、他者との関係性を通して自己理解を深め、自分らしい生き方を模索することを目的とする。

2. 体験学習の創設と系統化

利他共生、地域共生の考え方、ふくし文化の実現に向けて、学生、教職員、同窓生、地域住民が、こ

-
- 1 正課教育（科目）に対して正課外教育（科目）と称されることも多いが、内か外かを意識するのではなく、成果教育ではないという意味内容を地域共生センター事業・活動の中で明確にするため「体験学習」とした。地域共生に関係する「体験学習」の機会には地域共生センターで行う。「体験学習」の定義は、「学生一人ひとりの成長に寄り添いながら、地域で学び地域で活かすことができるよう、地域共生センターが体験学習を系統化させた「ともいき学習プログラム」等の履修によるもの。「地域とともに」を愛称：「ちっと（仮称）」とした。
 - 2 この考え方や山口学長のメッセージで多くつかわれているもの。この生き方・考え方を地域共生センターは共鳴し、個々人の取り組みを、さらに拡張し、地域社会における互酬、あるいは連帯といったつながりかたにおけるソーシャルサポートの展開を目指し、これを地域社会の市民の礎とする。
 - 3 地域共生センター活動を含め、淑徳大学の活動、存在が利他共生であり、これをめざした状態が「ふくし文化」であるという発想。今後、その意味内容は事業・活動によって言語化され、その状態が当たり前の価値観となる際に表現される新用語。

これらの目的意識を共有し、多様な活動や発想を尊重し、各人（組織）が主体的に活動できるよう、特に、学生については、学生生活の中にこれらの思想が体感できる環境を整備するために、入学直後から情報の入手、考え方に触れ、体験・参加できるといった系統だった「地域共生型体験プログラム」を整備する。学生は、これらのプログラムを主体的に選択し、活用しながら、本学の建学の精神や伝統に触れたり、学生生活に奥行きをつくる友人・知人、地域関係を構築する他、正課科目以外の視点で、大学（時代）に学ぶ意味を考えながら、体験学習ができるようになる。地域支援・ボランティアセンターで検討されたこの考え方は、地域共生センターに継承され、令和4年度以降、全学的にプログラムは展開される。

3. 体験学習プログラムの創設

ボランティア活動、地域活動を行っている学生は〇〇であり、（学生実態調査等から引用）活動をしている学生とそうではない学生（例えば、学生時代に一度もボランティア活動をしたことがない学生）がおり、していない学生の方が多い。淑徳大学の歴史的経緯、精神のなかで、この数値は、利他共生を標榜する大学として危機意識をもつ。

しかし、現在、大学生生活期とは、やがて納得のいく進路を確定し社会人となる標準4年間であり、この時期には、国家資格や免許の取得はもちろん、厳格な授業形態（事前・事後学習の必須化）、サークル活動やアルバイト等との両立のなかで学生の自由な時間が少なくなっている。また、介護等体験（教員免許関係）、実習（ヒューマンサービス関連資格）では、社会福祉に関する現場体験等が必修化されているが、これは、地域支援やボランティア活動ではない。

そうしたなかで、忙しい学生が、自らの自由な時間の一部を、利他共生、地域共生の思想を体験する時間につかうという挑戦を地域共生センターは促進する立場で支援する。用意される体験学習プログラム⁴は、学生はもちろん、教職員、同窓生、地域住民、関係機関等にも通用する内容であり、広く参加を呼び掛けていく。

あくまでも、主体性が必要であり、義務でも強制でもない。目標管理や何らかの指標における項目とすることも好まない。地域共生センターはボランティアという生き方を施行するが、学生、教職員は地域支援やボランティア活動に参加しないという選択肢はあるのである。しかし、地域共生センターはそうした参加しない人々にも、人類の共生のために働きかけ続ける。

4. 体験学習プログラムの構成

令和4年度より準備、令和5年度に本格実施を構想している体験学習プログラムは、地域共生センターが大学生生活期のみならず、卒業後の生涯にわたりつながり続けるプラットフォームである。こうした、地域社会における教育プログラムは、4つのステップで構成している。

ステップ1は、導入期であり、新入生（あるいは初年次、編入生を対象）やこれからこうした活動に関心がある人を対象にした情報提供のステップである。新型コロナウイルスの蔓延にともない動画視聴の環境が普遍化しつつあることから、オンデマンドによる動画を用意した。「福祉のこころ」と題する淑徳大学ともゆかりが深い阿部志郎先生他、本学卒業生などの考え方、教えを手掛かりに、自らの態度・行動を検討する作業を進めていく機会を得ることができる（令和4年度中実施予定）。

ステップ2は、形成期であり、学生生活4年間の中で経験される。地域社会での自らの思考を意識し、行動してみることを想定している。地域社会の中で、全ての人の課題ともいえる「災害（防災）」「認知症」に焦点をあて、オンデマンドの動画の他、被災地の復興状況の現地視察（スタディツアー）、大学地域における防災活動の検討（ワークショップ）、認知症について地域住民と交流し共に学び理解し合う機会（養成講座）を用意した（令和4年度中実施予定）。

4 「体験学習プログラム」は令和3年度に地域支援ボランティアセンターで構想され、令和4年度に地域共生センター事業として準備され、令和5年度に本格実施を構想しているプログラムのこと。

ステップ3は、完成期であり、この期間は人生、生涯にわたり長いスパンで理解していく。また、ステップ4は、熟成期であり、地域共生センターの機能を自らが活用しながら、各人が自由自在に利他共生、地域共生の活動、事業を展開するという人間像である。ステップ3、ステップ4は令和5年度以降、組織体制の確立とともに展開が図られる。

図

STEP 1（導入期）：見て触れて感じて

STEP 2（形成期）：やってみる

STEP 3（完成期）：社会に出る

STEP 4（熟成期）：自己研鑽

※ 本プログラムは、社会人・地域等の方々など、学生以外にも対象に開講し、系統化した体験学習プログラム（履修証明プログラム）として開設し、その履修者に対して、学校教育法（法第105条等）に基づく履修証明書を発行する。

※ 4つのSTEPに分けて構成する。学生自身が4年間及び卒業後の学びを組み立てる中で、自由にタイミングを選択し参加する。

STEP 1（導入期）： 見て触れて感じて	STEP 2（形成期）： やってみる	STEP 3（完成期）： 社会に出る	STEP 4（熟成期）： 自己研鑽
1. 導入セミナー			
2. 復興支援等プログラム			
3. 災害支援プログラム			
4. 認知症サポーター養成講座			
5. 人間開発プログラム			
6. 卒業生プロジェクト			
7. 社会開発プログラム			
8. 生涯学習事業及び教育プログラム（社会人の学び直し含む）			

(参考資料)

令和4年度地域共生センターの創設に向けた、地域支援ボランティアセンターメンバーの検討作業事項

1. センターの構成など（令和4年度）

(1) 構成

(担当副学長 米村美奈)

センター長

副センター長

センター員

- ・地域支援ボランティアセンターの事業についての運営管理（各キャンパスへの協力依頼）
- ・地域共生センター創設（地域支援ボランティアセンター業務の移行）に向けた諸準備

(2) 地域共生センター創設に伴う地域支援ボランティアセンター運営委員会との関係

- 1) 令和4年度内に地域共生センターが創設されることに伴い、現地域支援ボランティアセンター運営委員会は実施しない（令和4年度地域支援ボランティアセンターの事業計画案は前回委員会で決定済）。
- 2) 地域共生センター設置に伴う、学部、キャンパスの委員会設置の検討、関係附属機関との連携は、目的の実現可能性が高く、より機動力のある組織を目指し、地域共生センターの設置規程等の整備と並行し新たに進めることとする（現行地域支援ボランティアセンター運営委員会の委員構成を見直す）。

2. 事業検討案（たたき台）

●淑徳大学の教育の理念を実現させる「体験学習」（ボランティア学習・地域支援学習）の基盤整備

1. 導入セミナー・ボランティア講座の実施の検討・準備（新規）

- ・淑徳大学学生、教職員、同窓会等に向けて、地域活動や社会貢献に関する活動の意義や実際等について、普及、促進する機会を検討・準備（本格実施は令和5年度以降）する。

●淑徳TOMOIKI 라이브ラリーの制作

他者と向き合い共に生き、共に生かし合う社会の実現と、生涯にわたり地域社会に貢献するという生き方とは何か・ふくし文化の醸成とは何かを、実践してきた方々にそれぞれの歩んできた経験や信念を講じていただき今後展開するプログラムの導入教材とすることを目的に下記の通り動画の制作をする。

1) 阿部志郎先生 テーマ「福祉のこころ」 ※全学共通必修科目でも使用予定。

（横須賀キリスト教社会館会長。日本を代表する社会福祉実践家。学校法人明治学院理事長、東京女子大学理事長、日本社会福祉学会長、日本キリスト教社会福祉学会会長等を歴任。キリスト教功労者。）

2) 淑徳大学 川眞田 喜代子先生（社会福祉学部1期生）テーマ「淑徳文化」（仮称）

（本学1期生。淑徳大学を代表する卒業生。淑徳大学客員教授）

3) 岩佐勝先生（社会福祉学部10期生）テーマ「震災を経て、共生とは ～防災と淑徳大学」（仮称）

（元宮城県石巻市大須中学校校長。震災直後から雄勝町大須小学校避難所責任者として対応にあたる。同避難所での支援活動、その後の学習支援ボランティア等の学生ボランティアにもご尽力。）

4) 野老真理子氏（社会福祉学部1985年卒業）テーマ「地域と共に」（仮称）

（大里綜合管理会社 代表取締役社長、NPO 法人大里学童 KBA スクール代表。'08年千葉県男女共同参画推進事業所表彰（奨励賞）、'10年「子どもと家族を応援する日本」内閣府特命担当大臣（少子

化対策）表彰、地域づくり総務大臣表彰（個人表彰）。’16年千葉日報千葉教育大賞特別賞。）

※体験プログラム導入教材として活用されるほか、正課科目「地域活動と社会貢献」等における活用も可能。

2. 復興支援等プログラムの実施（継続）

I）学習支援ボランティアの継続に向けた検討（あり方検討）

学習支援ボランティアの受け入れ先（雄勝中学校）校長への聞き取り調査では、今までは震災の心のケアを含めた学習支援を受け入れていたが、過疎化も進んだ今は、学力低下や共働きと核家族化によるこどもの孤立が深刻な課題であるにとらえているとのこと。現地のニーズは、学習支援については、中学生の学力向上に資する、教育能力のある学生ボランティアであり、そうした経験がある学生に中期の滞在を望みたいところ。また、放課後児童クラブを令和4年度より実施するので、保育の専門、経験等のある学生に短期間（2、3日）ではなく、夏休み期間の長期休暇時にボランティア支援を検討することも考えられるとのこと（2021.11.30）。今後、ヒアリング調査結果を受けて、本学の学内事情と照らし合わせながら、先方のニーズに応える支援ができるかを検討していく。

II）パネルシアターキャラバンの実施（継続）

「パネルシアターキャラバン」は淑徳大学発祥の「パネルシアター」を担いで学生自ら演じ、子ども達を始め被災地の方々の心のケアの支援を行うとともに、本学の建学の精神を体験的に学ぶことを目的に施設を巡回し実施してきた。パネルシアターを通して多くの笑顔が花開くように広がることを願いながら続けてきた本活動は、被災地からも愛され、他大学のパネルシアターにおける復興支援活動の先駆的な活動となっている。

藤田先生を中心に実施されてきたが、次年度以降はこども教育学科の松家 まきこ先生に引継ぎ、実施する予定となっている。今後も、藤田先生にも継続して関わっていただけるよう、予算を含め必要な体制の構築をすすめる。

III）スタディーツアーの実施（継続・改変）

スタディーツアーは、東日本大震災被災地に訪問し、現地の状況を視察・学習することをこれまでの目的としていたが、令和4年度からは本格的に、被災地を知ることのみにとどまらず、自らの地域に災害が起こった時を想定し、災害時・平時のとりくみについて考えることができる機会を得ることを目的に衣替えする。令和3年度のスタディーツアーより目的を改め実施する。

3. 災害支援プログラム（新規）

I）平常時：

- ・災害時に避難所となりうる淑徳大学の地域貢献のあり方についての検討と学習

（例：ファーストミッションボックスの作成とワークショップ）

ファーストミッションボックスとは、災害発生時に、最初（First）に参集した人達が迅速且つ適確な初動対応が行えるよう、その任務（Mission）を記載した指示書（カード）と最低限必要となる事務用品を一つの箱（Box）にまとめたもの。協力企業と大学・学生とワークショップをしながら、作成していくことを検討。

※上記については、スタディーツアー等に参加した学生や関心のある学生等と県内先行事例の視察等のフィールドワークの機会を同時に企画しながらすすめることとする。

II）災害発生時：

- ・国内外で発生した自然災害時の募金活動等全学的支援の実施

- ・国内で発生した自然災害時のボランティア活動の実施検討
- ・新型コロナウイルス感染症対策下でのボランティア活動に関する全学的支援の実施

4. 認知症サポーター講座（継続）

- ・各キャンパス・学部での本講座の積極的实施
- ・教職員の積極的受講（中期的目標）
- ・地域住民等学外関係者への本講座の参加促進と相談体制づくりの検討

5. 人間開発プログラム（新規・検討）

- ・各キャンパスの地域の交流の場と教職員・学生のボランティアの場として開放し、様々な人と出会いながら、学び・発見・喜びなどの経験を通して学ぶプログラムを検討

6. 卒業生プロジェクト（新規・検討）

- ・同窓会・各支部の同窓会と協働し、学生・卒業生が共に活動し、卒業生が培ってきた淑徳文化を継承する活動を検討。

7. 社会開発プログラム（地域活性化プログラム）（新規・検討）

- ・地域の中に入り、活動を進めて行く際に必要な支援を地域で暮らす様々な人たちと共に行う活動を検討。

8. 生涯学習事業及び教育プログラム（社会人の学び直し含む）

ふくし文化・地域活動に興味・関心のある方、すでに活動を行っている方、今後更に広げたい、深めたいと考えている方を対象に募集することを検討。

●履修証明書交付要件と講義

- ・本プログラムは【講義型（座学）】と【実践型（体験プログラム）】にて展開する。
- ・【講義型（座学）】は従来の授業開放科目より選択。
- ・【実践型（体験プログラム）】体験プログラム（1～7）より選択。
- ・修了（終了）要件を満たした履修生に対し、履修証明書を発行する。

（メモ）社会教育士をヒントにするかどうか、研究する。

淑徳大学地域共生センターの創設

I. 目的（案）

- センターは淑徳大学の社会連携・社会貢献活動に関する事項を取り扱い、本学の建学の精神「共生の理念と実学教育」を行動化し、その実践を社会貢献に資すること及び地域との産学官連携事業等を通じて、地域社会の活性化及び発展に寄与することを目的とする。
- センターは学生・院生、卒業生等（聴講生、科目等履修生、過去に在籍していた者を含む）、教職員等（過去に在籍した教職員等を含む）が、生涯にわたり地域社会に貢献するという生き方、共生の精神、ふくし文化の醸成に寄与することを目的とする。本目的を達成するために行う活動を「地域共生活動」という。

II. 業務（案）

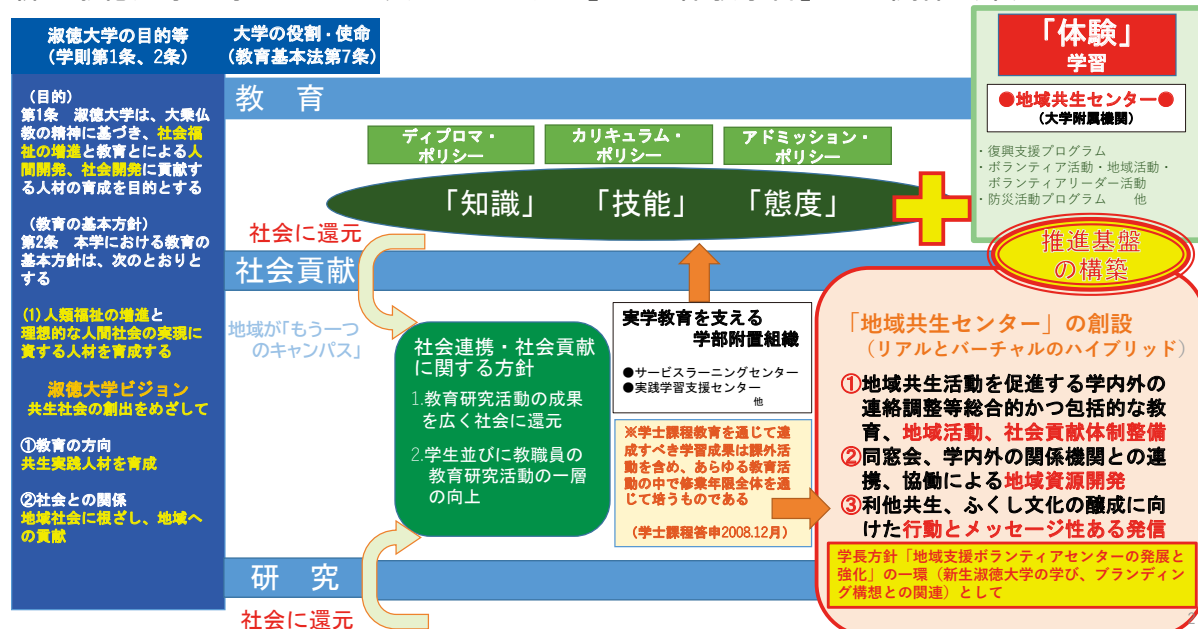
- 地域共生活動を必要とする支援ニーズの把握に関する事項
- 地域共生活動の企画及び実施に関する事項
- 災害支援活動の迅速な支援展開及び環境整備に関する事項
- ふくし文化の醸成に関する企画及び実施に関する事項
- 地域共生活動の情報集約・発信と広報に関する事項

III. 開設予定時期（案）

令和5年4月1日より本格実施（※令和4年10月よりモデル実施予定）

1

新生淑徳大学の学びと「地域共生センター」の「体験学習」との関係（案）





New!

ともいき学習プログラム

ともプロ

全学部学科在学生対象：淑徳大学認定プログラム（イメージ）

共生社会の創出をめざして（淑徳大学ビジョン）

なぜ、いま「地域共生センター」なのか。2040年に向けて、大学は地域社会の中で主体性をもって公益を追求

ともいき体験

体験を通して自分で感じる。考える
本学の建学の精神や伝統に触れながら、ボランティア活動や地域活動を始め、災害・復興支援プログラムなど、本学独自の様々な実践活動。学生自ら目的意識を持ち活動するプログラムや、地域で学び地域で活かすプログラムを展開。

ともいき基礎知識講座（T-BASIC）

福祉のところで地域を耕す
本学の建学の精神「利他共生」の原点を学ぶともいき基礎知識講座。福祉・淑徳・共生をキーワードに「ともいき」を生涯にわたり実践してきた方々から想いや信念を学ぶ生きた動画ライブラリー

通称：ともプロ
人とともに
地域とともに
プログラム

淑徳大学ならではの体験学習。ともいき体験。

ともいき基礎知識講座
(T-BASIC)

全学基礎教育科目
(S-BASIC)

「S-BASIC」と「T-BASIC」
は車の両輪の関係

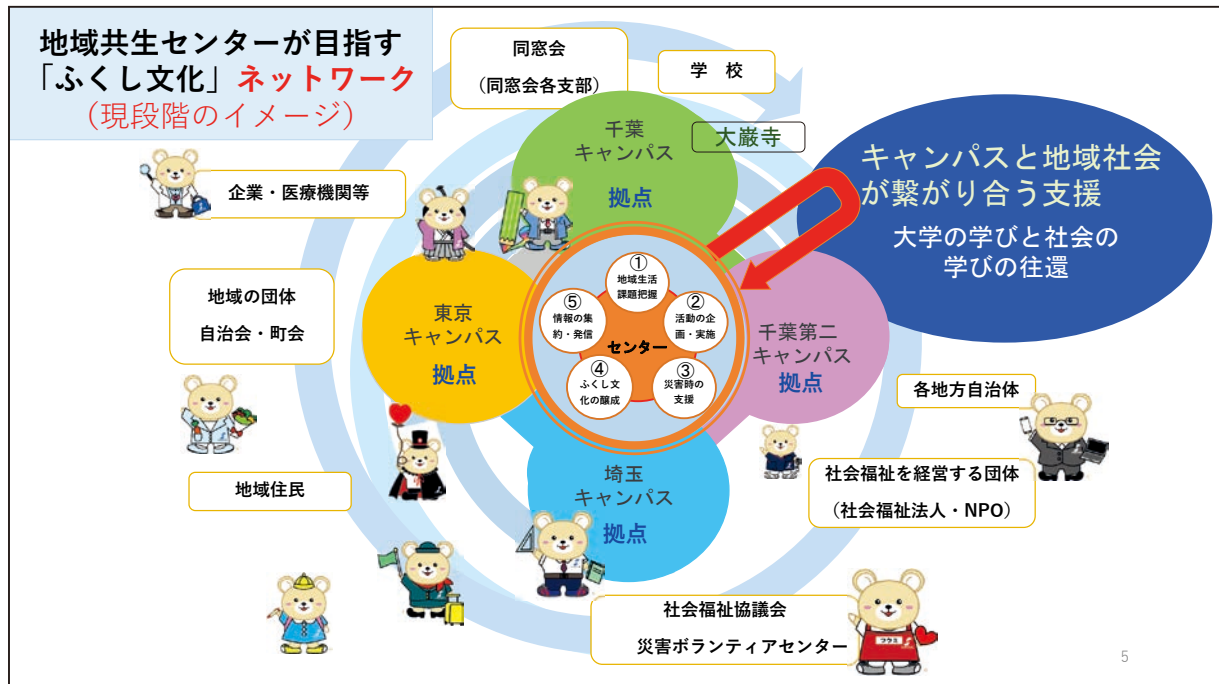
認定証イメージ（デジタルバッジを検討）

全学基礎教育科目（S-BASIC）

生涯、学び続けるための基礎固めをする
これからの社会を生き抜くために必要な基本的な力（知識・技能・態度）が身につく淑徳大学ならではの基礎教育カリキュラム（令和5年4月スタート）

写真イメージ：プリDESTスタイル株式会社HPより引用

4



 【総括表】「ともいき学習プログラム」カリキュラム表（案） 						
			在学生対象		社会人対象	
	科目/プログラム種別	科目名/プログラム名	時間/h	【淑徳大学認定プログラム】 Sベシック・ともいきコーディネータープログラム（在学生向け）	【淑徳大学履修証明プログラム】 地域共生リーダープログラム（社会人・卒業生向け）	備考
B T A S I C	地域共生基礎知識講座 （T-BASIC） ※動画資料教材	①「福祉のこころ」：阿部 志郎先生	1	必須	必須	
		②「淑徳文化」：川真田 喜代子先生	1	必須	必須	
		③「災害から命を守る」：岩佐 勝先生	1	必須	必須	
		④「地域とともに」：野老 真理子先生	1	必須	必須	
と も い き 体 験	ともいき体験 （ちょっと体験・通称→ちっと） ※実践活動	①復興支援プログラム（スタディツアー）	12	体験プログラムから〇〇時間以上 活動	体験プログラムから選択	
		②復興支援プログラム（パネルシアターキャラバン）	12			
		③ボランティア活動・地域活動・ボランティアコーディネート活動				
		④防災活動プログラム（ファーストミッションBOX）	12			
		⑤災害支援活動プログラム（災害時のボランティア活動）	12			
		⑥人間開発・社会開発プログラム（サロン・地域ミュージアム）	12			
S I B A S I C	全学基礎教育科目 （S-BASIC） ※正課教育	全学部全学科共通科目： 人間力の養成（地域活動と社会貢献）、学習力の養成（利他共 生）他、設定予定	12	必須		
			12	必須		
			12	必須		
			12	必須		
			12	必須		
			12	必須		
			12	必須		
公 開 講 座	ともいき公開講座 ※将来的にT-BASICに統合もあり	①淑徳卒業生による民生委員・児童委員フォローアップ講座	6	6 選択 6 6 6	1.5H×6時間（複数選択必須）	令和5年度以降 順次開講予定 （構想中）※
		②認知症ケア・認知症サポーター養成講座	6			
		③お一人さま講座～1人で地域で生きていく。（消費者教育講座）	6			
		④淑徳大学 介護講座	6			
		⑤コミュニティ講座	6			

※公開講座検討案メモ：「戦争・紛争・平和」「淑徳人の社会貢献～70歳からのソーシャルワーク」「・老いても働く。地域で働くとは。」他

履修合計60時間以上

令和４年度

淑徳大学地域支援ボランティアセンター活動報告書

淑徳大学地域支援ボランティアセンター

〒260-8701 千葉県千葉市中央区大巖寺町200

TEL.043-265-7331（代表） FAX.043-265-8310（代表）

